平成18年度

# 大阪市内埋蔵文化財包蔵地
# 発 掘 調 査 報 告 書

2008.2

大阪市教育委員会
㈶大阪市文化財協会

# 例　　言

1．本報告書は平成18年度の国庫補助事業による大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたもので、平成19年度事業により作成した。

2．これらの調査は大阪市教育委員会が㈶大阪市文化財協会に委託して実施したものである。

3．本報告書の執筆は㈶大阪市文化財協会　南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告に記してある。

4．本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護担当において行った。

# 目　　次


Ⅰ　北　区

安曇寺跡推定地Ｂ地点における発掘調査（ＡＺ06－１）報告書 …… 3

豊崎遺跡発掘調査（ＴＳ06－１）報告書 …… 13

Ⅱ　中央区

難波宮跡・大坂城跡発掘調査（ＮＷ06－４）報告書 …… 19

大坂城跡発掘調査（ＯＳ06－10）報告書 …… 27

上本町北遺跡発掘調査（ＵＮ06－１）報告書 …… 31

上本町北遺跡発掘調査（ＵＮ06－３）報告書 …… 35

Ⅲ　西　区

江戸堀１丁目における埋蔵文化財発掘調査（ＥＤ06－１）報告書 …… 47

Ⅳ　天王寺区

大坂城跡発掘調査（ＯＳ06－３）報告書 …… 53

難波京朱雀大路跡発掘調査（ＮＳ06－１）報告書 …… 57

上本町南遺跡発掘調査（ＵＳ06－２）報告書 …… 63

Ⅴ　淀川区

宮原遺跡発掘調査（ＭＨ06－１）報告書 …… 73

Ⅵ　旭　区

森小路遺跡発掘調査（ＭＳ06－１）報告書 …… 79

Ⅶ　阿倍野区

阿倍野筋南遺跡発掘調査（ＡＳ06－２）報告書 …… 87

丸山古墳発掘調査（ＭＡ06－１）報告書 …… 97

Ⅷ　東住吉区

桑津遺跡発掘調査（ＫＷ06－２）報告書 …… 103

天美西遺跡発掘調査（ＡＡ06－１）報告書 …… 107

Ⅸ　住吉区

住吉行宮跡発掘調査（ＳＮ06－１）報告書 …… 125

Ⅹ　平野区

長原遺跡発掘調査（ＮＧ06－５）報告書 …… 131

# 北　　区

# 安曇寺跡推定地Ｂ地点における
# 発掘調査（ＡＺ06－１）報告書

・調 査 個 所　大阪市北区堂山町88－1他

・調 査 面 積　49㎡

・調 査 期 間　平成18年5月30日～6月6日

・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会

・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、藤田幸夫

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は、安曇寺跡推定地に位置する(図１)。本調査に先立ち大阪市教育委員会が実施した試掘調査で、中世以前と推定される地層が検出され、その層の下から弥生土器が出土したことから本調査を実施した。安曇寺跡推定地の発掘調査は、今回の調査地の南方に位置する太融寺境内で2005年度に実施している[大阪市文化財協会2006・松尾信裕2006]。その調査では、中世の遺構や遺物が多く見つかり、周辺での調査が注目された。

今回の調査は、既存の建物基礎等による影響が少ないと想定される個所に調査区を設定して行ったが、調査区西側は旧建物基礎によって攪乱されていた。

調査では近・現代堆積層を重機で掘削し、それ以下については、人力で掘削した。

本報告で使用した方位は磁北で、水準はT.P.値(東京湾平均海水面値)を使用し、本文・挿図ではTP+○mと記す。

図１　調査地位置図

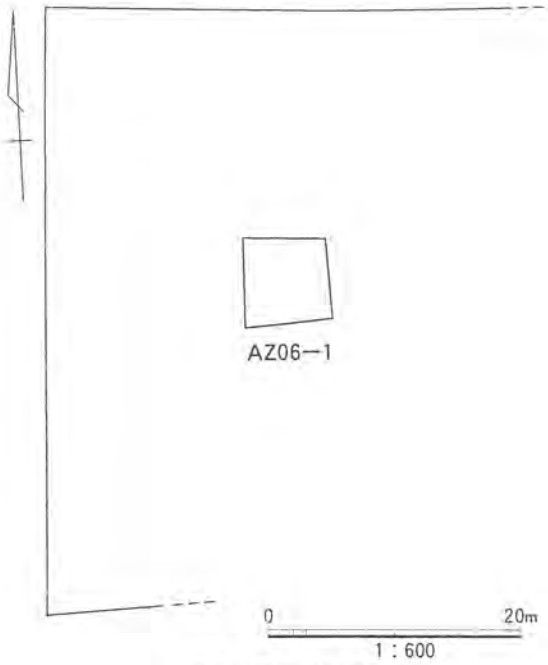



図２　調査区配置図

〈調査の結果〉

1．層序(図３・５)

第０層：近代以降の盛土層である。

第１層：黄褐色(10YR5／6)の細粒砂質シルト層で、上部は削平されている。後述する江戸時代の遺構はこの面から掘込まれている。層厚は約40cmである。

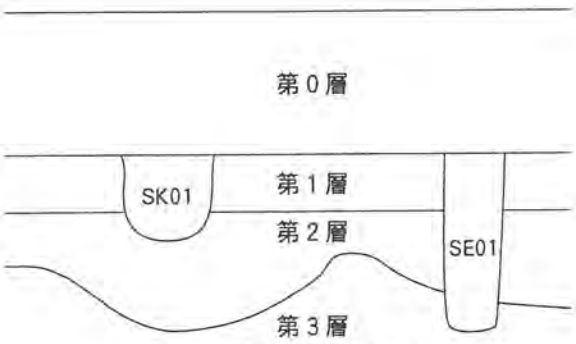


図３　地層と遺構の関係図

第２層：明黄褐色(2.5Y6／6)細粒砂層で、下層の地山層に似る。層中には瓦器・須恵器・土師器の細片が少量含まれていた。中世の盛土層あるいは遺構埋土である。層厚は、最大で約40cmである。

第３層：明黄褐色(10YR7／6)細粒砂層で地山である。この層の上面には凹凸が見られる。古流向は東から西である。

2．遺構と遺物

弥生時代の土器(図４)

1は試掘調査で出土した弥生時代中期の壺の胴部上半で、本調査では確認していないが、第２層と第３層の間に弥生時代の包含層の存在が推定される。

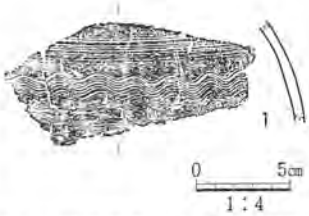


図４　試掘調査出土遺物実測図

中世の遺構と遺物(図６・８)

第３層の上面に落込みが認められた。これらは、第２層を埋土とするもので、人為的なものであるかは判明しなかったが、深さは最大で0.4mを測るものである。第２層から瓦器2・灰釉陶器3などが少量出土したが、細片のため図示できるものは少ない。瓦器2は椀の底部の破片である。高台は低く、形骸化したものである。

江戸時代の遺構と遺物(図７～10)

第１層上面から掘込まれる土壙や井戸がある。柱穴や礎石などは検出されなかった。

これらの遺構の時期は、出土した遺物から、18世紀前半から19世紀であることが判明した。ここ

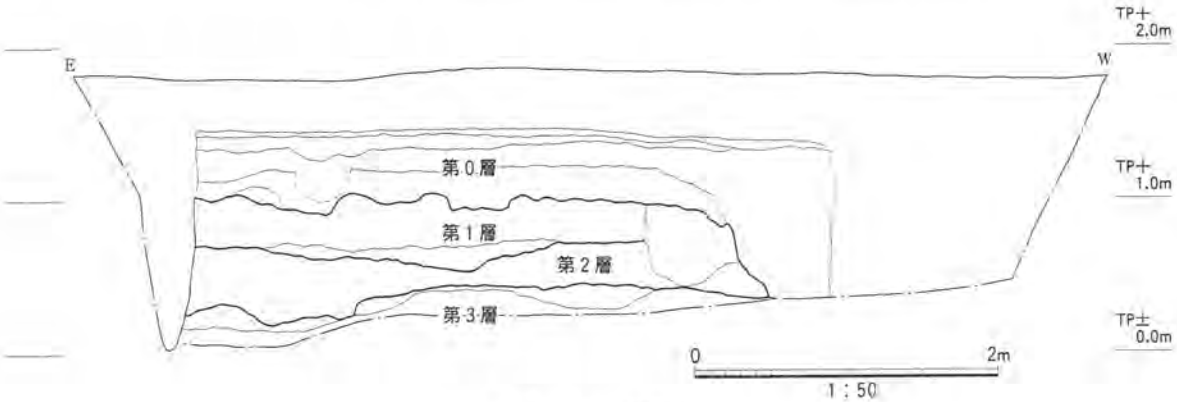


図５　南壁断面図

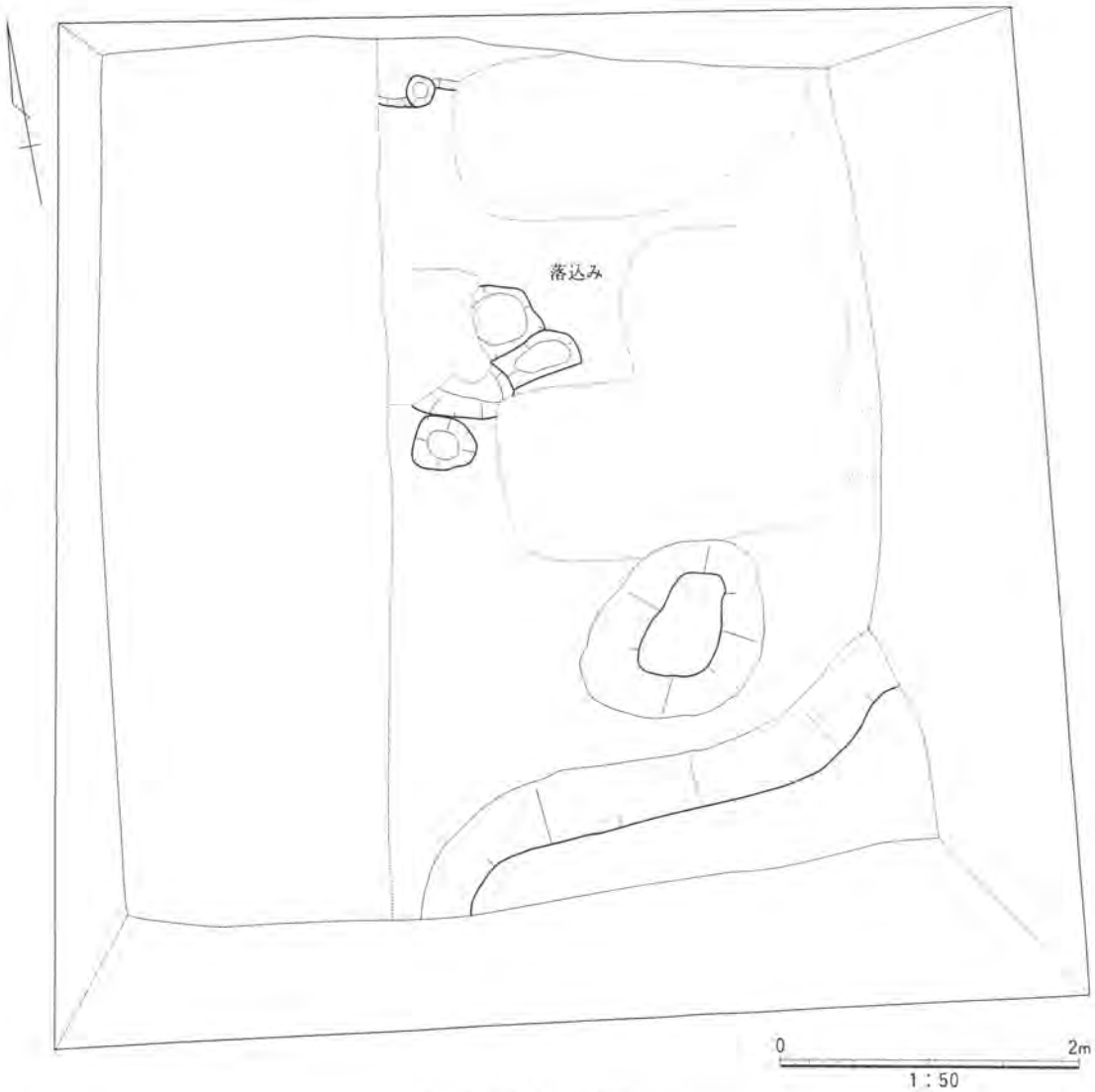



図6　第3層上面遺構平面図

では、主な遺構について記述し、その時期を示す遺物を主として図示する。

SK01　北側で検出した長方形を呈する土壙で、SE06に切られている。規模は東西1.8m以上、南北1.0m以上で、深さは約0.4mである。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。埋土中から肥前陶磁器、平瓦・巴文軒丸瓦、備前壺、丹波焼擂鉢、京焼碗、土師器皿・焙烙・焼塩壺などのほか砥石・硯が出土した。

4～6は土師器皿で、4・5は口縁部内外面に煤が付着する。7は土師器の蓋で、扁平なつまみを有する。8・9は土師器の焙烙である。8は把手を有し、把手部分に穿孔があり、9は口縁部がやや内傾する。10～12は肥前磁器染付碗である。それぞれ外面に、折れ枝文と人物・松・草花文と籠を描く。11・12は高台内に「大明年製」の銘をもち、12は口銹を施す。13は青花小杯である。外面に岩・人物等を描き、高台内に「大明成化年製」の銘を有する。14～19は肥前陶器である。14は鉢で、片口であろう。15は刷毛目碗で、見込は蛇の目釉剥ぎである。16～19は京焼風の陶器である。16は内面無釉で外面に山水楼閣を描き、高台内に印刻がある。香炉であろう。17・18は碗で、見込に山水楼閣を描き、高台内に「清水」の印刻がある。19は皿で、見込に17・18と同じく山水楼閣を描き、外面下端から高台

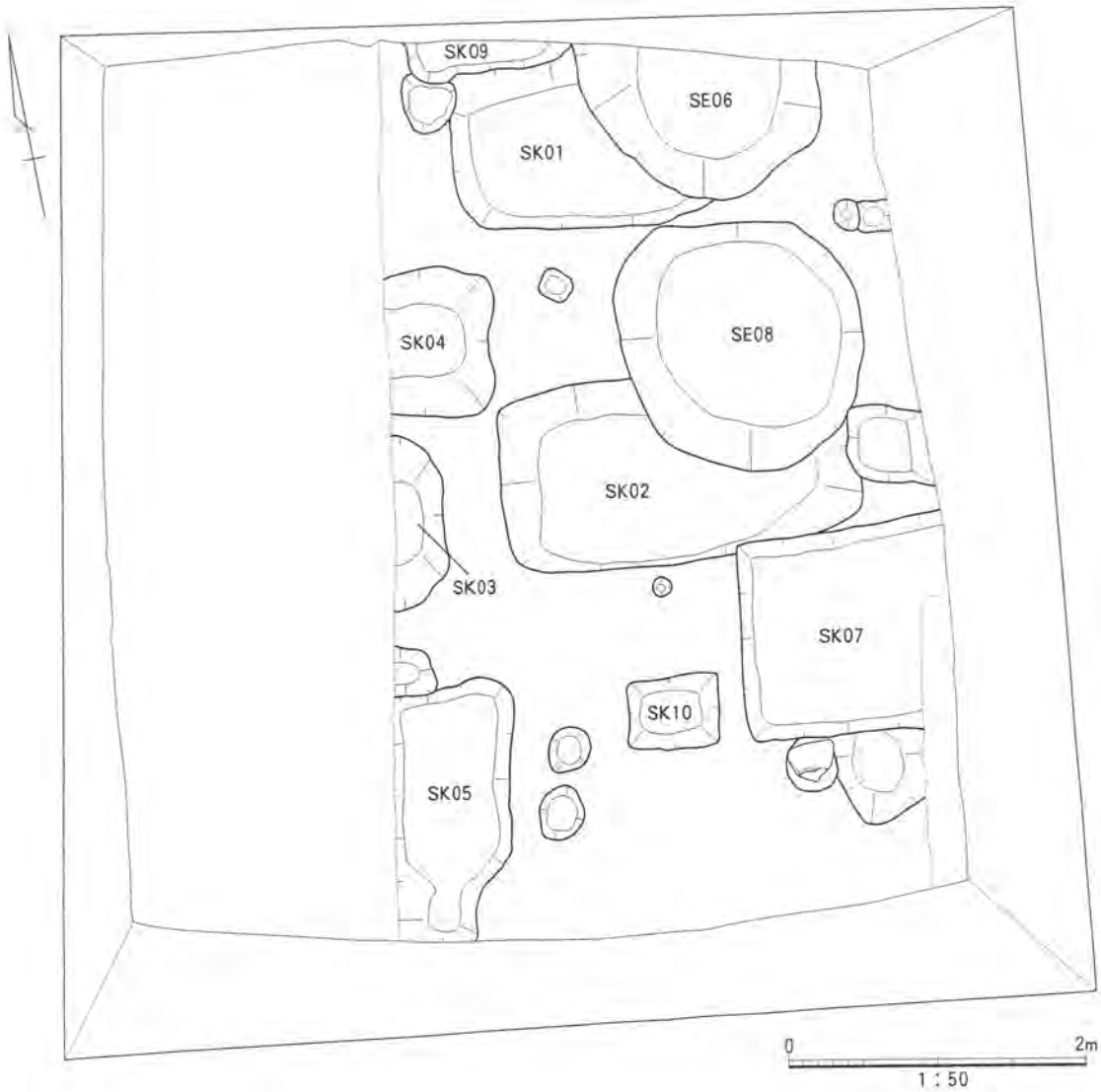



図７　第１層上面遺構平面図

内にかけて鉄錆を塗る。20は京焼碗かと思われる。外面に草花を描く。21は砥石と思われる。長さ8.1㎝、幅5.6㎝の長方形で、片面に墨書が認められるが、判読できない。墨書面は裏面に対して斜めであり、面取りが墨書面以外に認められる。その形態から墨書面が砥面と思われるが、砥面に墨書があることの意味が不明である。他の用途が想定できないため、砥石としておく。以上の遺物から、この土壙は18世紀前葉から中葉の時期が比定できる。

SK02　中央部で検出した長方形を呈する土壙で、SE08に切られている。東西2.1m、南北1.3mで深さは0.4mである。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。出土した遺物は肥前陶磁器、丹波擂鉢、瓦質土器火入、土師器皿・焙烙・十能・焼塩壺、瓦などである。

22は軟質施釉陶器の皿で、内面と口縁部外面を施釉する。23は焼塩壺の蓋である。胎土は精良で上面に「□焼□」の印刻がある。24～32は肥前磁器である。24は小杯で、外面に圏線と文様を描く。25～30は碗である。25は外面にコンニャク印判による桐文と手描きによる草花を施す。26は他の碗と形態が異なり、口縁部が開く。外面に植物、内面に梅樹を描く。畳付には砂が付着し、内外面に細かい貫入が認められる。27は色絵碗である。外面は底部付近に１条、高台に２条の圏線を呉須で描き、

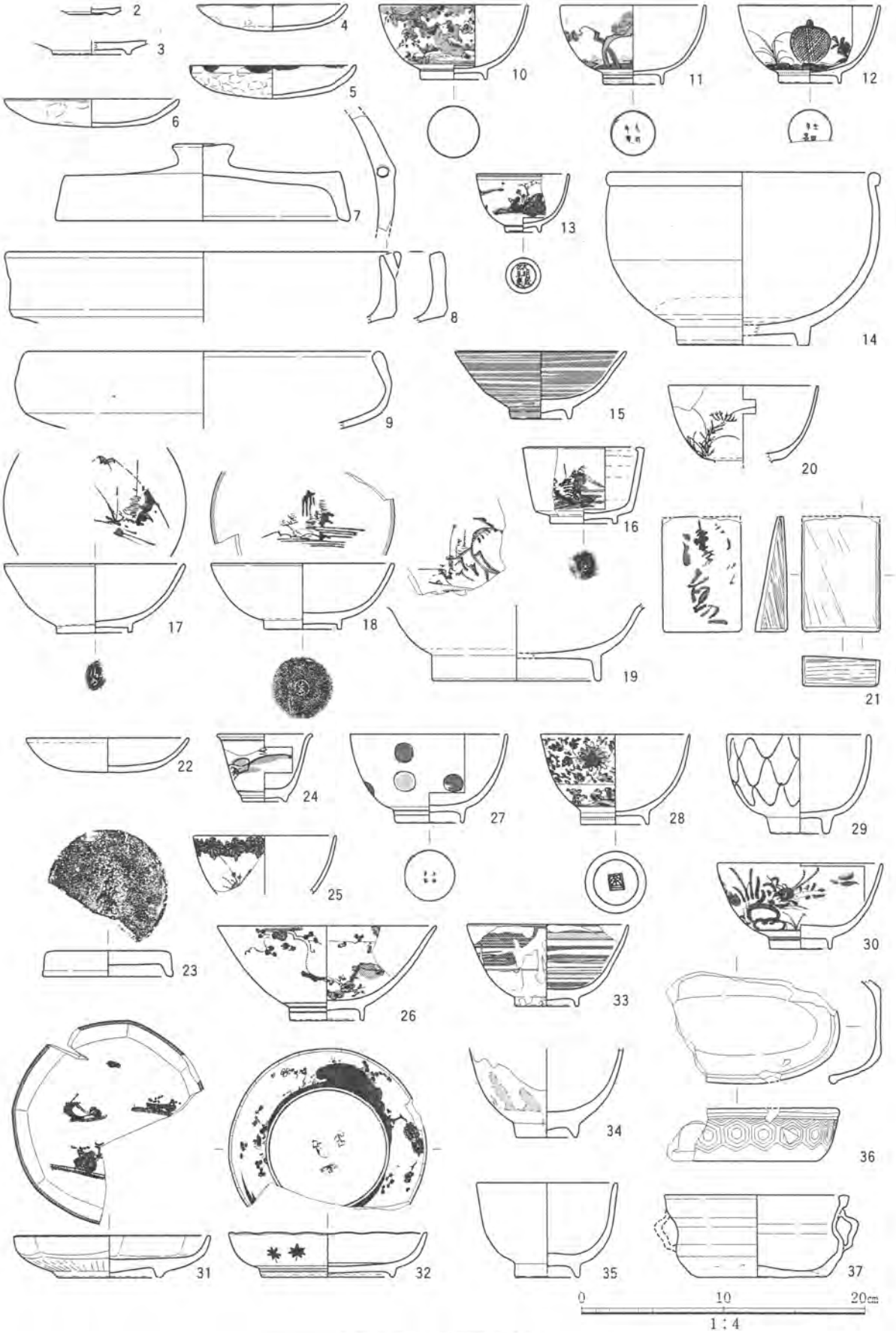



図８　出土遺物実測図（１）

第２層（２・３）、SK01（４～21）、SK02（22～37）

丸文を赤と白で描く。高台内には１条の圏線内に「大明年製」の銘がある。28は外面を１条の圏線で区切り、上部に花唐草文を下部には波頭と草花を描く。高台内には銘がある。29は全体に器壁が厚く、外面に一重網目文を描く。30は釉がやや厚く掛かり、外面には草花文を描く。31・32は皿である。31は口縁部が八角形を呈し、口銹を施す。見込には島・船を描く。32は色絵輪花皿である。内面には呉須で岩を描き、赤・金・緑で紅葉などの花を描き、見込には花を描くが痕跡程度にしか残存していない。外面は呉須で紅葉を描き、高台内にはハリ支えの痕跡が残る。33～35は肥前陶器碗で、33は刷毛目碗、34の外面は銅緑釉で、35は呉器手である。36は軟質施釉陶器の鬢水入れで、外面に亀甲文様が刻されている。37は丹波焼鉢で、把手を２つ有するものであろう。以上の遺物から、この土壙は18世紀中頃の時期が比定される。

SK03　西部で検出した土壙で、西側は調査区外に延びるが円形を呈するものと思われる。東西0.3m以上、南北1.2mの規模で、深さは0.4mである。埋土は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトで、遺物の多くは底面近くから出土した。出土した遺物は肥前陶磁器、京焼碗、土師器皿・焼塩壺、土製玩具などである。

38は土師器皿で、外面底部は指オサエで調整する。口縁部内面には煤が付着する。39は土人形で頬かむりをして踊る人物像である。赤と緑で彩色を施す。40は肥前磁器碗で外面にコンニャク印判で菊花文と柴束文を施す。41は京焼半筒碗で外面に白泥で菊を、銹絵で葉を描く。この土壙は18世紀中頃の遺構であろう。

SK04　北西部で検出した土壙である。西側部分は調査区外になり、全体の規模は不明である。南北1.0m、東西0.7m以上の方形または長方形を呈する。深さは0.4mで、埋土は黒褐色シルトである。肥前陶磁器、京焼香炉、土師器皿・焙烙、瓦質土器火入、砥石などが出土した。

42は土師器皿で、底部外面は指オサエで調整する。43は土師器焙烙で、復元口径は26.2cmで、口縁部外面に煤が付着する。44～52は肥前磁器である。44は蓋で、外面に蝶と茄子を描き、高台内には崩れた「大明年製」の銘がある。45～49は碗である。それぞれ外面に、45は唐草、46は菊花、47は草花、48は葦を描く。高台内には、45・48は渦福銘、46・47は崩れた「大明年製」の銘がある。49は外面の手描きの円文とコンニャク印判の桐文を施す。50は小杯で、外面に草花を描く。高台内および見込に手描きの呉須が見られるが、割れているため詳細は不明である。51・52は皿で、共に外面に唐草文を描き、見込に五弁花、高台内には崩れた「大明年製」の銘を施す。53・54は肥前陶器である。53は京焼風の筒碗で、外面に草を描き、高台内に「木下弥」の印刻がある。54は刷毛目文の碗である。55は京焼碗で、外面に草花を描く。56は京焼火入で、内面下半は無釉である。外面に草花らしき文様が一部見られる。57は軟質施釉陶器の灯火具である。58は堺擂鉢で、擂目は12本で１単位である。これらの遺物から、この土壙の時期は18世紀後半と比定される。

SK05　南西部で検出した土壙で、東西0.8m以上、南北1.7m以上の長方形を呈する。深さは0.4mで、埋土は黒褐色細粒砂質シルトで、下部は粘土質を帯びる。出土した遺物は肥前磁器、堺擂鉢、関西系陶器、土師器皿・焙烙、土製玩具、砥石などである。

59は土師器皿で、内面中央と底面に黒斑がある。60は土師器焙烙で把手を有し、把手部分に穿孔が

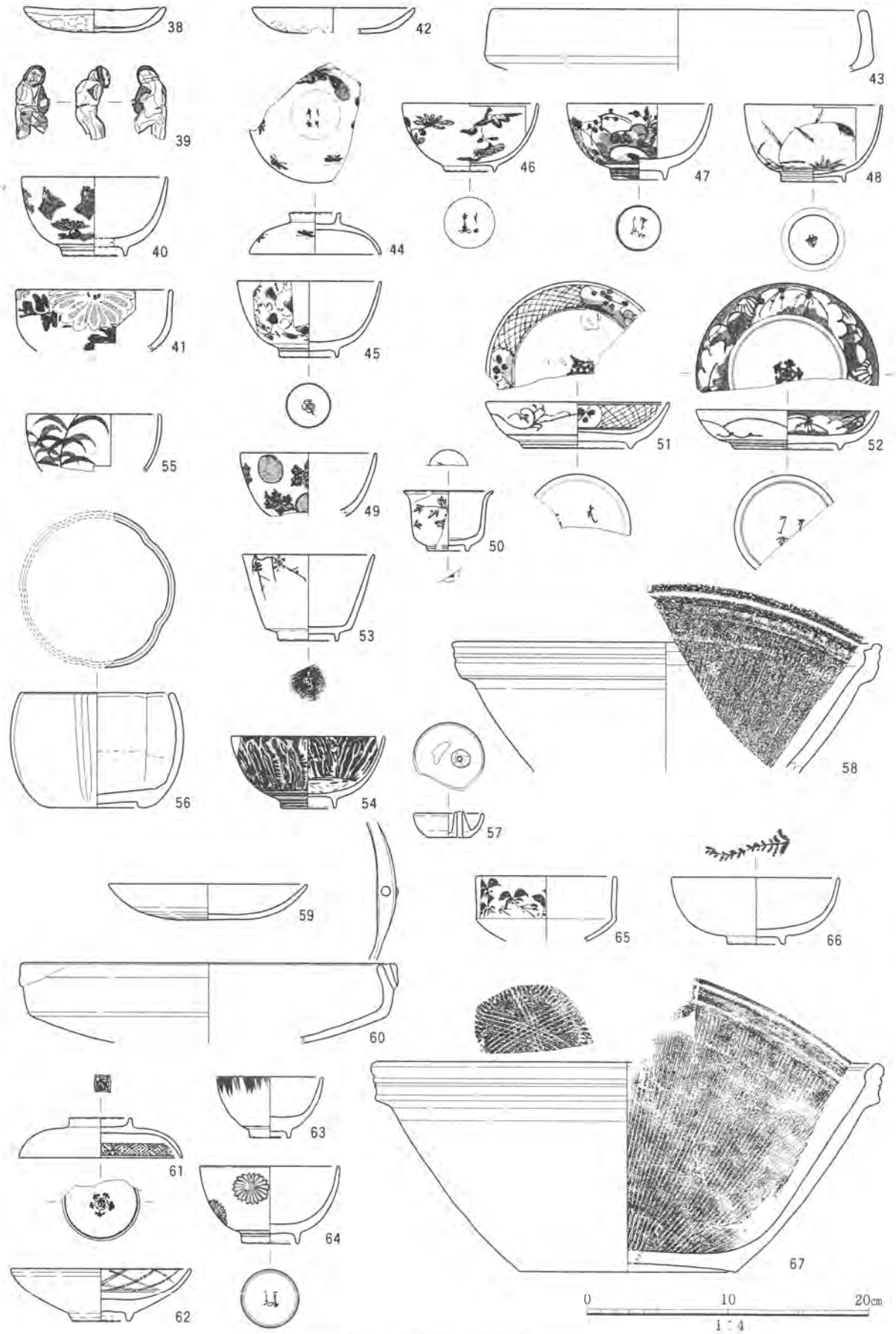



図９　出土遺物実測図（２）

SK03(38～41)、SK04(42～58)、SK05(59～67)

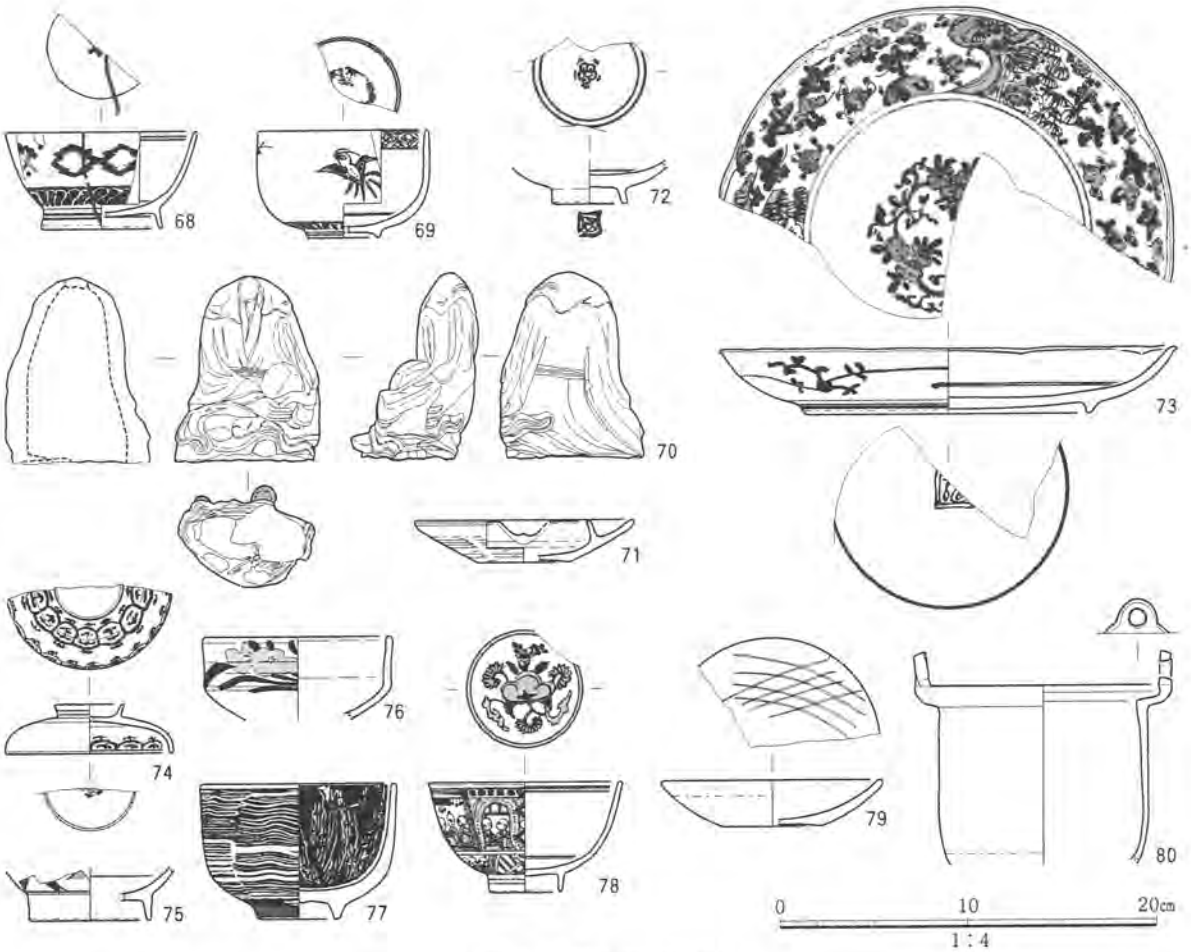



図10　出土遺物実測図(3)

SK07(68～71)、SE06(72・73)、SE08(74・75)、SK09(76・77)、SK10(78～80)

ある。61～64は肥前磁器である。61は青磁染付蓋で、内面には四方襷を描き、見込には圏線内に五弁花を描き、高台内には渦福を施す。62は皿で内面に斜格子文を描き、見込は蛇の目釉剥ぎである。63は小碗で、外面に雨降り文を施す。64は器壁の厚い碗で、外面にコンニャク印判で菊花を施し、高台内には崩れた「大明年製」の銘を有する。65は関西系陶器の碗で、外面に草花の銹絵を施す。66は瀬戸陶器の碗で、内面に草を描く。67は堺擂鉢で復元口径35.6cmを測る。以上の遺物から、この土壙は18世紀後半に比定される。

SE06　北端にあり、南半分を検出した井戸である。東西1.6m、南北1.0m以上を測る。約0.5m掘削したが、底部は検出していない。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。出土した遺物は肥前系陶磁器のほか平・丸瓦、丹波焼徳利、備前焼鉢、堺擂鉢、関西系陶器、土師器皿・焙烙などである。72は肥前青磁染付碗で、高台内に渦福、見込には五弁花を書く。73は肥前磁器輪花大皿で、復元直径は24.0cmである。内面に松竹梅、見込に梅と唐草を描き、外面は唐草を描く。高台内には二重方形枠に渦福が書かれる。出土した遺物は18世紀後半頃の時期を示す。

SK07　SK02の南で検出した土壙で、東西1.4m以上、南北1.4mの方形である。深さは0.2mで埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。出土した遺物は、肥前陶磁器、瀬戸焼磁器、瀬戸美濃焼片口鉢、堺擂鉢、土師器皿・焙烙、土製玩具、砥石などである。

68は肥前磁器広東碗で、外面に菱文などを描き、見込に五弁花を描く。鉛ガラスによる焼き接ぎを行っている。高台内に見られる赤で書かれた「上」字は補修の際のものであろうか。69は肥前磁器色絵碗である。内面には呉須で四方襷、見込に草を描く。外面の鳥を赤、暗緑色で描く。70は備前焼の人形である。衣を着た人物が片膝を抱えて座る姿で、先ず中空に作り最後に底を塞いで完成している。71は関西系陶器の灯明皿である。外面口縁部以下は無釉である。以上の遺物から、この土壙の時期は19世紀と推定される。

SE08　北東部で検出した直径約1.6mの井戸である。調査では約0.5m掘削したが、底面までの深さは不明である。出土した遺物は肥前陶磁器、瀬戸焼磁器、丹波焼甕、関西系陶器鍋、土師器焙烙・火入、丸瓦・平瓦などである。

74は肥前磁器蓋である。内外面に瓔珞文を、見込には五弁花を描く。75は肥前磁器広東碗である。19世紀の時期を示すものである。

SK09　北端で一部を検出した土壙で、東西1.4m以上、深さは0.3mである。埋土は黒褐色細粒砂質シルトで、肥前陶磁器、備前焼鉢、関西系陶器、土師器皿・焙烙、瓦などが出土した。

76は関西系陶器碗で、外面に銹絵で草花を描く。77は肥前陶器刷毛目碗である。19世紀の遺構である。

SK10　東西0.6m、南北0.5mの方形の土壙で、深さは0.2mである。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。出土した遺物は肥前磁器、丹波焼甕、関西系陶器、土師器皿・焙烙・焼塩壺、土製玩具などである。

78は肥前磁器碗で、外面に人物等を、見込には花を描く。79は関西系陶器皿で、内面には斜格子条の筋目がある。外面口縁部付近以下は無釉である。80は関西系陶器の土鍋または燗鍋であろう。口縁内部と外面底部付近以下は無釉である。19世紀代の遺構であろう。

〈まとめ〉

今回の調査では、江戸時代の遺構・遺物は多く見つかり、当地が18～19世紀に繁栄していたことが明らかになった。今回の調査で検出したのが土壙や井戸で、建物礎石は未検出であるため、建物については不明である。江戸時代以前の確実な遺構は検出されなかった。ただ、今回の調査は面積が限られたものであり、調査結果が調査地周辺の状況を普遍的に示すものかは断定できない。また、調査で瓦器の細片が、試掘調査では弥生土器が出土していることから、中世以前にさかのぼる遺構・遺物が周辺に存在することは明らかであろう。今後、周辺部の発掘調査結果によって得られる成果は大きいと予測される。

参考文献

大阪市文化財協会2006、「太融寺による建設工事に伴う安曇寺跡推定地発掘調査(AZ05－1)報告書」
松尾信裕2006、「北野太融寺での発掘調査」:『葦火』120号、pp.4－5

第１層検出遺構
（北から）

地山上面検出状況
（北から）

南壁地層堆積状況
（北から）

# 豊崎遺跡発掘調査（ＴＳ06－１）報告書

・調査個所　大阪市北区豊崎６丁目９－７
・調査面積　21㎡
・調査期間　平成18年９月14日～９月15日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄

〈調査に至る経緯と経過〉

豊崎遺跡は、1983年、本調査地のすぐ南に位置する豊崎神社境内において、地表下１ｍの地層から古墳時代前期の土器が出土したことから発見された遺跡である[伊藤純1990](図１)。その後、豊崎遺跡では、豊崎神社の西隣の北大阪印刷センターでの1988年度の調査を除いて本調査は実施されていない。豊崎遺跡から東約500ｍには家形埴輪が出土した長柄古墳があり、その南には古墳時代前半頃の遺構が検出されている本庄南遺跡(HH97－１・01－２)がある。また、東約１kmにはボストン美術館所蔵の突線鈕式銅鐸が出土したと伝えられる長柄西遺跡がある(図３)。以上の遺跡や豊崎遺跡の北の東淀川区崇禅寺遺跡や淀川区宮原遺跡、南東の北区同心町遺跡などが位置する淀川・神崎川河口の低地は、天満砂堆や淀川の三角州の発達による地形の変化に従い、居住と開発がどのように展開したのか明らかにするため、考古学的な調査が待たれている地域である。

今回の調査地は、2006年９月12日の大阪市教育委員会による試掘調査の結果、須恵器・土師器が含まれる地層が発見されたことから、本調査を実施することとなった。調査はこの包含層上面より開

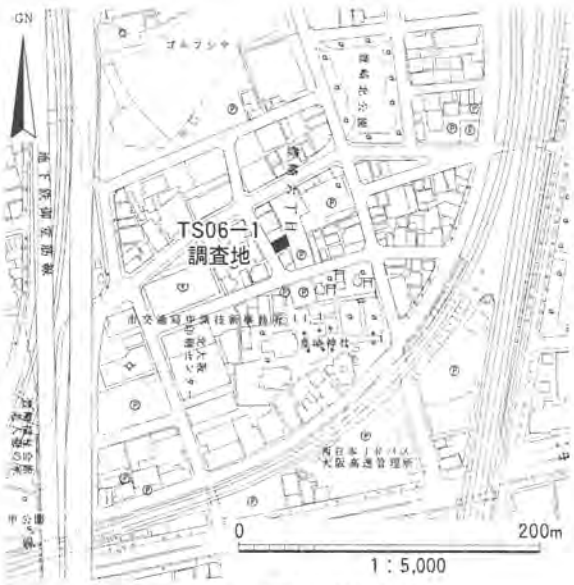


図１　調査地位置図

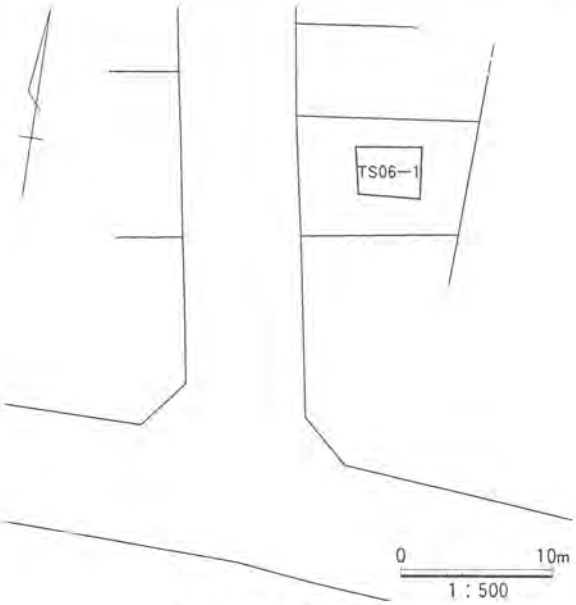


図２　調査区位置図

始し、第２層以下は南西隅のみを掘下げ、地層の堆積状況を確認した。以上に２日間を要した。

なお、本報告で使用した方位は磁北、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±○mと記した。

〈調査の結果〉

１．層序

TP＋１m前後の現地表より約１m下までは調査着手時に掘削が完了しており、ここではそれ以下の地層について記述する(図４・５)。

第１層：暗灰黄色(2.5Y5／2)粗粒砂質シルト層で層厚は25cmである。中世の作土で、土師器8・9、瓦器4、瓦質土器7、東播系須恵器10、青磁6、軒平瓦11が出土した(図７)。

第２層：灰黄色(2.5Y５／２)極粗粒砂を主体とし、層厚は17～35cmである。トラフ形斜交層理が発達した水成層で、東北東から西南西へラミナが傾斜しており、流向を示している。第２層から４層には磨滅していない庄内式から布留式の土器が含まれる。

第３層：灰オリーブ色(5Y5／1)小礫混り極細～細粒砂層で、層厚は８～15cmである。水成層だが、ラミナが乱され下面に凹凸がある。また、本層の上部には炭化した植物遺体や木片があり、陸化していた可能性がある。

第２・３層から弥生時代中期の土器1と、古墳時代前期の土師器2・3が出土した。

第４層：灰オリーブ色(5Y6／2)中礫混

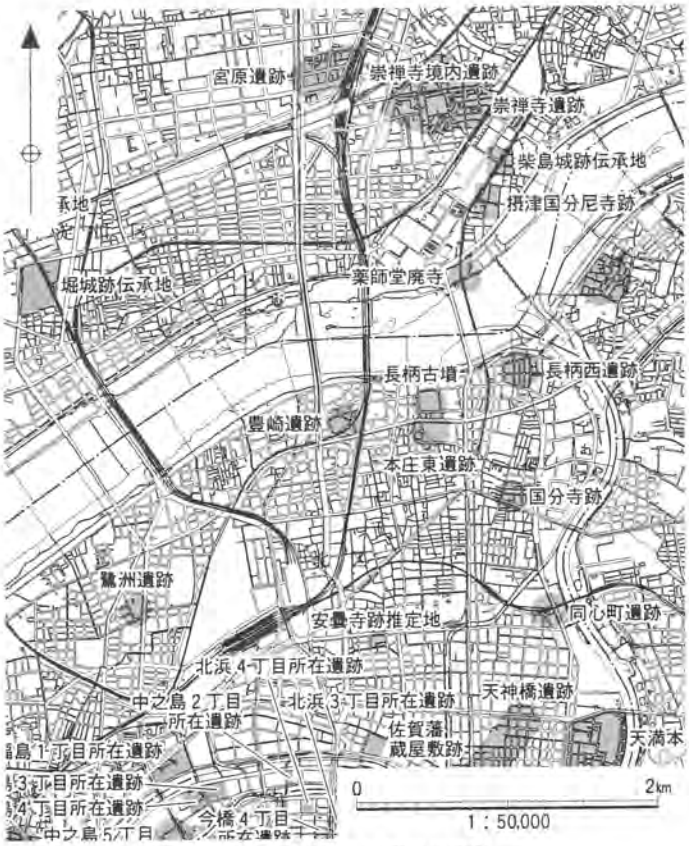



図３　豊崎遺跡と周辺の遺跡

図４　地層と遺構の関係図

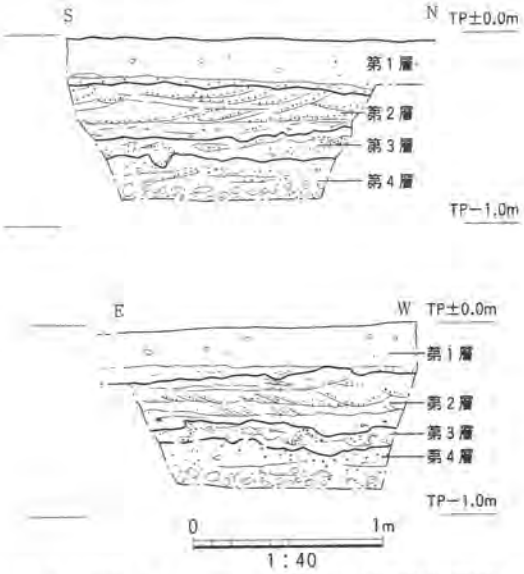



図５　西壁南半(上図)・南壁西半(下図)断面図

り粗～極粗粒砂層で、層厚25cm以上の水成層である。

2．遺構と遺物

遺構はピット2基と井戸3基である(図6)。SP03・04は第2層上面で検出した。SP03は直径0.45m、深さ0.2mで、柱痕跡のような埋土の違いがあった。SP04は直径0.5mで、中央部には黒色粘土の明瞭に埋土の異なる部分があった。両者とも遺物は出土していない。3基の井戸は第1層上面で検出したが、さらに上から掘込まれたものである。北東隅のそれは井戸側に瓦を使用した極く新しいもので、SE01は直径1.6mで18世紀後半頃、SE02は直径1.2mで18世紀のものである。SE01・02は第2層まで掘られており、SE02からは瓦器椀5が出土した。

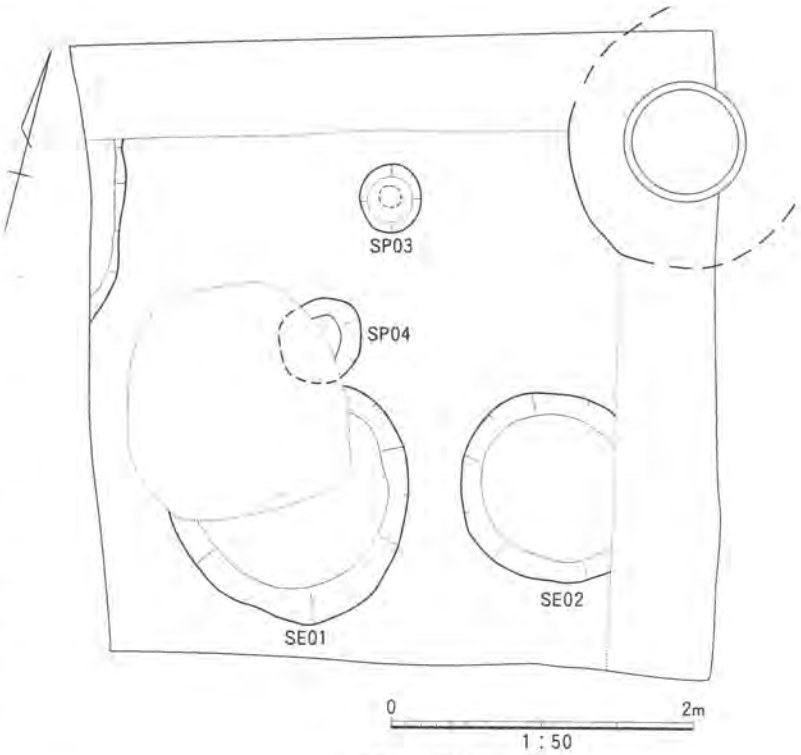


図6　遺構平面図

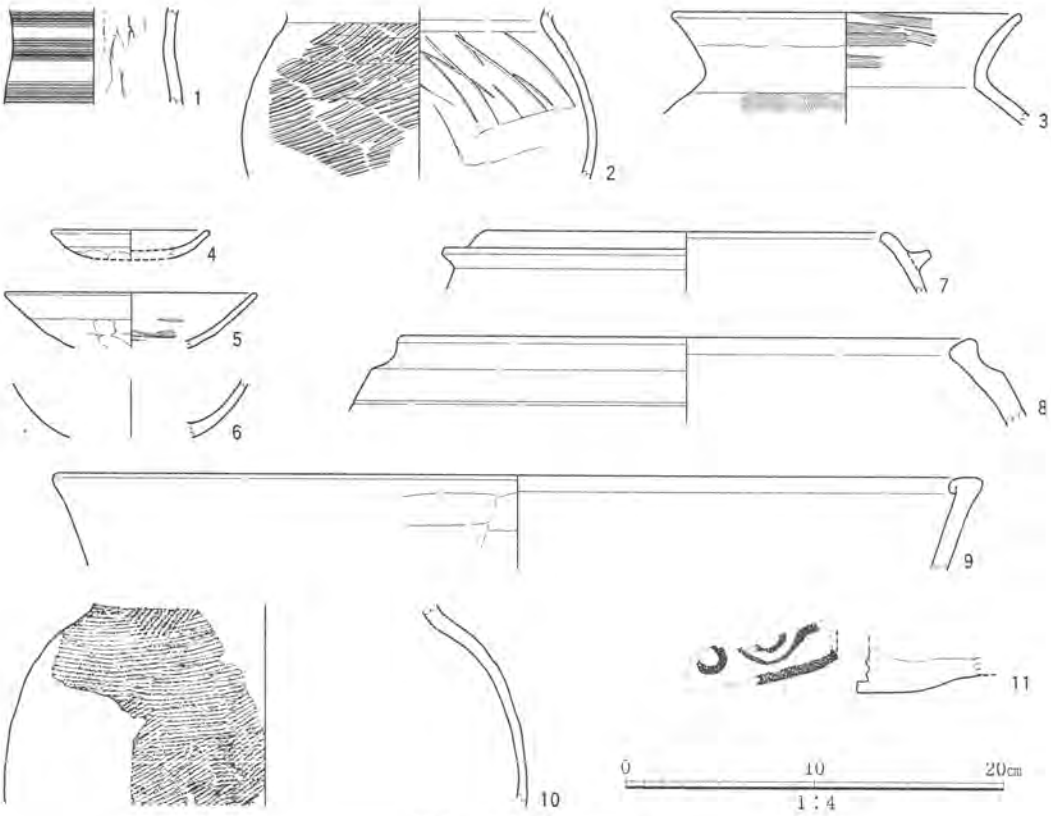


図7　出土遺物実測図

SE02(5)、第2・3層(1～3)、第1層(4・6～11)

次に各層から出土した遺物を記述する(図７)。1～3は第２・３層出土である。弥生土器1は、頸部に９条単位の櫛描直線文が施された畿内第Ⅱ様式の細頸壺である。庄内式期の甕2は、外面に右上がりのタタキメ、内面には体部上半をナデ上げた際の工具痕があり、粘土紐の継ぎ目が明瞭である。3は甕で、口縁部はヨコナデの後、内面のみに横方向のハケを施す。体部の外面は斜め方向のハケ、内面は横方向のケズリが施される。口縁部外面には粘土の継ぎ目が見える。

第１層からは4・6～11が出土した。4は瓦器皿、7は瓦質土器の足釜である。8は土師器の羽釜、9は土師器の大型の火鉢であるが、9の口径は確実でない。10は東播系須恵器の甕、6はくすんだ釉色を呈する、産地がよくわからない青磁碗であるが、中国製であろう。6は小片で傾きと直径は確実でない。11は唐草文軒平瓦で右側縁は生きている。破片の上面は、整形時に粘土を合わせた剥離面である。この瓦と良く似たものが、本調査地から北東約１kmの長柄橋の河川敷で出土しており、平安時代後期の河内系の瓦と報告されている([江谷寛1986]の第７図14)。この河川敷の遺物散布地は薬師堂廃寺と呼ばれ、赤川廃寺などとともに、明治時代の新淀川の開削によって河川に取込まれた中世の寺院などの遺跡である。

〈まとめ〉

本調査は小規模なものであったが、次の２点の重要な成果があった。

１番目は、豊崎遺跡では従来から古墳時代前期の土器の出土が知られていたが、それらが淀川の三角州を形成したと推定される地層に伴って出土したことである。古墳時代前期にこの地域に人が住み始めたのは、南北方向に発達していた砂堆の上でなく、その上にできた淀川の三角州であった可能性が考えられる。豊崎遺跡における地形の変遷と遺跡の成立の関係については、今後、周辺の調査でさらに検討を加えなければならない。

２番目に、遺構は見つかっていないが、瓦や青磁をはじめとした遺物が出土し、近くに中世の集落がある可能性が出てきたことである。淀川や神崎川の下流域には、西国や京へ繋がる交通路や荘園の発達などに伴い、いくつもの集落が栄えたことが文献などから知ることができるが、宮原・崇禅寺遺跡や北区安曇寺跡推定地などを除いて、考古学的な成果は乏しい。今後は、豊崎遺跡でも古墳時代前期前後だけでなく、中世集落も対象に加えて調査することが必要と考えられる。

〈参考文献〉

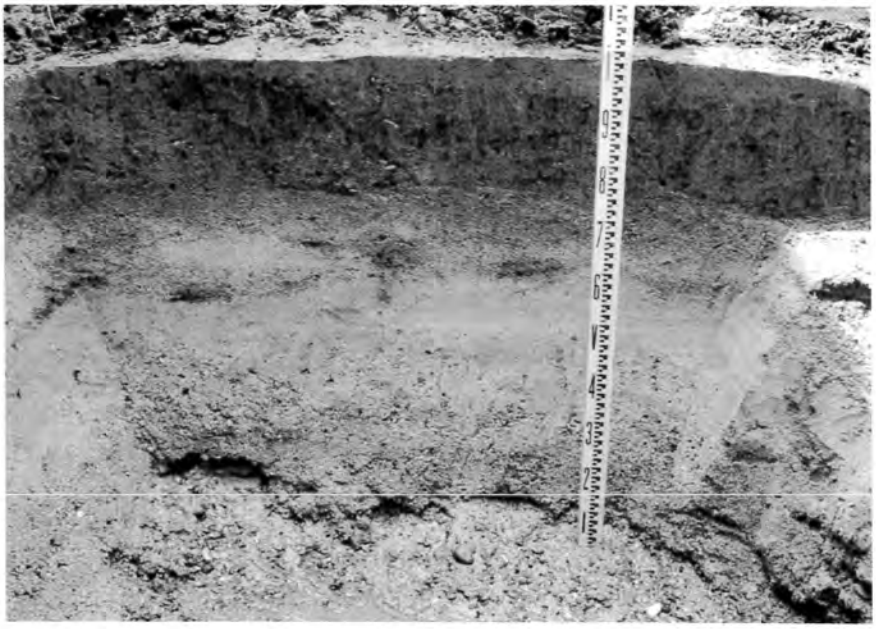
伊藤純1990、「豊崎神社境内出土の土器」:『葦火』26号

江谷寛1986、「淀川川底に眠る寺院跡」:『大阪の歴史』19号

第２層上面遺構
（西より）

南壁西半

西壁南半



# Ⅱ　中　央　区

# 難波宮跡・大坂城跡発掘調査（ＮＷ06－４）報告書

・調 査 個 所　大阪市中央区法円坂１丁目３－３
・調 査 面 積　30㎡
・調 査 期 間　平成19年３月８日～３月13日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、黒田慶一

〈調査に至る経緯と経過〉

今回調査地の周辺は難波宮跡でも本調査例の少ない地域である。北西約70ｍのNW04－１次調査では南東部に谷があるが、広い範囲で古墳時代から江戸時代にかけての多くの遺構・遺物が分布していた。また北方150ｍには豊臣時代の大名細川忠興の屋敷地であったという伝説を有する越中井(大阪府史跡)が存在し、豊臣時代の文献に見られる玉造大名屋敷群の一画の可能性がある(図１)。

敷地中央で大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下70㎝で地山に達し、その直上に層厚10㎝の大坂夏ノ陣によると思われる焼土層が存在したことから、本調査を行うこととなった。３月８日に重機掘削を実施し、並行して人力掘削による調査も開始した(図２)。３月13日に現地における全ての調査を完了した。

なお、調査時には磁北を方位の基準とし、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP＋○ｍと記す。

図１　調査地位置図

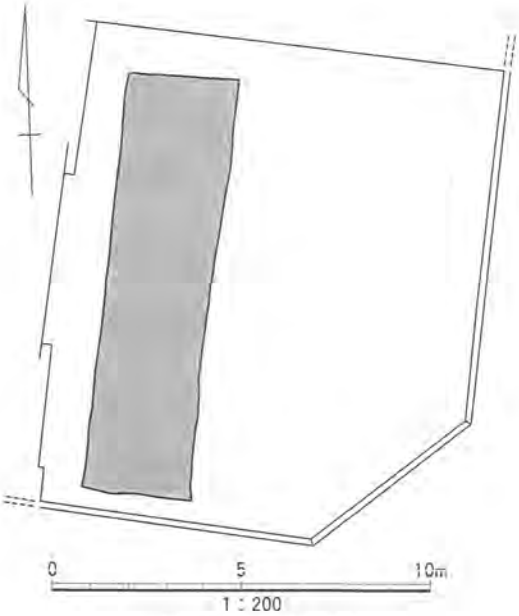



図２　調査区位置図

〈調査の結果〉

1．層序

現代盛土層(第0層)以下を第1～6層に区分した(図3・4)。

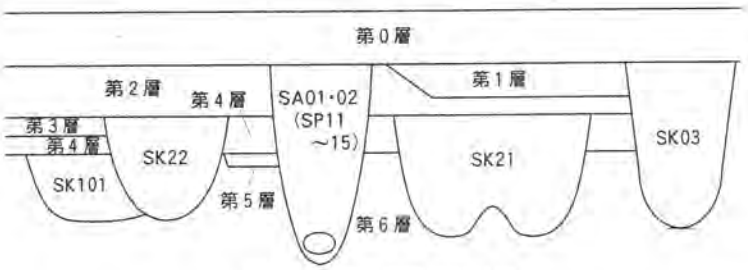


図3　地層と遺構の関係図

第1層：層厚25cmの黄褐色(2.5Y5／4)粗粒砂混りシルト層である。

第2層：調査区のほぼ全域に分布するオリーブ褐色(2.5Y4／3)シルト混り粗粒砂層で、層厚15cmを測り、江戸時代前期の整地層である。上面からSP11～15が掘込まれている。

第3層：調査区南端で確認される層厚5cmの黄褐色(2.5Y5／3)シルト層で、江戸時代初期の大坂再建時の整地層である。

第4層：調査区南半に分布する炭を多く含む焼土層で、肥前陶器・備前焼・ベトナム製長胴瓶などを含み、大坂夏ノ陣によるものである。

第5層：調査区南半に分布する層厚数cmのオリーブ褐色(2.5Y4／4)粗粒砂混りシルト層で、豊臣時代の整地層である。

第6層：灰白色(5Y7／1)を呈する地山層で、上部20cmが粗粒砂、下部が細粒砂からなる。サンドパイプが顕著に見られる。

2．遺構と遺物

a．第6層上位の第4層基底面の遺構と遺物(図4・5)

SK101　一辺1.5mの平面が不整方形の土壙で、高さ0.3mの畦状の高まりを残して、南と東に連続していく。埋土は最下部に2～10cm厚の炭を含む層があり、埋土はしまりも悪くゴミ穴と思われる。SK22に切られる。本遺構から出土した図5の中国製白磁輪花皿1は、見込みを蛇の目釉剥ぎし、重ね焼きの痕跡である溶着痕をもつ。

b．第6層上位の第2層基底面の遺構(図4)

SK16　長辺0.7m以上、短辺0.7mの土壙で、埋土はしまりの悪い細粒砂である。

SK17　長辺1.5m、短辺0.7m以上の土壙で、埋土の砂はしまりが悪い。

SK18　長辺0.6m以上、短辺0.7mの土壙で、埋土はしまりの悪い細粒砂である。

これらはゴミ穴の可能性が高い。

c．第4層出土遺物(図4)

肥前陶器皿2、同丸碗3、同向付鉢4・5、土師器皿6・7、備前焼壺8、ベトナム製長胴瓶9がある。

d．第4層上位の第2層基底面の遺構と遺物(図4・5)

SK20　直径0.8mの不整円形の土壙で、炭を含むシルトを埋土とし、SK21に切られる。ゴミ穴と思われる。

SK21　南北4.0mを測り、底面は複数の穴を掘り込んだように凸凹を見せるが、一度に埋められて

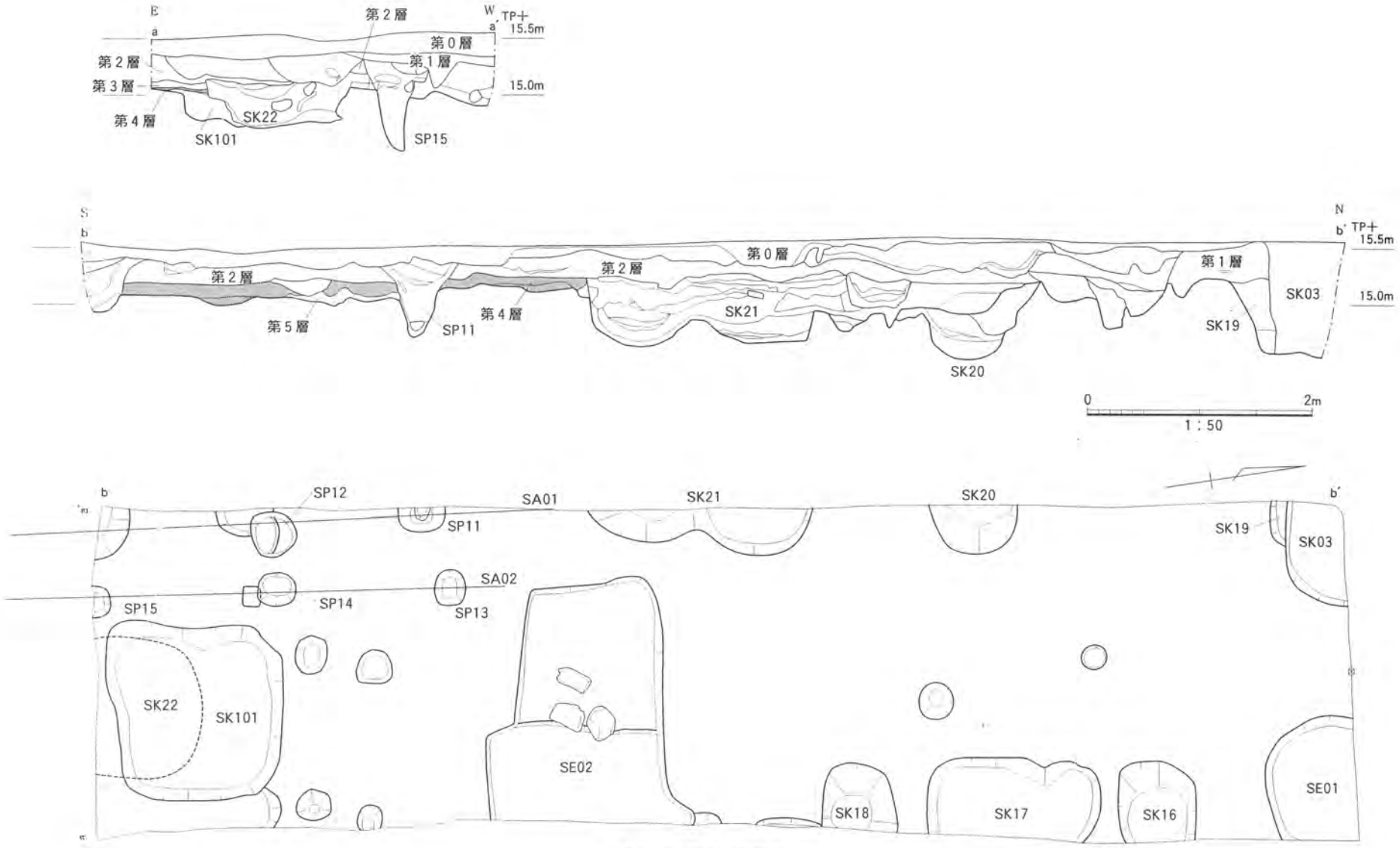

E
W
a
a'
TP+
15.5m
15.0m
第2層
第0層
第1層
第3層
第4層
SK22
SK101
SP15
S
N
b
b'
第5層
SP11
SK21
SK20
SK19
SK03
0
2m
1：50
SP12
SA01
SA02
SP14
SP13
SE02
SK18
SK17
SK16
SE01

図4　平面図・断面図

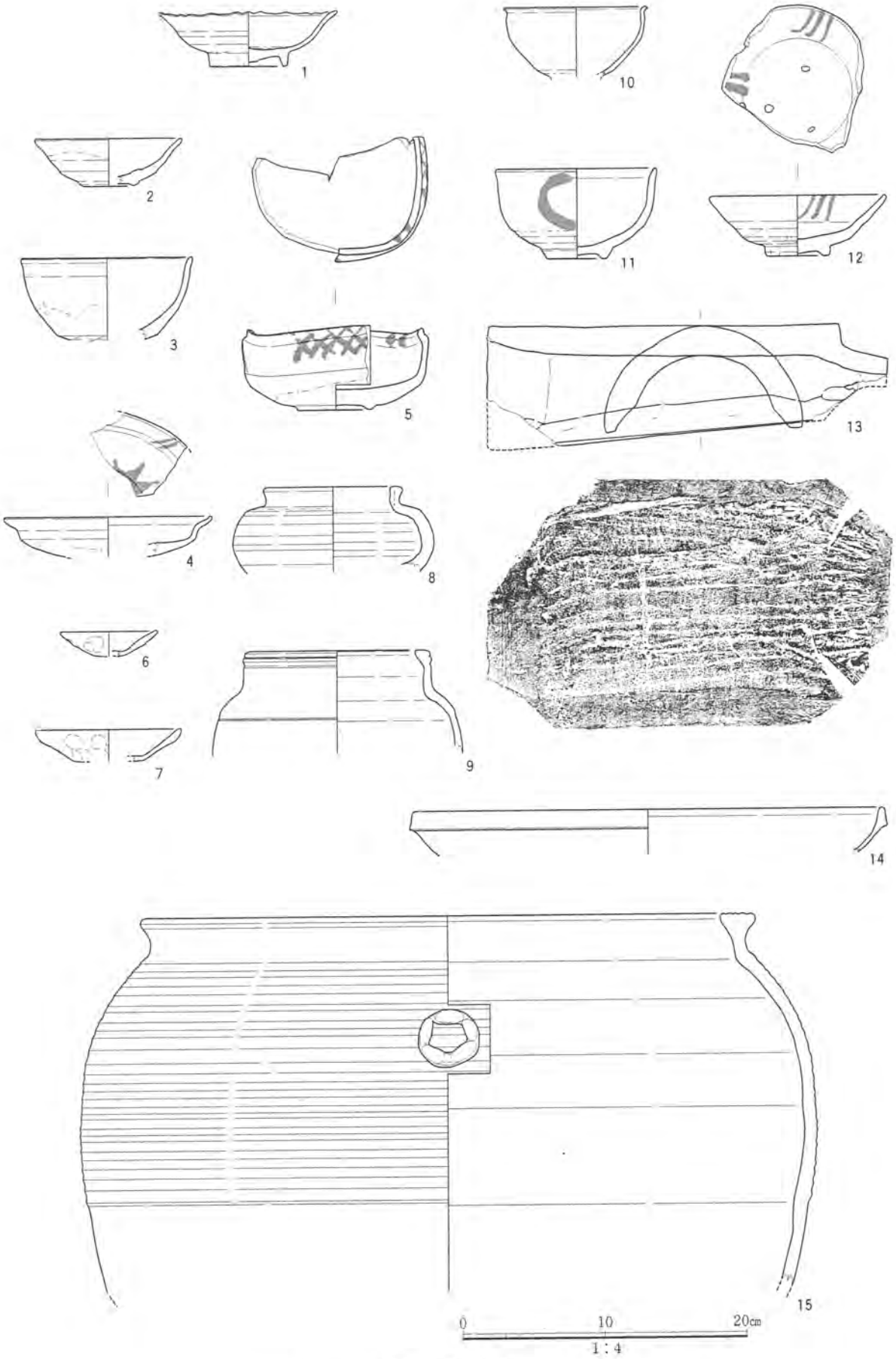



図５　遺物実測図

SK101(1)、第４層(２～９)、SK22(10～12)、SP13(13)、SE02(14・15)

いる。底部の厚さ５～10cmの土層は炭を含み、埋土全体に炭が含まれていることから、ゴミ穴の可能性が高い。

ｅ．第３層上面の遺構と遺物(図４・５)

SK22　調査区南端で検出した長辺1.2m、短辺0.9m以上の土壙で、肥前磁器碗10、肥前陶器碗11、同皿12が出土した。11は内野山窯の白磁碗で17世紀中葉に位置付けられる。

ｆ．第２層上面の遺構と遺物(図４・５)

SA01　SP11・12からなるピット列で、いずれも深さ0.7m以上ですり鉢状に掘られている。柱痕跡を見られなかったが、礎板を有するものがあることから柱穴と思われる。SP11は上端の直径が0.7m、底面はTP+14.7mで、幅0.1mの石を礎板として入れている。SP12は直径が0.4m、底面はTP+14.4m、SP11との芯々間は1.4mである

SA02　SP13・14・15からなるピット列である。いずれも柱痕跡はわからなかった。SP13は直径0.35m、底面はTP+14.5 mで、完形に近い丸瓦２個を凹面を向い合せた状態で掘形に挿入していた。柱の根固めとして他の瓦片とともに用いられたと考えられる。図５の丸瓦13はそのうちの１個で、全長28cmを測り、焼き歪みが激しく、凹面に布目痕跡が顕著に残るが、コビキはＢである。SP14は直径0.35m、底面はTP+14.7 mで、SP15は上端の直径が0.6m、底面はTP+14.5 mである。SP13・14・15の芯々間は各1.6mである。

SE01　調査区北端で検出した直径1.5mほどの井戸である。

SE02　調査区中央検出の一辺が1.6mの平面が方形の木組み井戸で、下に下りて水を汲んだのか、西側を一辺1.2m、深さ1.3m、立方体に掘込んで、上面を水平にした自然石３個を足場位置に据えている。水成堆積物で埋没した後も開口していたのを、漆喰塊を多く含む黒褐色(10YR 2／3)粗粒砂で埋めており、その土砂から19世紀の焙烙14と丹波焼甕15が出土した。

ｇ．第１層上面の遺構(図４)

SK03　一辺が0.8m以上、深さ1.0mの土壙で、SK19を切り、SE02を最終的に埋める漆喰塊を多く含む黒褐色粗粒砂に類似した土で埋められる。

３、本調査地周辺の大名屋敷について

今回の調査地は、江戸時代には「玉造稲荷前筋の１筋西の筋」と呼ばれた南北道と、東西道である久宝寺橋通の交差点北西角で、両側町である越中町３丁目に属した

図６　江戸時代の調査地周辺

(矢内昭氏図[大阪市文化財協会1984]に加筆)

(註１)(図６)。松尾信裕氏がこの南北道を豊臣氏大坂城三ノ丸の堀跡に比定[松尾信裕1994]し、当調査地も堀底にしたが、調査の結果、当地は屋敷地であり、大坂夏ノ陣の焼土層も存在することが判明したから、ここで文献史料にみえる玉造大名屋敷群と当地との関係を整理しておきたい。

細川ガラシャ夫人の伝説を有する「越中井」は、寛政８～10(1796～98)年刊行の『摂津名所図会』が初見のようなので、「越中町」という地名に仮託し伝承である可能性もあるが、「玉造稲荷前筋の１筋西の筋」が越中町と呼称されたのは江戸時代初期からで、やはり関ヶ原直前に細川越中守忠興の屋敷があったことからの命名であろう。細川屋敷は西門を正門としており(註２)、細川屋敷の隣とされる宇喜多秀家屋敷(註３)は、秀家が岡山城主であり、その遺称地の「岡山町」は『宝暦町鑑』によると「玉造稲荷前筋西」とあるから、宇喜多屋敷は細川屋敷と背中を合わせた東隣であった可能性が高く、細川屋敷はこの「玉造稲荷前筋の１筋西の筋」の東側で、この筋に正門を開いていたと思われる。

細川家の家伝である『綿考輯録』(『細川忠興軍功記』にも同様の記事がある)によると、「大坂御屋敷は７月17日戌の刻ばかりに火かかり、御簾中様〈ガラシャ夫人〉御自害なられ、忠隆〈忠興の長子〉公の御奥様は乗物３挺にて此の方〈小出〉屋敷の前を御通り、前田肥前殿屋敷へ御入り候由、見もうしたる[〈〉内は報告文作成者の加筆]」とあるから、細川屋敷の近辺には小出屋敷、前田屋敷もあり、忠隆夫人の逃亡にこの道が関係した可能性は高い[黒田慶一1996]。

また前田家当主の利長は慶長４(1599)年、「鍋島屋敷・島津屋敷、此の２か所を１つになされ、三方を堀にし、其の普請は毛利殿なり。扨、角々には、矢倉を上げ、城構への様に見え申し候」というような大土木工事を玉造で行っているが、これらも当地近辺であろうと思われる。

〈まとめ〉

従来、試掘調査止まりで本調査には至らないことの多い地域での発掘であったが、豊臣時代から江戸時代の多くの知見を得ることができた。最大の成果は大坂夏の陣の焼土層の検出である。

今回の調査地が大名屋敷であるかどうかは不明だが、大坂夏の陣の焼土層からベトナム製長胴瓶や備前焼壺などの出土があり、その下層に土壙が存在することから、町人が惣構外に移住させられた町中屋敷替え(1598年)以降にあっては、大名屋敷地の一角を占めたものと思われる。

参考文献

大阪市文化財協会1984:『難波宮址の研究』第8 p.220

松尾信裕1994:「豊臣期大坂城の規模と構造」『大阪市文化財論集』pp.291−330、(大阪市文化財協会)

黒田慶一1996:「鉄砲荷札木簡と玉造の大名屋敷」『大阪の歴史』第48号 pp.27−46、(大阪市史編纂所)

註)

(1) 18世紀中葉成立の『宝暦町鑑』は、越中町 2丁目は「玉つくりいなり前すじ一筋西の筋、農人ばし通より南へ入」の町で、3丁目は2丁目の南に位置し久宝寺橋通に至るとするから、同筋と久宝寺橋通の交差点北西角に位置する当地は、越中町3丁目である。

(2) 『霜女覚書』に、細川屋敷の「表門西の門」とある。

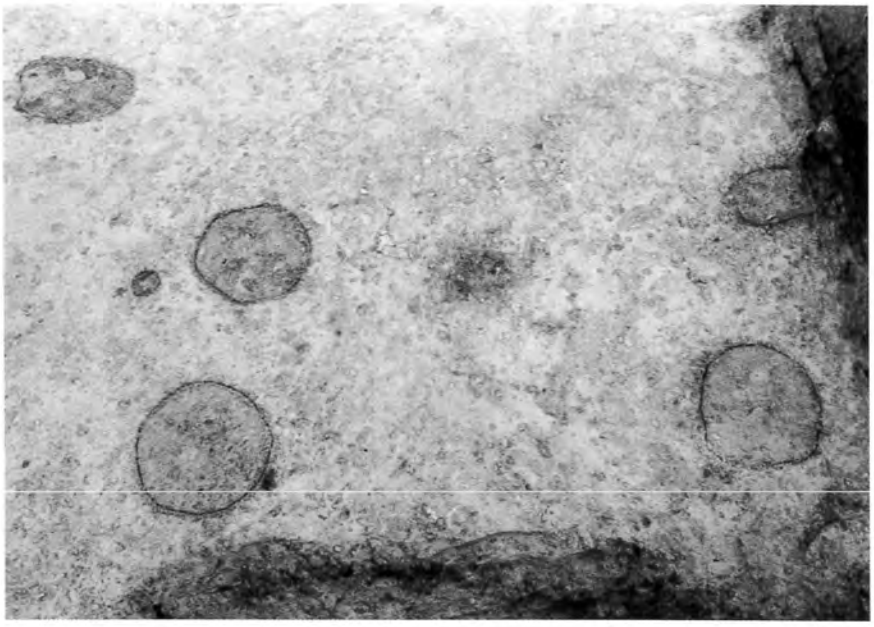
(3) 『武徳編年集成』慶長5(1600)年7月17日条。

(4) 『川角太閤記』。『看羊録』・『小須賀氏聞書』にも同様の記事がある。

SK101とSK22の
切合い関係
（北西から）

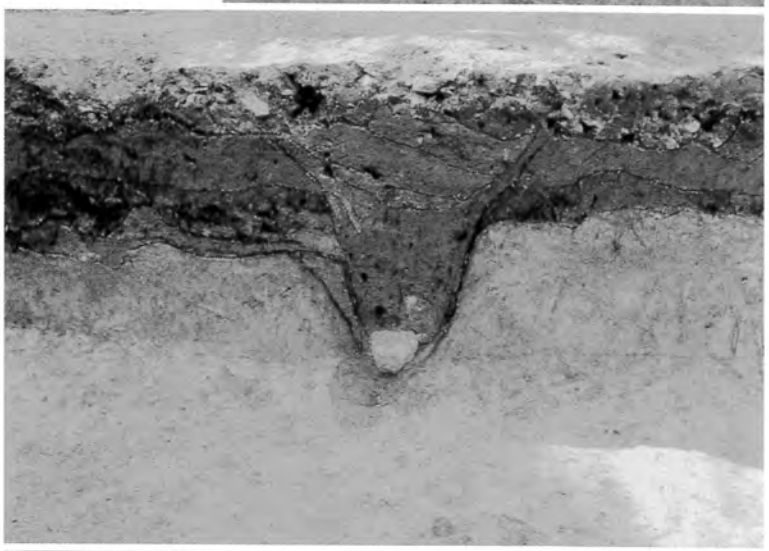
SK101完掘状況
（北西から）

南部のピット検出状況
（南から）



地山（第６層）上面の状況
（南から）

SP11断面
（東から）



SK20・21断面
（東から）

# 大坂城跡発掘調査（ＯＳ06－10）報告書

・調査個所　大阪市中央区上本町西２丁目３-２
・調査面積　12㎡
・調査期間　平成19年３月19日～３月22日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、岡村勝行

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は上町台地のなだらかな尾根上に位置し、現地表の標高はTP+21.0m前後である。難波宮史跡公園の南約500mに当り、これまで周辺では上町筋東側の清水谷地域を中心に、多くの調査が行われ、飛鳥時代の建物群や豊臣氏大坂城期の遺構・遺物が見つかっている(図１)。

調査に先立ち2007年３月12日に行われた試掘調査で、現地表下0.5mに古代にさかのぼると思われる柱穴が確認されたため、本調査を行うことになった。調査区は東西4.0m、南北3.0mに設定し(図２)、地表下0.5mまでの現代～近世の地層を重機掘削し、それ以下を人力で掘り進め、適宜、図面・写真による記録に努めた。

なお、本報告で示す水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP＋○m」と記した。方位は座標北である。

図１　調査地位置図

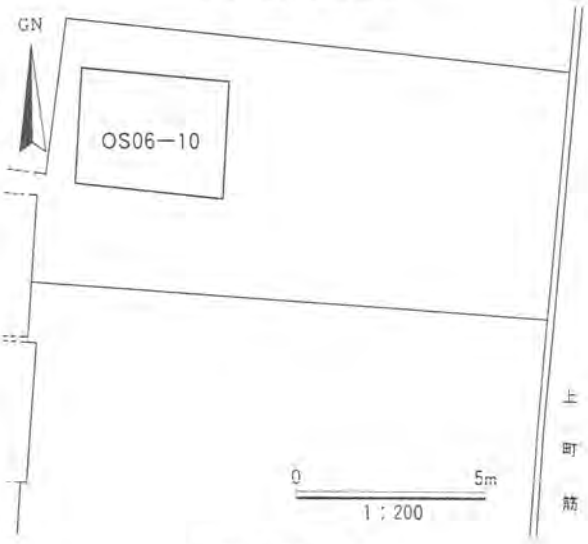



図２　調査区位置図

〈調査の結果〉

１．層序

層厚0.2mの現代盛土層以下、地表下1.0mまでの地層を第１～６層に区分した(図３)。

第１層：現代盛土層である。

第２層：暗褐色(10YR3／4)粗粒砂質シルト層で、層厚は約30cmである。第３層やその上面で検

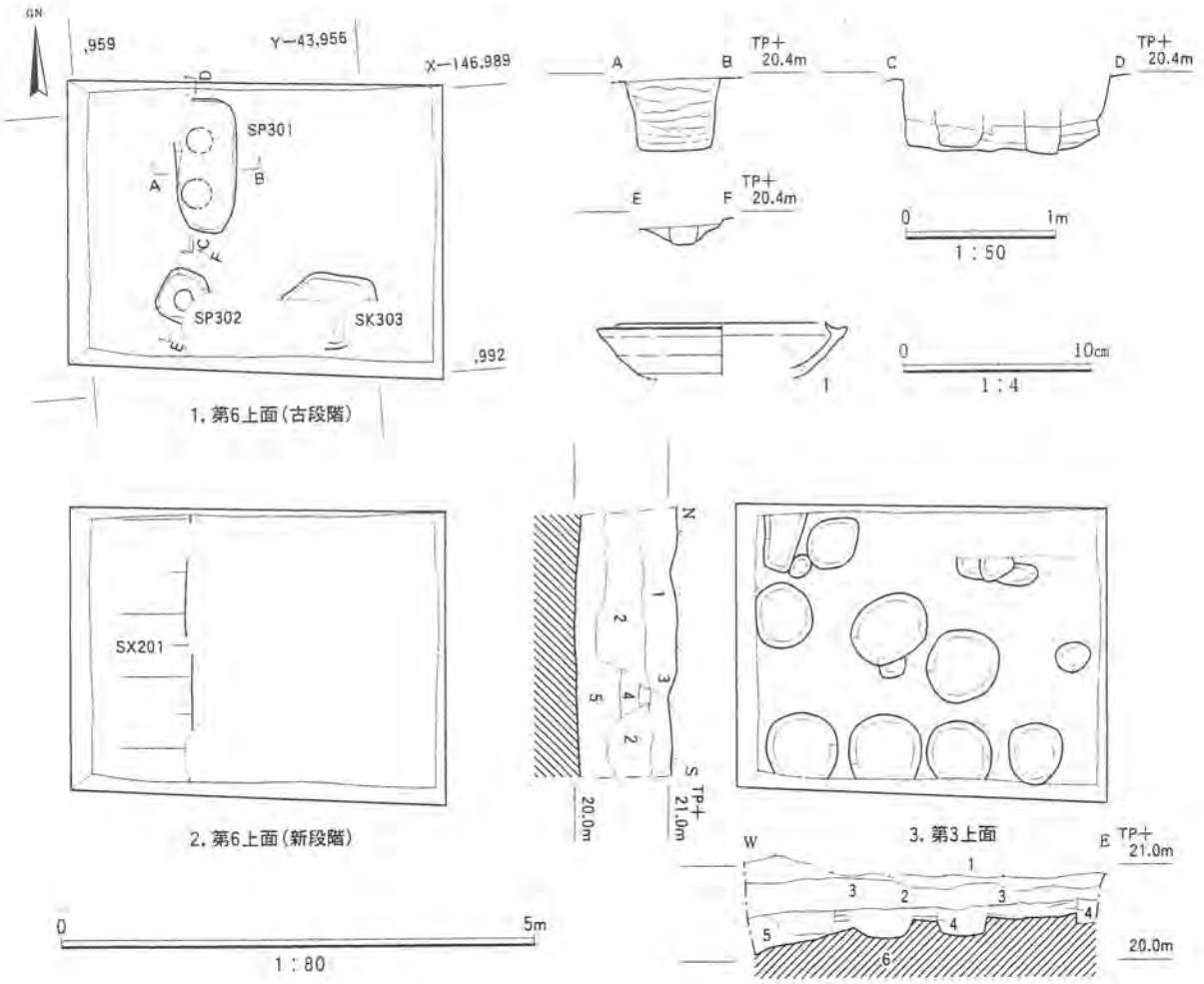



図３　調査区平面・断面図と出土遺物

出される遺構の埋土と岩相が類似し、恐らく、江戸時代に属すると考えられる。

第３層：褐色(10YR4／4)粗粒砂質シルト層で、層厚は約20cmである。上面で18世紀代の土壙が多数検出された。

第４層：にぶい黄褐色(10YR4／3)中粒砂質シルト層で、層厚は約10cmである。

第５層：褐色(10YR4／4)粘土質細粒砂層である。層厚は最大50cmで、SX201の埋土である。

第６層：明褐色(7.5YR5／8)粘土質細粒砂の地山層である。

２．遺構と遺物

遺構は検出面から大きく２時期に分類できる。さらに古い一群は、埋土の違いから２時期(古・新段階)に分類でき、全体では３時期の遺構が検出された(図３)。

ａ．第６層上面遺構と遺物

埋土の特徴から、柱穴SP301・302、土壙SK303と、落込みSX201の２時期に分かれる。前者の埋土は粘土質で、黄褐色系の地山と灰色系のシルトの偽礫を多く含む特徴がある。SP301は長辺1.4m、短辺0.6mの隅丸長方形をした柱穴である、深さは0.5mで、埋土掘削途中の平面精査によって、2つの柱痕跡が確認できた(写真中・下)。柱痕跡の直径は南が0.3m、北が0.25mである。土師器の細片のほ

か、須恵器杯1が出土した。口縁部の立上がりが小さいものの、直径が11cmとやや大きいが、ほぼ前期難波宮の時期に属するものと考えられる。SP302は一辺0.5mの隅丸方形で、深さは0.15m、柱痕跡の直径は0.2mである。SK303は長辺1.0m、短辺0.8mのやや歪な長方形で、深さは0.05mである。埋土はSP302と近似し、柱穴の可能性がある。SX201は調査区西で検出した、ほぼ南北方向に延びる落込みであり、幅は1.0m以上で、水平方向1mに対し、0.3m落ちる。埋土は均質的であり、水が流れた痕跡は確認できない。時期は特定できないが、土師器・須恵器の細片が出土した。

b．第3層上面遺構と遺物

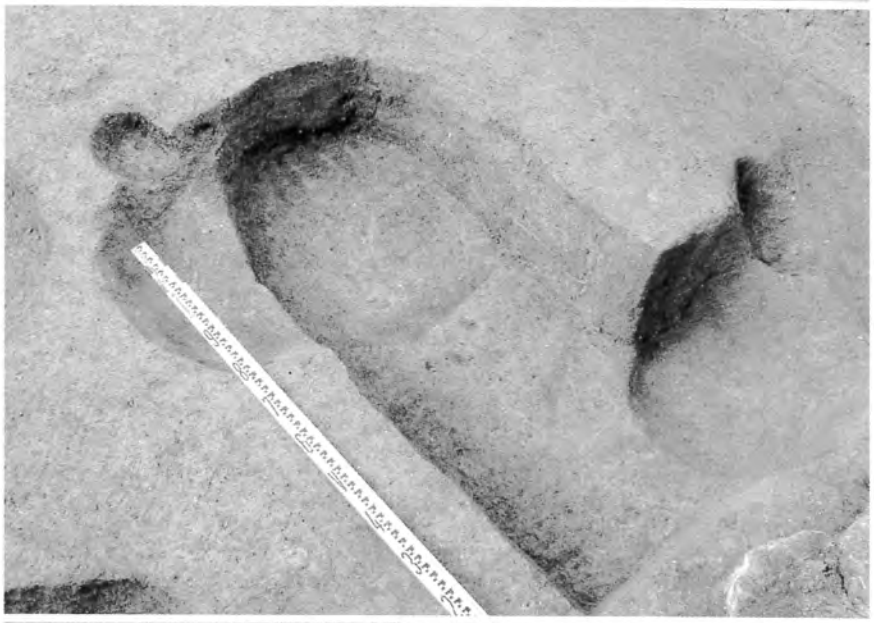
調査区の中央から南で、直径0.6～0.7mの円形をした深さ0.3m前後の土壙を8基検出した。調査区南壁沿いでは東西方向に4基並んでおり、規則性がある。埋甕の抜取り穴であろうか。埋土はしまりの悪い暗褐色粗粒砂質シルト層で、第2・3層と類似する。コンニャク印判による肥前磁器碗など、18世紀代の遺物が出土している。

〈まとめ〉

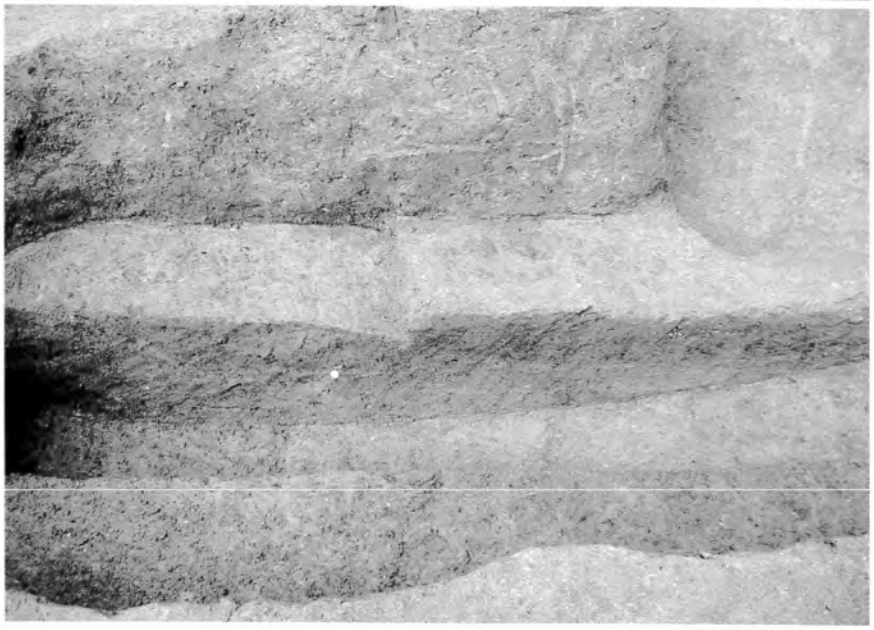
今回の調査では、古代にさかのぼる可能性の高い柱穴や、時期は不明ながら、南北に延びる溝と推定される落込みを確認することができた。中でも、柱穴SP301は1つの掘形に2つの柱を据えた、非常に珍しいタイプである。調査面積が限られていたため、全体の状況は明確でないが、今後、このような調査を蓄積することによって、上町筋の西側の実態が、徐々に明らかになっていくであろう。

遺構検出状況
（東から）

SP301柱痕跡検出状況
（北東から）



SP301断面
（東から）



# 上本町北遺跡発掘調査（ＵＮ06－１）報告書

・調査個所　　大阪市中央区上本町西３丁目17－１
・調査面積　　36㎡
・調査期間　　平成18年７月４日
・調査主体　　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　　文化財研究部次長　南秀雄、絹川一徳

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は大阪市立上町中学校の東側に位置し、上町筋の西側に面している(図１)。周辺では南側へ１ブロック隔てた街区を中心に小規模な調査が幾度か行われている。中でも第137次調査、UH92－２・UN04－１次調査では古代から中世にかけての遺構が検出されており、地層の遺存状況が良好であれば、古代から近世に至る各時期の遺構が残されている地域である[大阪市文化財協会1981、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1993・2005]。

今回、当地で共同住宅の建設が計画され、2006年２月21日に予定地内の東西２個所で試掘調査が行われた。その結果、東側の試掘壙２において、地表下約２ｍで土師器・須恵器片を含む古代から中世にかけての遺物包含層が確認された。これを受けて、包含層の拡がりや遺構等の有無を確認するため今回の調査を実施することとなった。

調査は2006年７月４日に実施した。重機により盛土を除去した後、人力を併用しながら地表下２ｍまで掘削したが、大部分が攪乱を受けていたため、遺存する地層等の実測・記録作業を行い、同日

図１　調査地位置図

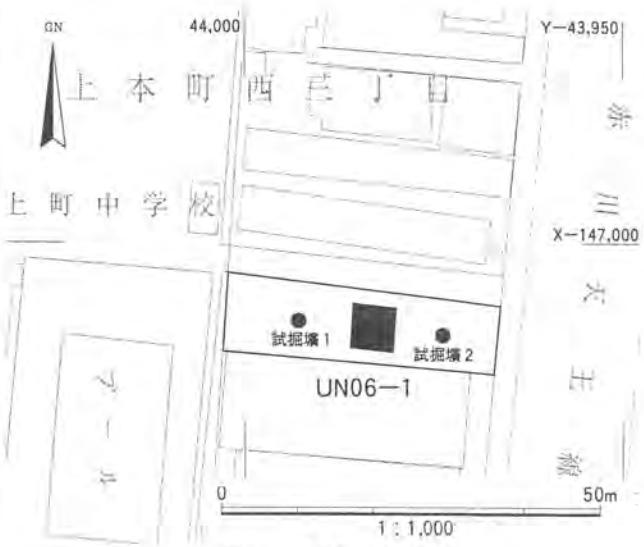


図２　調査区の位置

図３　地層断面図(東壁)

ですべての作業を終了した。

なお、掲載図で用いた方位は１／500大阪市道路現況図をもとにした世界測地系座標であり、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文および図中ではTP+○mと記した。

〈調査の結果〉

現地の標高は約TP+20mで、整地によって平坦化されていた。調査地のほぼ中央に36㎡(６m×６m)の発掘区を１個所設定したが、工事車両等の進入を確保するため、包含層が確認された試掘壙２の位置から西側へずらさざるをえなかった。調査区は、上面では６m×６mの大きさで設定したが、安全確保のため傾斜をつけながら掘削したので、最終的には地表下２mにおいて約5.5㎡を平面的に精査するに留まった。

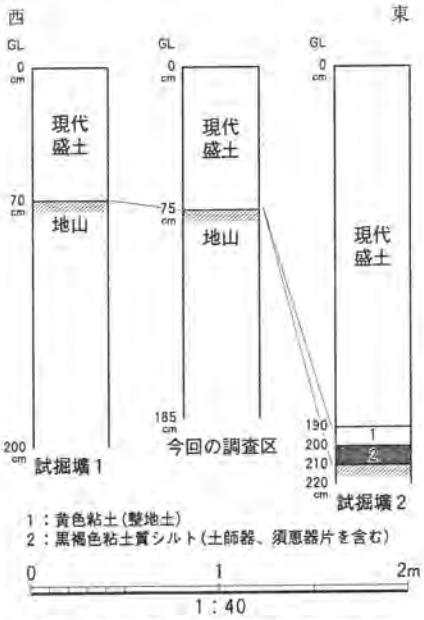



図４　試掘壙および調査区の柱状図

調査区内は攪乱が著しく、ごく一部に地山面が認められたのみである。地表下0.8mで本来の堆積層が認められ、粘土・シルト混りの中粒～粗粒砂層の４層に分けることができたが、いずれも地山で更新世の段丘構成層であった(図３)。先行して実施された試掘調査において試掘壙２で確認された遺物包含層は検出できず、試掘壙１の状況と同様であった(図４)。今回の調査結果に試掘調査の所見も加味すると、調査地のなかでも地山が高い部分は遺物包含層が削平され、東側の１mほど低くなっている部分にのみ残されていたのか、地形には大きな差はないが試掘壙２がちょうど遺構の内部に当っていたかのどちらかであろう。

今回の調査では遺物包含層の確認には至らなかったが、調査地周辺では、後世の削平が及ばなかった低地や斜面地において遺物包含層が残されている可能性は高いものと判断される。また、調査地の北側に豊臣期大坂城の惣構の南堀である空堀が推定されている[積山洋2000]が、今回の調査範囲内では検出されなかった。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1993、「専念寺庫裏建替工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH92－2)略報」：『平成4年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.69－77

2005、「上本町北遺跡発掘調査(UN04－1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.181－190

大阪市文化財協会1981、「第137次発掘調査概報」：『難波宮跡研究調査年報1975～1976.6』、pp.118－123

積山洋2000、「豊臣氏大坂城惣構南面堀の復原」：渡辺武館長退職記念論集刊行会編『大坂城と城下町』、思文閣出版、pp.43－59

発掘区全景
（西から）

発掘区全景
（南西から）

東壁断面
（西から）

# 上本町北遺跡発掘調査（ＵＮ06－３）報告書

・調 査 個 所　大阪市中央区中寺１丁目26－３・26－４
・調 査 面 積　110㎡
・調 査 期 間　平成18年７月14日～７月25日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、田中清美

〈調査に至る経緯と経過〉

調査個所は1594(文禄３)年に構築された豊臣氏大坂城の惣構堀の南側、生玉筋中寺町の北東隅に位置しており、周辺には本行寺・蓮成寺・妙徳寺などの日蓮宗・法華宗の寺院が立ち並んでいる。また、調査地の北東部、谷町７丁目１番地には古墳時代から奈良時代にかけての掘立柱建物群をはじめ、豊臣期の遺構・遺物が検出された谷町７丁目所在遺跡(TX97－１次調査地)がある(図１)。

図１　調査地位置図

大阪市教育委員会が調査地内で行った試掘調査では現地表面下1.25ｍで洪積層に至り、本層上に厚さ10㎝前後の古代の須恵器を含む地層が確認されたため、今回の調査となった。

本調査は建設工事の影響を受ける範囲(図２)に限って現地表面下約1.1ｍ前後にある洪積層の近くまで重機で掘削した後、人力掘削によって遺構・遺物を検出した。

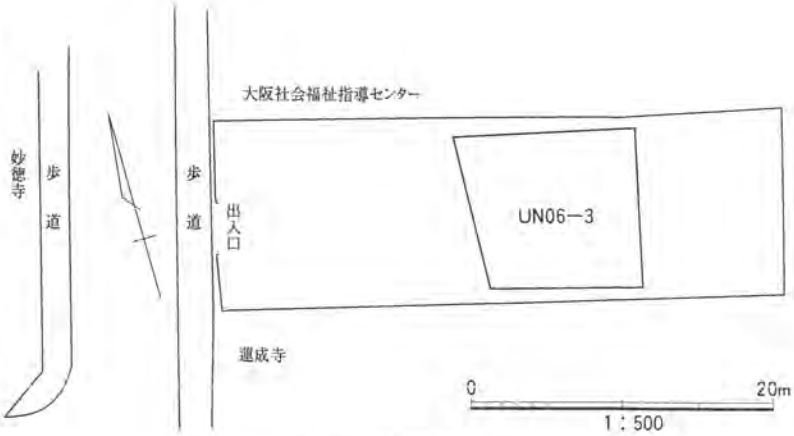


図２　調査区位置図

７月14日に重機による掘削に着手し、当日調査区の南部で第３層、北部で第４層を確認した。南部では第３層の上面で江戸時代末期から明治時代とみら

れる火葬墓や土葬墓が検出されたため、本層の時期や層厚を確認するため、東壁に沿って南北方向のトレンチを設定した。その結果、第３層で埋め戻された池状の大きな掘込みSX19を検出した。７月22日から調査区北東部に残存していた第４層下面の溝の調査を行った後、７月24日から第５層の下面で検出した遺構の調査および明治時代末期に埋め戻された井戸SE37の写真撮影・実測等を行って、７月25日には現地におけるすべての調査を完了した。

本調査で使用した方位は磁北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、挿図中ではTP＋○mと記した。

〈調査の結果〉

１．層序

本調査地区の基本的な層序について北壁および東壁の断面図を基に記述する(図３・４)。

第０層：黒褐色シルト混り砂礫および真砂土から成る現代の整地層である。層厚は50～70cmあり、調査地の東から西に向かって薄くなる。本層は戦前にこの地にあった本行寺関連の墓石片や瓦をはじめ、焼土ブロックやコンクリート破砕片を多量に含む。

第１層：10YR3／2黒褐色砂礫混りシルト層で、層厚は10～25cmある。本層は調査区の北西部のみで確認された地層であり、炭粒や灰・焼土・瓦・地山の偽礫を多量に含むほか、江戸時代中期の墓石の断片が出土した。

第２層：7.5YR5／4明褐色砂礫混りシルト層で、層厚は10～30cmある。調査区北西部の本層の下面では、焼土・炭・灰が多量に混る砂礫混りシルトで埋め戻された土壙SK23ほかが検出された。18世紀中葉の肥前系磁器鉢18ほか、18世紀後半から19世紀にかけての陶磁器や瓦が出土した。

第３層：第６層に由来する10YR4／4褐色～10YR4／6黄褐色シルト混り砂礫の偽礫を主とする整地層で、粘土質シルトの偽礫を多量に含む。層厚は調査地北東部が20～30cm、調査地南部の池状の

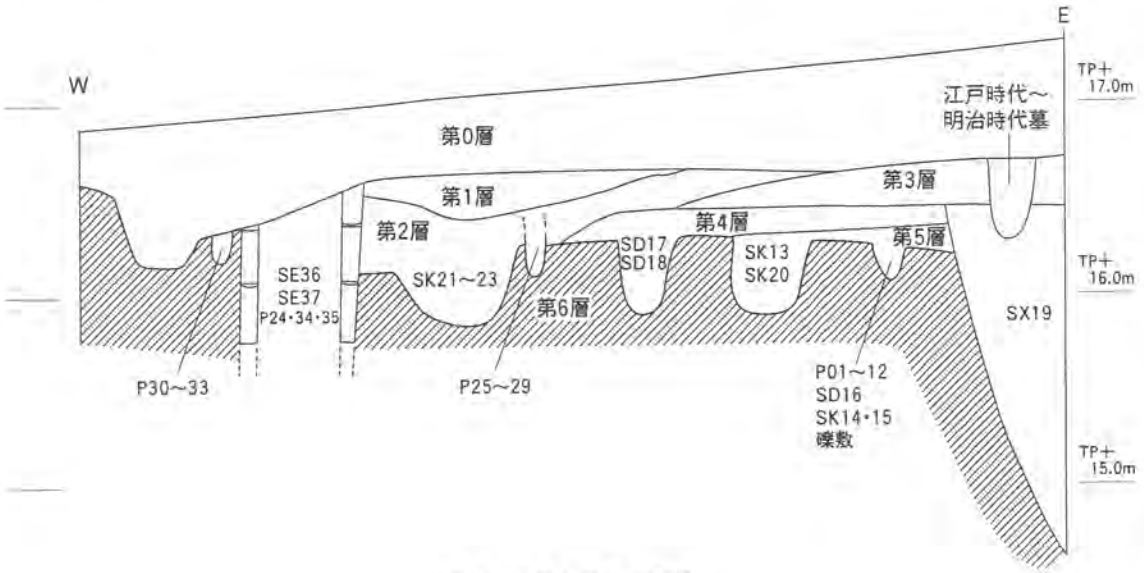



図３　地層と遺構の関係

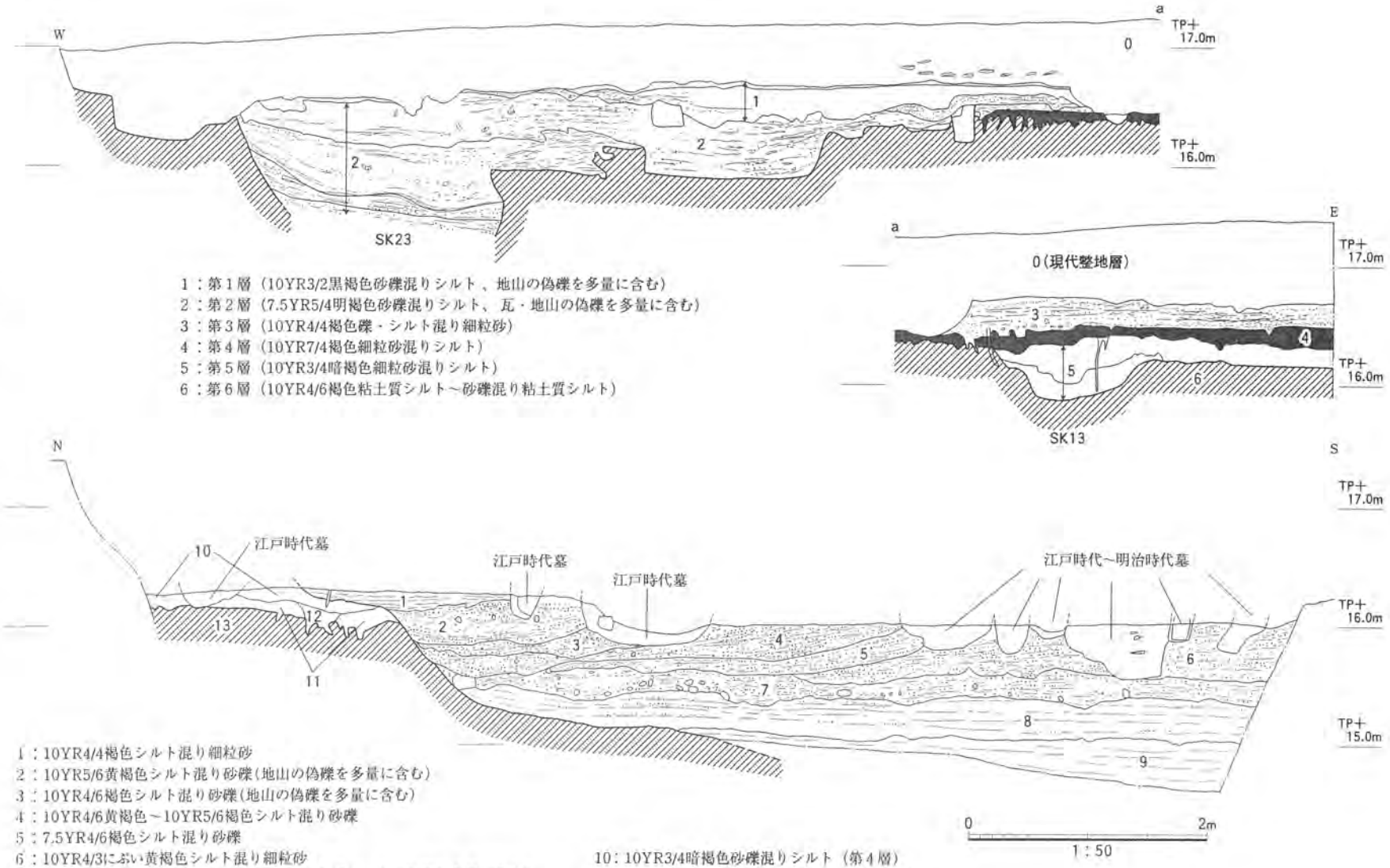



図4　北壁断面（上図）・SX19東壁断面（下図）実測図

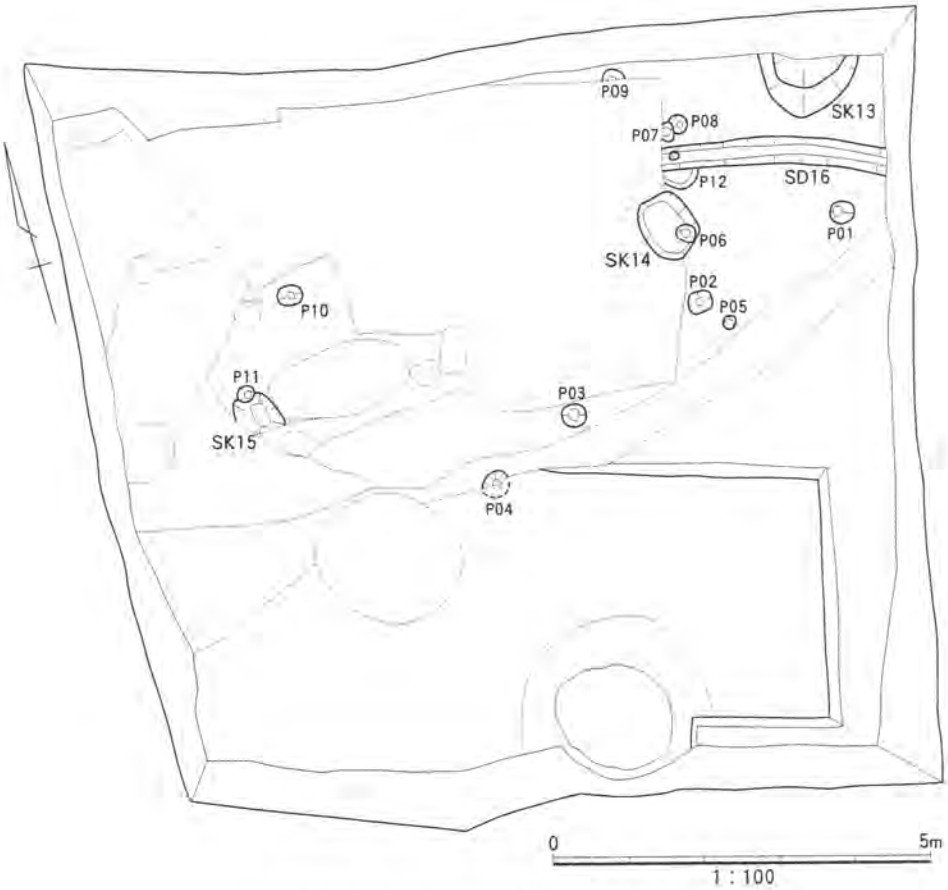



図５　第４・５層下面検出遺構実測図

掘込みSX19内では70～90cmあった。豊臣前期に属する瀬戸美濃焼皿底部3をはじめ、中世の瓦の細片が出土した。

第４層：10YR7／4褐色細粒砂混りシルト層で、層厚は10～20cmある。本層は調査個所の北東部のみに分布しており、溝SD17・18は本層下面の遺構である。古代の土師器・須恵器をはじめ、中世の瓦器の細片を含む。

第５層：10YR3／4暗褐色細粒砂混りシルト層で、層厚は15cm前後ある。本層は上層の第４層と同様に調査個所の北東部のみに分布しており、柱穴P01～12、溝SD16、土壙SK13～15は本層下面の遺構である。７世紀後半代の須恵器壺20・21、土師器皿19などが出土した。

第６層：10YR4／6褐色粘土質シルト～砂礫混り粘土質シルト層で、当地域の地山(洪積層)である。本層上面の標高はTP+16.1～16.6mあり、調査個所の東から西に向かって高くなっている。なお、調査個所の西側は本層の上面まで後世に大きく削平されており、北東部に分布している第４・５層は確認されなかった。調査個所の北東150m地点の谷町７丁目１番地に位置するTX97－１次調査地の地山はTP+19m前後で確認されており、調査地との比高は３m余りある。

２、遺構と遺物

ａ．第５層下面の遺構と遺物(図３・５)

P01～04　後述する第４層上面で検出した池状の掘込みSX19より北側の第６層(地山)が残る範囲

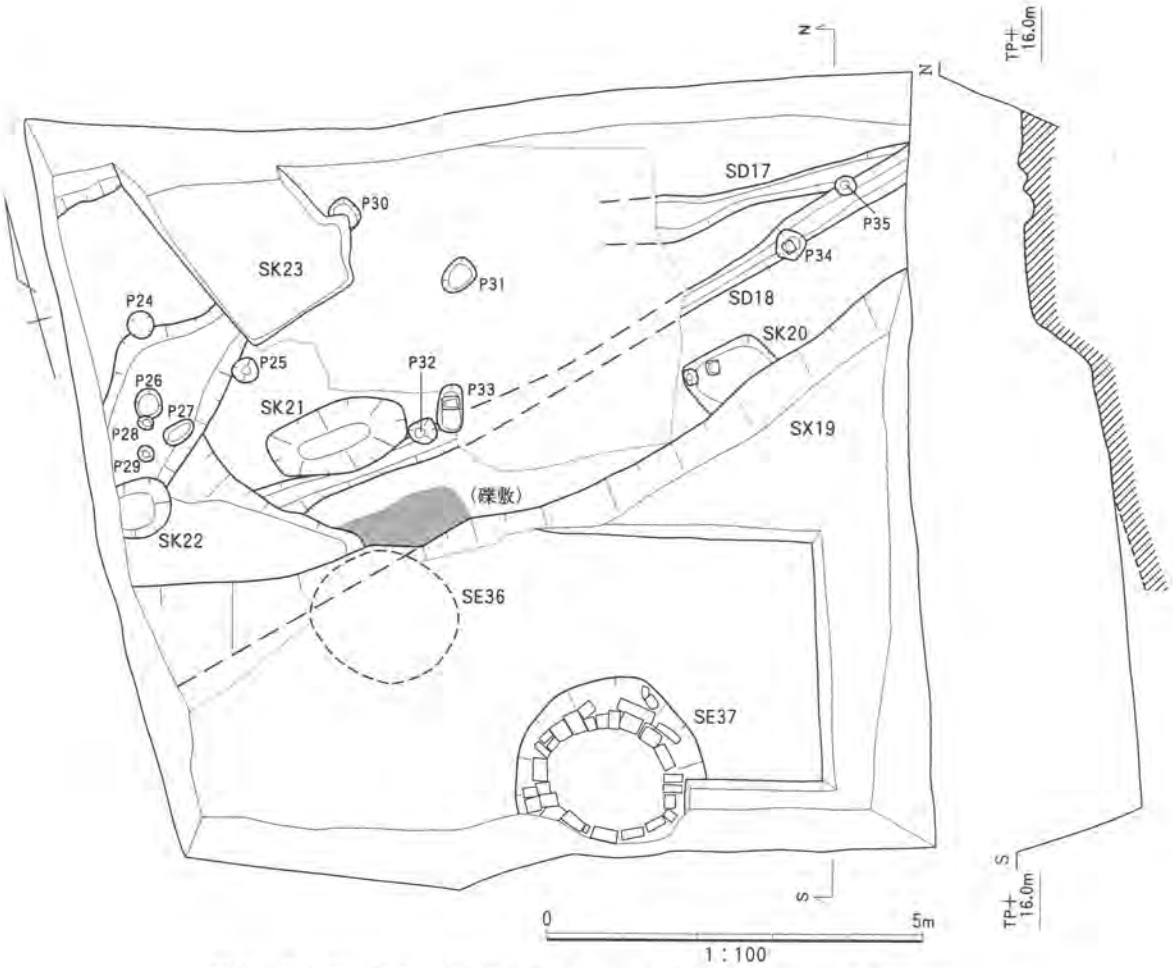



図6　第0層基底面、第2層下面、第4層上面および下面検出遺構実測図

に分布する柱穴群である。P01～04は北東から南西方向に並ぶ柱穴で、掘形は直径0.15～0.30m、深さは検出面から0.25m前後ある。これらの掘形の埋土は地山の偽礫を含む褐色細粒砂混りシルトで、直径0.15m前後の柱痕跡の埋土は黒褐色細粒砂混りシルトである。それぞれの柱間は1.30～2.20mと不揃いであり、1棟の建物ではなく柵になる可能性がある。

P05～12　掘形の形状や規模、深さをはじめ、埋土も上述したP01～04とさほど変わらない。また、P12は第5層下面の溝SD16に、P08はP09に切られており、P06は土壙SK14、P11は土壙SK15を切る。

以上の柱穴の時期は、遺構の層準やわずかではあるが、古代とみられる土師器や須恵器の細片が出土したことから、中世以前までさかのぼるものとみておきたい。

SK13　調査個所の北東隅に位置する深さ0.40m前後の土壙であるが、その大半は調査範囲外であるため、形状や詳細な規模については明らかでない。

SK14　調査個所の北東部に位置する東西0.70m、南北0.90m、深さ0.30m前後の隅丸方形を呈する土壙である。埋土は地山の偽礫を含む暗褐色砂礫混りシルトで、古代の土師器の細片が出土した。

SK15　調査個所の北西部に位置する東西0.50m、深さ約0.30mの土壙であるが、南側を後世に攪乱されており、形状や詳細な規模は明らかでない。埋土は地山の偽礫を含む黒褐色砂礫混りシルトで、

図7　出土遺物実測図

SX19(1～4)、SK23(5～8・11～13)、SK21(9・10)、SK22(14・15)、SE37(16・17)、第2層(18)、第5層(19～21)

遺物は出土しなかった。以上の土壙の時期は出土遺物や埋土からみて、柱穴群P01～12と同時期と考えられる。

SD16　調査個所の北東部に位置する幅0.30m、深さ0.20m前後の東西方向の溝である。溝内には黒褐色砂礫混りシルトが堆積しており、土師器の細片が少量出土した。

b．第4層下面検出遺構と遺物(図3・6)

SD17　調査個所の北東隅に位置する幅0.20～0.60m、深さ0.15m前後の東西方向の溝で、東部をSD18に切られている。溝内には暗褐色細粒砂混りシルトが堆積しており、土師器の細片が出土した。

SD18　SD17の南に位置する幅0.25～0.40m、深さ0.15m前後の東西溝である。溝内には最下層にごく薄い砂礫が堆積していた以外、SD17の埋土と変わらない。土師器の細片が出土した。本溝の方位は南に位置するSX19の方位とほぼ同じであることから、豊臣前期以前に機能していたものと考えられる。

礫敷　調査個所のほぼ中央に位地する礫敷で、南北0.80m、東西1.70mの範囲に直径0.02m大の礫を敷き詰めている。礫敷の時期は、南側を池状の掘込みSX19に切られていることから後述するSK20と同様に中世の可能性が高い。

SK20　SD18の南に位置する東西1.20m、深さ0.20m前後の土壙であるが、南側をSX19に切られていることから、形状や詳細な規模については明らかでない。埋土は暗褐色細粒砂混りシルトで、土師器や瓦器の細片が少量出土した。

c．第4層上面検出遺構と遺物(図3・4・6)

SX19　調査個所の中央部以南に位置する南西から北東に延びる池状の掘込みで、深さは検出面から1.5m以上ある。埋土は上層の整地層と下層の機能時堆積層に大きく2分される。下層は暗灰黄色粗粒砂混りシルト層および暗灰黄色含砂礫粘土質シルト層で、水漬きで堆積したことを示す細礫のラミナが確認された。15世紀代の瓦質土器鉢、土師器をはじめ、古代の瓦1・2、大坂本願寺期の備前焼擂鉢4などが出土したことから、秀吉が大坂城を築いた1583(天正11)年以前の遺構と考えられる。上層は洪積層に由来する褐色シルト混り細粒砂・黄褐色シルト混り砂礫・褐色シルト混り砂礫・にぶい黄褐色シルト混り砂礫からなるが、いずれも粘土質シルトの偽礫を多量に含む。上層の層厚は調査個所の東壁で確認したところでは0.70～0.80mあった。本層から中世とみられる瓦のほか、豊臣前期に属する瀬戸美濃焼皿底部3が出土したことから、整地の時期は徳川期以前の可能性が高い。

d．第2層下面検出遺構と遺物(図3・6・7)

SK21　調査個所の北西部に位置する東西1.90m、南北約1.00m、深さ0.35m前後の隅丸長方形を呈する土壙である。埋土はオリーブ灰色砂礫混りシルトで、18世紀後半から19世紀初頭の青磁瓶9・肥前系磁器碗10などが出土した。

SK22　調査個所の西部に位地する径0.80～0.90m、深さ0.40m前後の土壙である。埋土は地山の偽礫を含む茶褐色砂礫混りシルトで、18世紀後半頃の肥前系磁器小杯14・見込みに花柄のある肥前系磁器鉢15が出土した。

SK23　調査個所の北西部に位置する東西1.60m、南北3.00m以上、深さ1.00m以上の長方形を呈

する土壙である。埋土は地山の偽礫や瓦を多量に含む明褐色砂礫混りシルトで、土師器灯明皿5・肥前系磁器碗6・肥前系磁器花瓶11・軒丸瓦7・軒平瓦8など、18世紀後半から19世紀初頭に属する陶磁器、瓦をはじめ、一石五輪塔12(梵字が刻まれている)・13などが出土した。

以上の第2層下面で検出した土壙は、出土遺物の内容や時期からみて、調査個所がかって本行寺の寺域であったころのゴミ穴とみられるが、一石五輪塔12・13は豊臣期以前の可能性があり、当地に本行寺が移転した時期を考えるうえで重要な資料となろう。第2層では高台内面に大明年製と書かれた18世紀中葉の肥前系磁器鉢18以外にも呉須が綺麗な肥前系磁器をはじめ、肥前陶器花瓶や青磁香炉・線香立など寺院で使用されたとみられる陶磁器が出土している。

e．第0層基底面および第2層内検出遺構と遺物(図3・6)

P24～35　調査個所の中央部以北に位置する径0.20～0.40m、深さ0.10～0.25m前後の柱穴および小穴群である。平面形が小判形を呈するP33では穴の北から墓石を転用した礎石が、P35では穴の中央に0.10～0.13m大の角礫が礎石として据えてあった。このほかの小穴については明確な柱痕跡は確認されなかったが、埋土は下層の第4～6層の偽礫を含むオリーブ灰色砂礫混りシルトあるいは灰色細粒砂混りシルトのいずれかであり、18世紀末から19世紀後半代の陶磁器の細片が出土したものもあった。以上のうちP24以外は第2層内検出遺構である。

SE37　調査個所の南端に位置する井戸であるが、掘形の一部は調査範囲外である。本調査では建物基礎の深さまで調査を行った。掘形は直径約2.5mあり、井戸側は墓石を転用したものである。墓石には1705(宝永2)年・1710(宝永7)年・1721(享保6)年など、18世紀前半の年号が刻まれたものが使われていた。井戸側内から18世紀末から19世紀初頭の瀬戸腰錆碗16、18世紀後半代のハケで白泥を文様風に塗った肥前系陶器碗17をはじめ、19世紀代の軒平・軒丸瓦、瓦質土器線香立などが出土した。井戸の廃絶時期は、井戸側内から出土した卒塔婆の中に1909(明治42)年の年号が記されたものが確認さ

図8　調査地位置図

[内務省大阪実測図(1888(明治21)年作成)に加筆]

れたため、20世紀初頭以後と考えられる。

〈まとめ〉

今回の調査では調査個所の中央部以南で検出された池状の掘込みをはじめ、明治以降の整地に伴う攪乱によって地山の残りが悪く、江戸時代以前の遺構については性格の判明したものは少なかった。しかし、調査地域の町割とは大きく異なる方位を取る池状の掘込みSX19を確認することができた。SX19は既述したように豊臣前期の瀬戸美濃焼を含む地山由来の第３層で埋め戻されていること、整地に用いた土砂はその規模から考えて調査地の北250mにある惣構堀の掘削土である可能性がある。

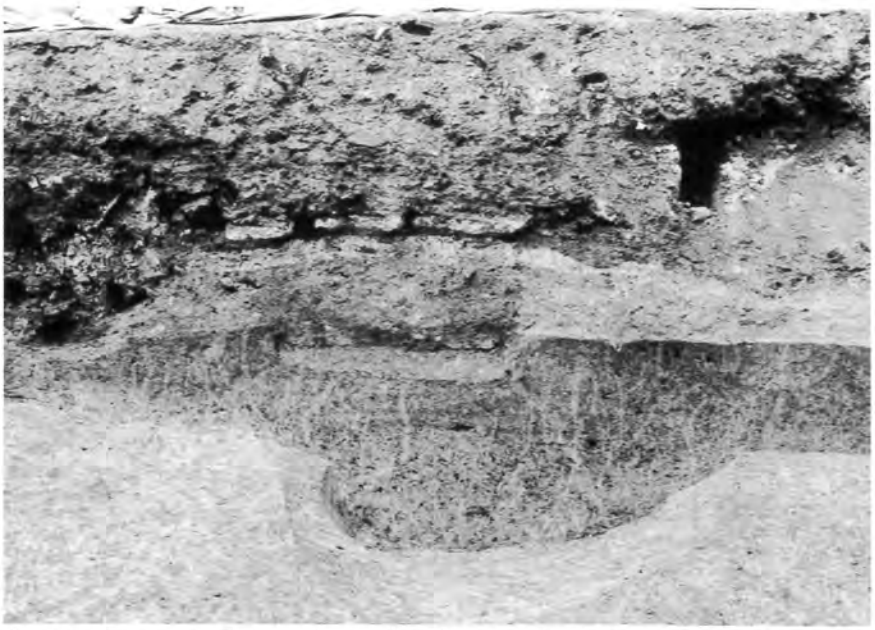
調査地は『大阪実測図』[内務省1888]によると、元は中寺町の北東部の一画を占める本行寺の寺域内であった(図８)。本行寺は1580(天正８)年に開創と伝える日蓮宗八品本興・本能寺の末寺であったが、1909(明治42)年に日本法華宗本興寺末寺に改宗し、その後しばらくして、寺域を現在の地に移している。中寺町の北端から南の一街区に並ぶ蓮成寺(1591(天正19)年開創)、妙寿寺(1596(慶長元)年開創)、宝泉寺(1608(慶長13)年開創)、福泉寺(1604(慶長９)年開創)、法性寺(1608(慶長13)年開創)と伝える寺院のうち、天正年間とする本行寺・蓮成寺をはじめ、惣構堀開削直後の慶長年間開創の妙寿寺・宝泉寺・福泉寺・法性寺などは、内田九州男氏が既に指摘されているように1594(文禄３)年の惣構堀の開削に伴って調査地域に移転させられた寺々であった可能性がある[内田九州男2004]。また、土壙SK23から18世紀後半から19世紀初頭の陶磁器に混在して出土した豊臣氏大坂城築造以前の一石五輪塔も本行寺が移転先から移した墓石の可能性がある。今回の調査は狭小な範囲ではあったが、得られた成果は生玉筋中寺町一帯の豊臣期における都市計画の実態を究明するうえで基礎的な資料といえる。今後調査地域の調査が進展すれば中寺町一帯の造成時期のみならず寺町の成立経緯についても明らかになるものと思われる。

＜参考文献＞

内田九州男2004、「秀吉の遷都構想と大坂の都市建設」:『歴史科学』176　大阪歴史科学協議会

内務省1888、『大阪実測図』

北壁断面（東部）
（南から）



北壁断面（西部）
（南から）

SX19東壁断面
（西から）

調査区全景
（西から）

調査区北東部全景
（西から）

墓石を井戸側に
転用した井戸SE37
（北から）

# 川　西　　区

# 江戸堀１丁目における
# 埋蔵文化財発掘調査（ＥＤ06－１）報告書

・調査個所　大阪市西区江戸堀１丁目27-67ほか
・調査面積　56㎡
・調査期間　平成19年２月15日～２月19日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、岡村勝行

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は土佐堀川の南約100m、西横堀川の西約100mに位置する(図１)。江戸時代、北の中之島一帯とともに、江戸堀川などの堀川沿いには多数の蔵屋敷が設けられた。

当該地の大規模開発に先立ち、2007年2月1日に行われた試掘調査で、現地表下1.3mに江戸時代と考えられる整地層や石垣が確認された。整地層の時期、遺構の状況、さらに下位の状況を確認するために、本調査を行うことになった。調査区は地層・遺構の遺存状況が比較的良好であった試掘１の近くに、東西16.0m、南北3.5mに設定した(図２)。地表下約1.3mまでの現代～近世の地層をすべて重機によって掘削する予定であったが、西半分は、既設建物の強固な基礎によって、一部を除いて遺構面が破壊されていたため、あえて基礎を除去せず、調査の主眼を東半分に置くこととした。まず、地表下約1.3mにある整地層上面で検出した遺構群の記録を行った。さらに下位の調査を行うため、重機により厚い砂の盛土を除去しようとしたところ、地表下約2.8m地点で、激しい湧水があり、調査

図１　調査地位置図

図２　調査区と試掘の位置図

区の壁面が崩壊する危険性が高まったため、調査の継続を断念し、下位層については目視による確認に留めた。

本報告で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では「TP±○m」と記した。挿図中の方位は座標北を示す。

〈調査の結果〉

1．層序

層厚0.2mの現代盛土層以下、地表下約2.8mまでの地層を第1～8層に区分した(図3)。

第1層：現代盛土層および攪乱層である。

第2層：明黄褐色(2.5Y6／8)粗粒砂の盛土層で層厚は約40cmである。

第3層：灰色(7.5Y4／1)粗粒砂質粘土の整地層で層厚は約3cmである。

第4層：黄褐色(10YR5／6)粗粒砂の整地層で層厚は約3cmである。

第5層：明黄褐色(2.5Y6／8)粗粒砂の盛土層で層厚は約50cmである。

第6層：明黄褐色(2.5Y6／6)粗粒砂質粘の整地層で層厚は約4cmである。土師器・瓦など江戸時代の遺物を多く含む。第5層堆積物で一気に埋められ、上面で礎石建物や土壙、土器集中部など、18世紀代の遺構・遺物がよく保存されて検出された。

第7層：黄褐色(2.5Y5／6)粗粒砂質粘土で、整地層である。層厚は約5cmである。上面で礎石を確認した。

第8層：明黄褐色(2.5Y6／8)粗粒

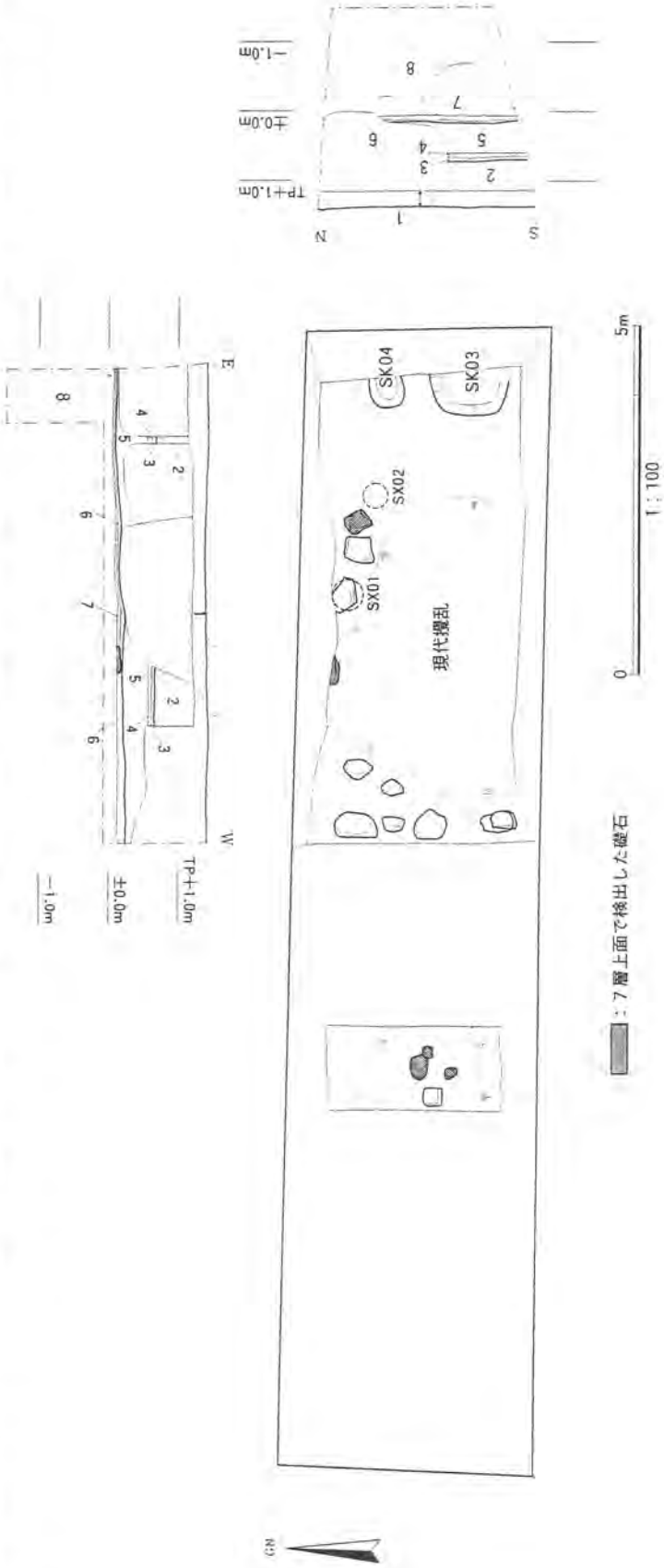



図3　調査区平面・断面図

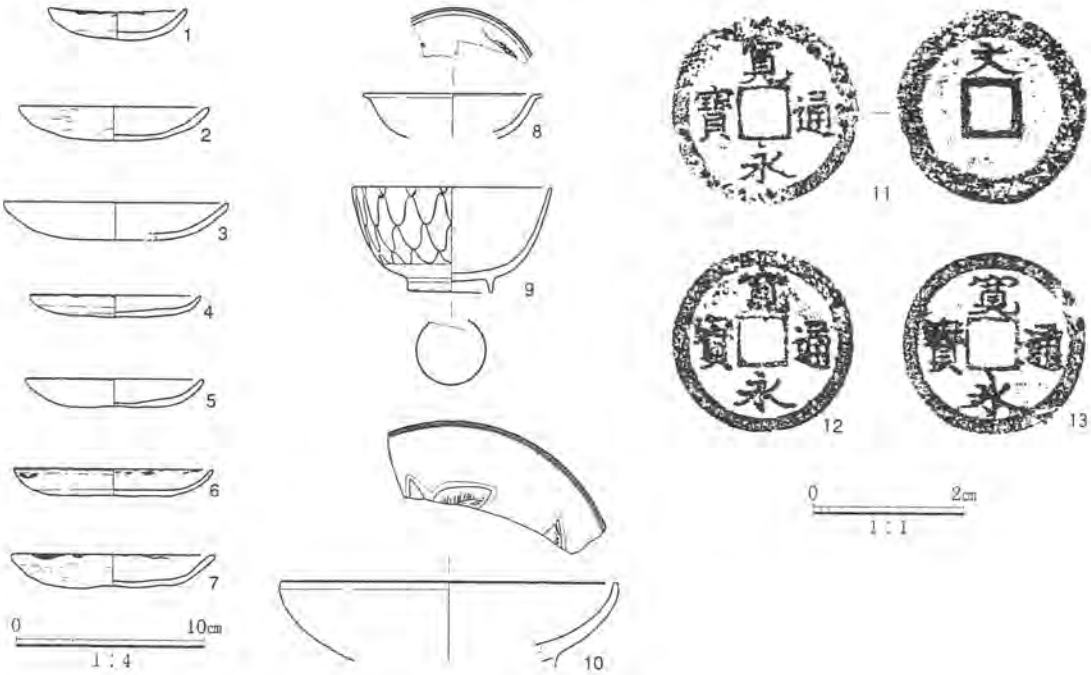



図4　出土遺物

砂の盛土層で層厚は約150cmである。その直下に黒褐色シルトからなる薄層と、さらにその下位に続く粗粒砂層を確認した。

2．遺構と遺物

江戸時代後期の遺構と遺物

18世紀代と推定される種々の遺構と遺物を、第6～8層上面の3面で検出した(図3・4)。

a．第6層上面

礎石、土器集中部SX01がある。礎石は一辺30～60cmの上面の平たい石で、10個前後を確認した(写真中)。調査区の幅が狭く、攪乱による遺構面の欠失も少なくないため、建物の復元は明確でない。調査区中央で、南北に3つ並ぶ礎石間の長さは1.0～1.2mである。SX01からは手づくねの土師器である灯明皿10数枚が、礎石の上を中心に集中して出土した。皿はすべて煤が付着しており、3種類の大きさがある。小1は口径7.2cm前後、中2は10.0cm前後、大3は11.8cm前後であり、それぞれ3～5個体確認できた(写真下)。SX01の近くから肥前磁器の染付皿8や、寛永通宝11～13が出土した。前者は18世紀前半に位置づけられる資料である。こうした遺物から、第6層上面遺構はおおむね18世紀代に属すると推定される。

b．第7層上面

第6層の除去後に検出した礎石5個と土器集中部SX02がある。SX02は最低6個体分の灯明皿が確認でき、SX01と共通した特徴があるが、ロクロ整形で内面を施釉した灯明皿が主体となる点が異なる。皿の大きさは2種類あり、小4･5は口径9.0cm前後、大6は10.7cm前後である。このほか、手づくねの土師器の灯明皿7も出土している。第7層上面遺構と遺物は、直上の第6層のそれとよく似た状

況にあり、両者の間にはあまり時間差がなかったと推定される。

c．第８層上面遺構と遺物

調査区東端で２基の土壙SK03・04を検出した。SK03は一辺1.2m、深さ0.8m、SK04は一辺0.5m、深さ0.3mの方形の土壙であり、埋土はともにシルトの偽礫をまばらに含む極粗粒砂であった。前者からは肥前磁器9・10が出土した。9は一重網目の染付碗で18世紀前半頃、10は青磁皿で17世紀後半以降に位置づけられる資料である。

〈まとめ〉

今回の調査では、18世紀代と考えられる生活面が、厚い砂の盛土によってパックされている状況が明らかになった。時期は確定できなかったものの、下位層についても同様な状況が一部確認でき、非常に保存状態のよい遺構・遺物の存在が期待できる。今後さらに周辺の調査成果を蓄積することにより、この地域の遺跡の実態が、より詳細に解明されるであろう。

調査区全景
（東から）

礎石検出状況
（南から）

SX01検出状況
（北から）

# Ⅳ 天 王 寺 区

# 大坂城跡発掘調査（ＯＳ06－３）報告書

・調査個所　大阪市天王寺区清水谷町17－９
・調査面積　80㎡
・調査期間　平成18年７月18日～７月22日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、黒田慶一

〈調査に至る経緯と経過〉

調査個所は長堀通の南側で、飛鳥時代の掘立柱建物を検出したOS95－12次調査地の北隣である（図１・２）。周辺での調査例は多く、おもに飛鳥時代の遺構・遺物を検出している［大阪市文化財協会2002］。

2006年６月15日、大阪市教育委員会が敷地西側で試掘調査を行った結果、現地表下0.3mで地山に至り、地山上面に遺構があることが確認されたので、本調査を行うこととなった。ただし、建設予定建物の基礎が浅いことから、深い遺構や新しい遺構は市教委の指示で掘削しないこととした。

７月18日、調査員立会いのもと機械掘削を行った。調査区の南西部は地山が高く残っていたが、直上まで現代盛土が及んでいた。調査区の北と東は大きく高度を下げる急斜面で、その落込みについては南北方向にサブトレンチを設定の上、堆積状況を確認するに止めた。古代の柱穴を２基確認したので、７月22日に基準点測量を行い、すべての調査を終了した。

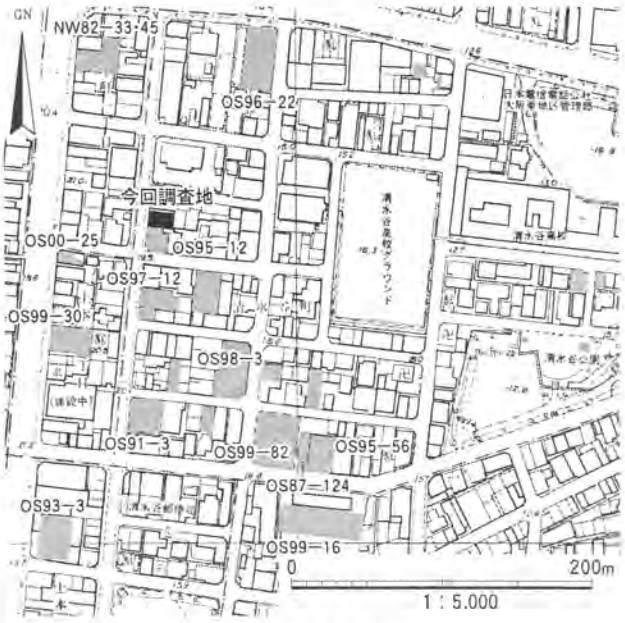



図１　調査地位置図

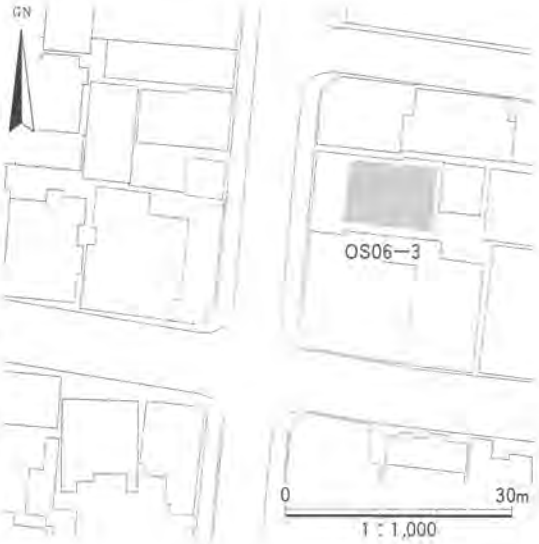



図２　調査区位置図

なお、座標北は世界測地系に基づき、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いた。水準は本文・挿図中ではTP＋○mと記す。

〈調査の結果〉

1．層序(図3)

第0層：現代盛土である。

第1層：落込み内に分布する層厚約50cmの近代盛土層である。上部が黒色(10YR2／1)シルト混り粗粒砂、下部が褐灰色(10YR2／1)シルトからなる。

第2層：落込み内に分布する層厚約20cmの近世作土層である。灰色(5Y4／1)シルト混り粗粒砂からなり、上面がほぼ地山のテラス面と合致する。

第3層：落込み内に分布する近世盛土層である。黄灰色(2.5Y4／1)小礫混り粗粒砂層で、18世紀後半の陶磁器類を多く含む。

第4層：黄橙色(10YR8／6)小礫混りシルトの地山層である。

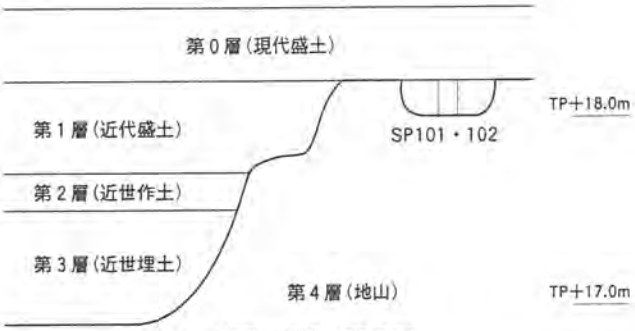


図3　地層と遺構の関係図

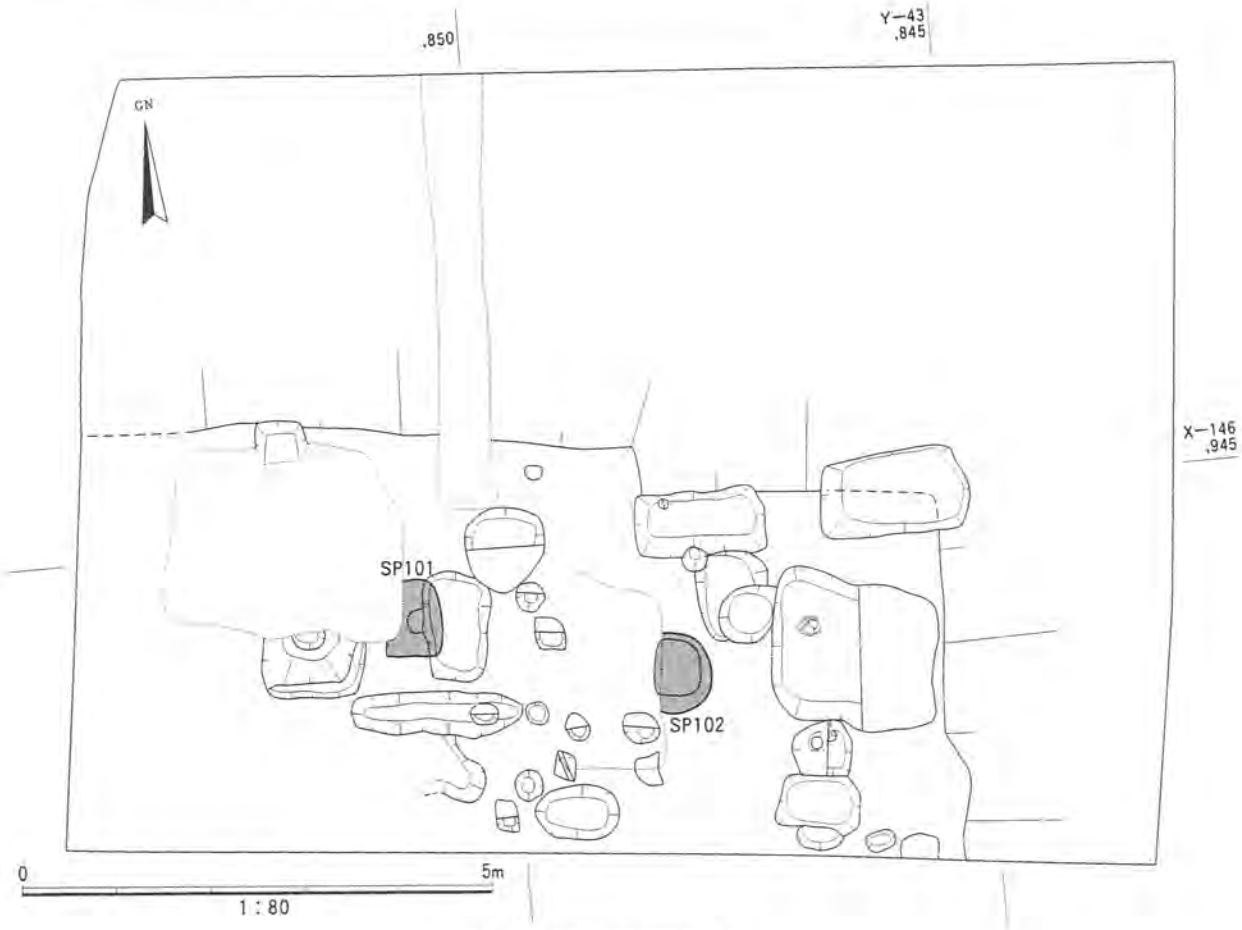


図4　第4層上面遺構平面図

.855
Y−43
.850
X−146
.940
GN
SA01
.945
SP101
OS06−3次調査地
（今回調査地）
SP102
.950
OS95−12次調査地
SB02
.955
SB01
.960
0
5m
1：100

図５　古代遺構配置図

2．遺構と遺物

a．古代の遺構(図4・5)

2基の柱穴を第4層上面で検出した。

SP101　長辺0.8m、短辺0.6mの平面が長方形の掘形の中央に、直径0.25mの柱痕跡がある。掘形の埋土は橙色(5YR6／6)粗粒砂混り粘土で、柱痕跡の埋土は黄橙色(7.5YR7／8)粘土混り粗粒砂である。

SP102　掘形は直径0.8mのほぼ円形で上面に、一辺0.6mの隅丸方形の抜取り穴がある。埋土はともににぶい褐色(7.5YR5／3)粘土混り粗粒砂である。

これらの柱穴のうち、SP101はOS95－12次[大阪市教育委員会･大阪市文化財協会1997]で検出された柱列の北延長上にあり、連続する可能性がある。SP101の東側は地山面が高いにもかかわらず、対になる柱穴が存在しなかったことから、建物ではなく塀SA01であると推定される。SA01はSB02の柱穴を切り、芯々間は2.3mで3間以上存在したと考えられる。

b．第3層出土遺物(図6)

1・2ともに肥前磁器である。1は蓋で外面にコンニャク印判の蕪を押す。2は青磁染付で、口縁部内面に四方襷文、見込に五弁花、底部外面に字款を配する。いずれも18世紀後半に位置づけられる。

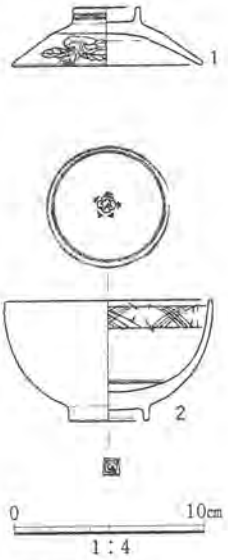


図6　遺物実測図

〈まとめ〉

今回の調査成果は、古代の柱穴2基と18世紀後半に埋められ、耕作地として利用された落込みを検出したに留まるが、南隣のOS95－12次調査成果と付き合わせると、かなり具体的に飛鳥時代の遺構配置を復元することが可能となる。OS95－12次調査でも最低2時期の建物の造替えが考えられたが、東西棟SB02撤去後に南北方向の塀SA01が作られたことが明らかとなった。

今回調査地は北と東で急斜面に臨む台地であるが、その土地利用のあり方も含めて、前期難波宮南方の様相が徐々にではあるが、判明しつつある。

参考文献

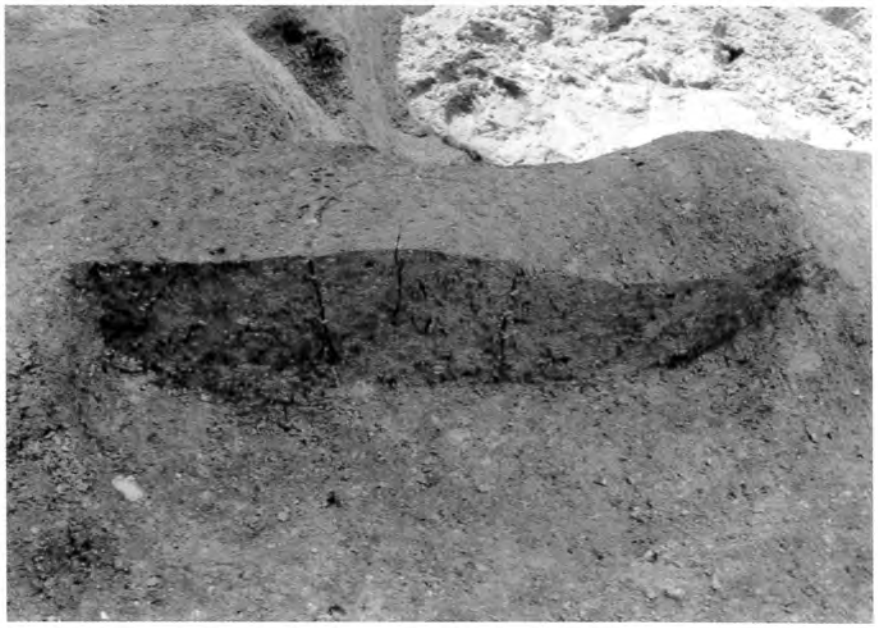
大阪市教育委員会･大阪市文化財協会1997、「竹網氏による建設工事に伴う発掘調査(OS95－12)略報」『平成7年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.59－63

大阪市文化財協会2002、『大坂城跡』Ⅵ、pp.219－233

調査地全景
（西から）

柱穴検出状況
（南西から）

柱穴SP101
（東から）



# 難波京朱雀大路跡発掘調査（ＮＳ06－１）報告書

・調査個所　大阪市天王寺区清水谷13－23
・調査面積　32㎡
・調査期間　平成18年11月１日～11月７日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄・松本啓子

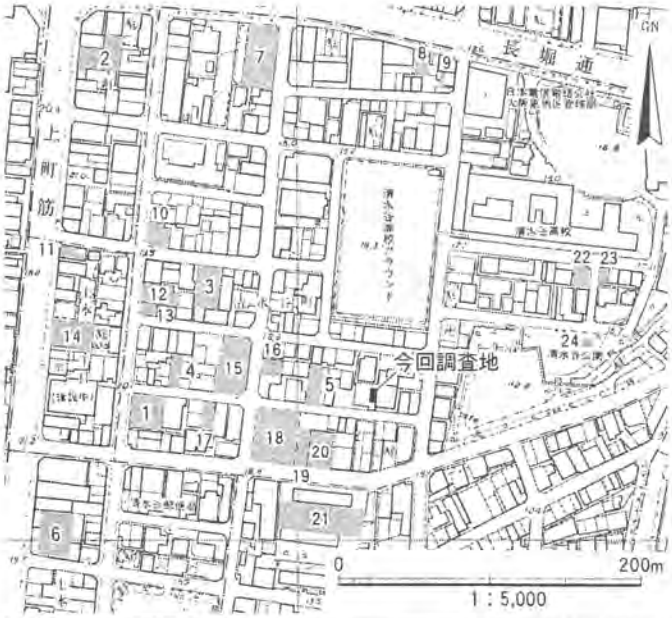
〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は長堀通の南、上町筋の東に位置している（図１）。調査地の南には文禄３（1594）年に豊臣期大坂城の惣構南堀が掘削され、その痕跡が調査地の東側の清水谷公園より東南側の急激に低くなる地形として残っている。調査地の北約800mには７・８世紀の難波宮跡があり、宮殿の中心から真南に延びる朱雀大路が調査地の東側付近を通るものと推定されている。

周辺の発掘調査では、飛鳥時代の掘立柱建物や区画溝（OS88－97・91－3・92－7次などの調査）、豊臣時代の大坂城惣構の堀（OS93－3次調査）などが見つかっている（図１・５）［大阪市文化財協会2002］。

大阪市教育委員会による試掘調査で、周辺の地山である黄白色粘土層が、現地表より0.7m前後の深さによく残っていることが確認されたため、大阪市教育委員会と事業者との協議を経たのち、本調査を実施するに至った。

調査は平成18年11月１日から開始した。大阪市教育委員会の指示に基づき、東西４m、南北８mの調査区を設定し（図２）、重機によって上部約0.7mの近・現代の土を除去したのち、地山上面まで人力により掘削した。その後、遺構検出作業を行い、図面・写真による記録を作成した。実働４日目に埋戻しを行い、調査を完了した。




| | | | |
|---|---|---|---|
| 1：OS91－3 | 2：NW82－33·45 | 3：OS87－135 | 4：OS88－97 |
| 5：OS92－7 | 6：OS93－3 | 7：OS96－22 | 8：NS90－14 |
| 9：NS95－11 | 10：OS95－12 | 11：OS00－25 | 12：OS97－12 |
| 13：OS95－1 | 14：OS99－30 | 15：OS98－3 | 16：OS88－29 |
| 17：OS96－28 | 18：OS99－82 | 19：OS87－124 | 20：OS95－56 |
| 21：OS99－16 | 22：NW87－18 | 23：OS98－19 | 24：NS00－19 |

図１　調査地周辺図
（［大阪市文化財協会2002、図203］を加筆修正）

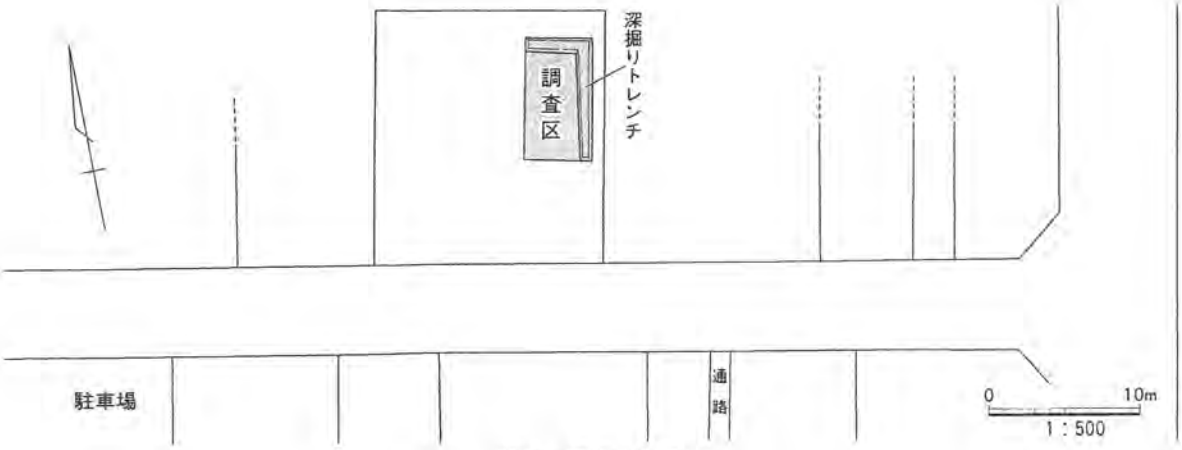



図２　調査の位置

なお、本調査で使用した方位は磁北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+○mと記した。

〈調査の結果〉

ｉ)層序

図３・４に示したように、本調査地の層序は以下のとおりである。

第１層：近代以降の地層である。10YR3／3暗褐色砂・礫・漆喰混りシルトを主体とした盛土で、層厚は20cmである(第1−1層)。本層上面は厚さ５cmの漆喰を貼った床が覆っており、生活面であったことが窺えた。また、本層下部には厚さ最大12cmの黄褐色粘土層(第1−2層)が拡がり、その上面には礎石とみられる石が据わっているところがあり、生活面があったことが窺えた。また下面には土管を埋設する溝が見つかった。

第２層：7.5YR5／6明褐色粗粒砂〜中礫で、固く締まっている。後述する第3−2層の再堆積で、人為層である。本層から土師器の細片が一点出土したが、時期は不明である。本層は調査区中央から北半部では最大20cmの厚さで拡がっていたが、南半部はほとんど堆積していなかった。ただ、下位の第3−1層が南西隅で20cm以上低くなっており、本層がその落込み内に堆積していることが確認された。

第３層：本層は水成の自然堆積層で、当地域の地山である。上部は10YR5／5にぶい黄褐色極細粒

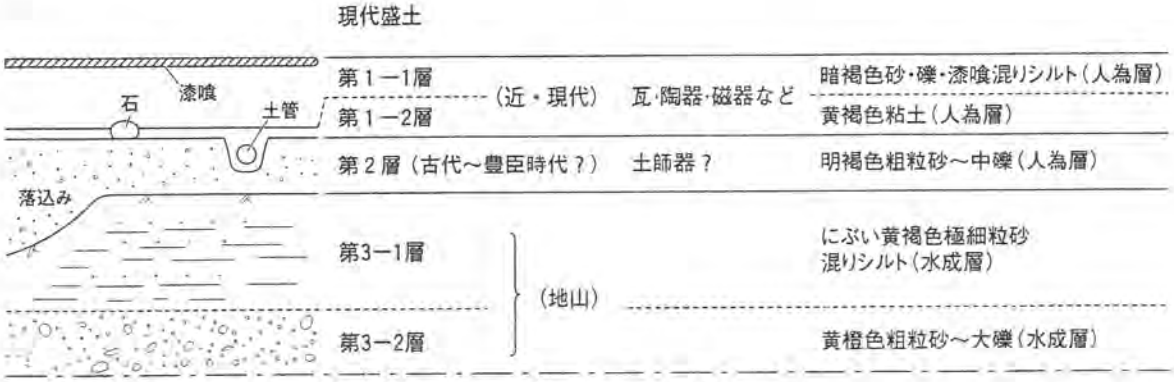
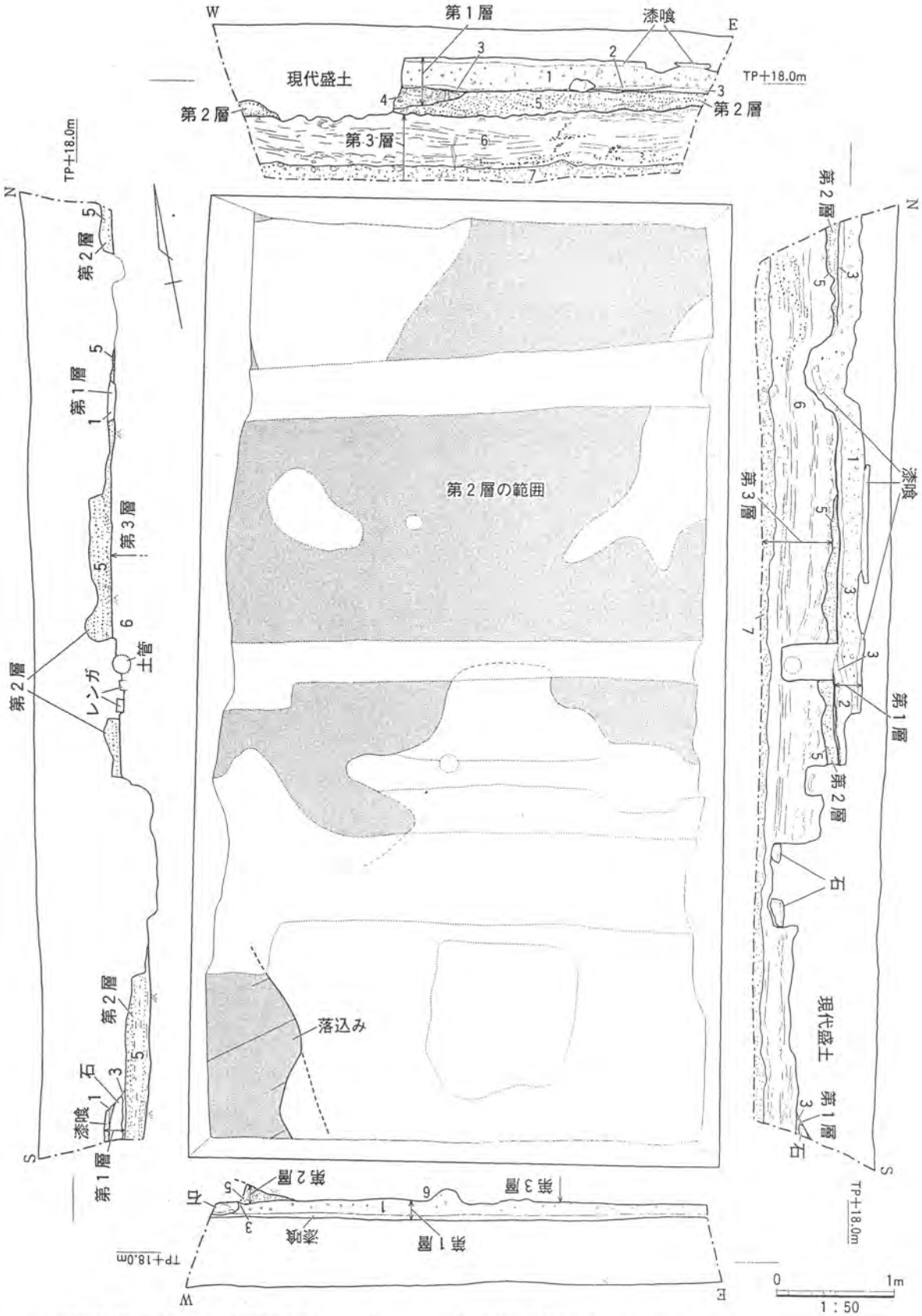



図３　地層と遺構の関係




1：10YR3／3暗褐色砂・礫・漆喰混りシルト
2：10YR6／6明黄褐色シルト質粘土
3：10YR5／6黄褐色シルト混り粘土（炭を含む）
4：10YR4／3にぶい黄褐色砂・礫混りシルト
} 第1層

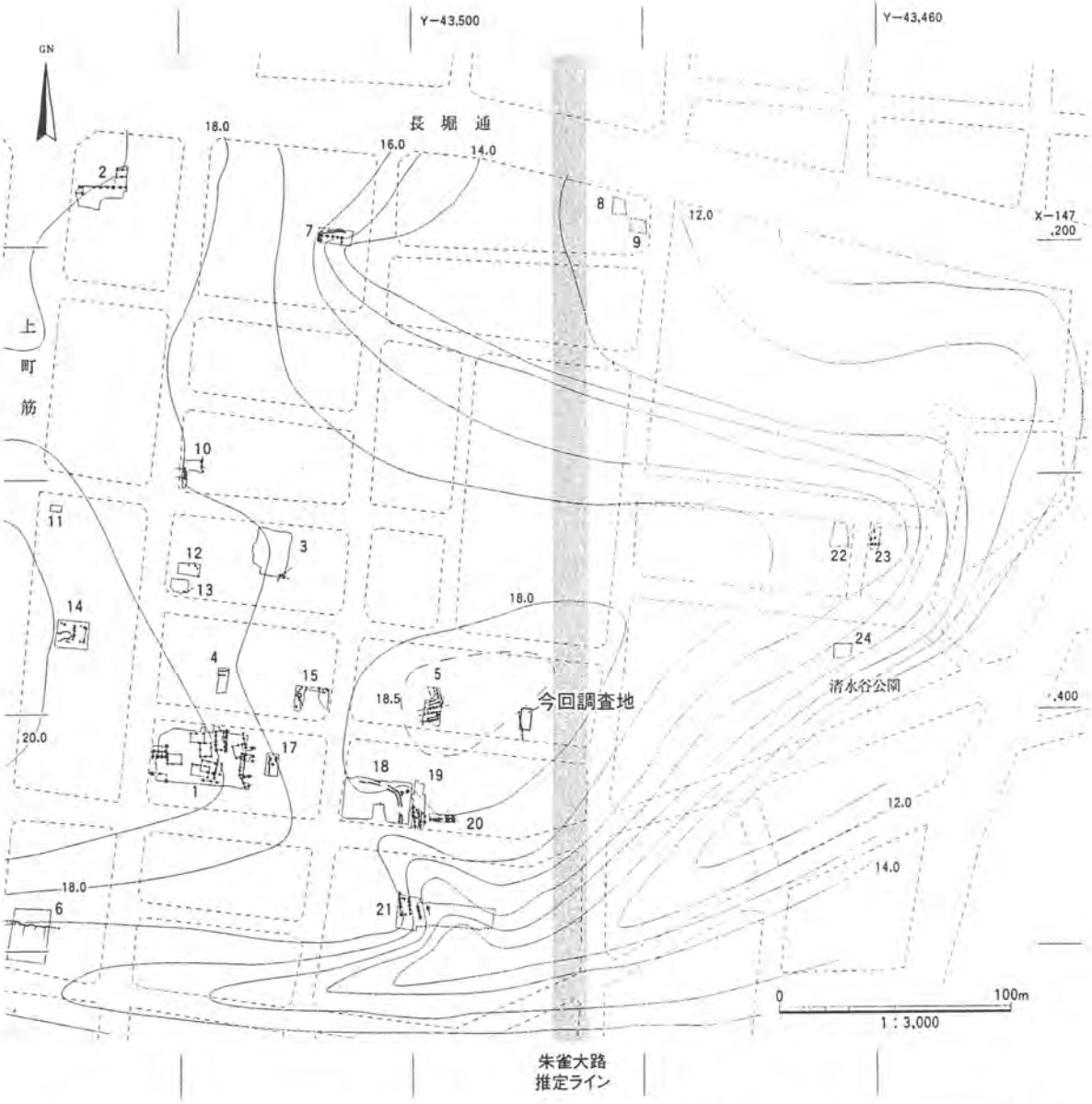
5：7.5YR5／6明褐色粗粒砂～中礫－第2層
6：10YR5／4にぶい黄褐色極細粒砂混りシルト（水成層）
7：10YR8／6黄橙色粗粒砂～大礫（水成層）
} 第3層

図4　検出された遺構平・断面図

砂混りシルト層(第3−1層)で、部分的にマンガンの沈着が見られた。下部は10YR8／6黄褐色粗粒砂〜大礫(第3−2層)で、非常に固く締まっている。第3−2層は東と北に設定した深掘りトレンチで確認した。

ii)遺構と遺物

今回の調査では、第２層堆積時に削平を受けた可能性はあるものの、地山はほぼTP+17.7mで平坦に拡がっていたが、柱や土壙などの遺構は検出されなかった。唯一検出された遺構は、調査区南西




| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1：OS91−3・ | 2：NW82−33・45 | 3：OS87−135 | 4：OS88−97 | 5：OS92−7 | 6：OS93−3 |
| 7：OS96−22 | 8：OS90−14 | 9：NS95−11 | 10：OS95−12 | 11：OS00−25 | 12：OS97−12 |
| 13：OS95−1 | 14：OS99−30 | 15：OS98−3 | 17：OS96−28 | 18：OS99−82 | 19：OS87−124 |
| 20：OS95−56 | 21：OS99−16 | 22：NW87−18 | 23：OS98−19 | 24：NS00−19 | |

図５　古代の遺構と豊臣期大坂城惣構南堀の痕跡および旧地形の復元

([大阪市文化財協会2002、図213]を加筆修正)

隅にある第２層で埋まる落込みである(図４)。この落込みは西側へと低くなっており、南西隅で20cmほど低い。落込みから遺物は出土していないが、落込みを埋める第２層から土師器の細片が見つかった。時期の判別はできないが、この付近の土地の改変状況からみて、古代か近世のものである可能性が高いと考えられる。

第２層の上面・層中とも遺構は検出されなかった。

第１層では漆喰や粘土を貼った生活面が壁面で上・下に認められたが、破壊がひどく、平面的には下部にある第1−2層の粘土を貼った生活面の東西方向の溝２条を検出したにすぎない。調査区中央の溝は土管が埋設されていた。北側の溝も同様のものであったと考えられる。北壁と南東・南西の壁の隅に残る石から、この面には礎石建物があったことが窺える。北壁と南壁の礎石の据えられた高さが異なるので、これらは別々の建物であろう。近代以降の生活面である。

〈まとめ〉

本調査地付近は南東側に低くなる傾斜面の肩部に当る。今回検出された落込みの方向は周辺の地形とは異なっており、ここに小さな谷が入っていたのでなければ、人工的に掘られたものである可能性が考えられる。調査地の東約20mには難波宮朱雀大路中心線が通るものと推定され、また、南約100mのところには豊臣期大坂城の惣構南堀の痕跡である谷が存在する。今回見つかった落込みは、少なくとも近代には降らない。大規模な土地改変に伴うものと考えるなら、やはりこれらいずれかの時代に掘削されたものの可能性が高いといえよう。

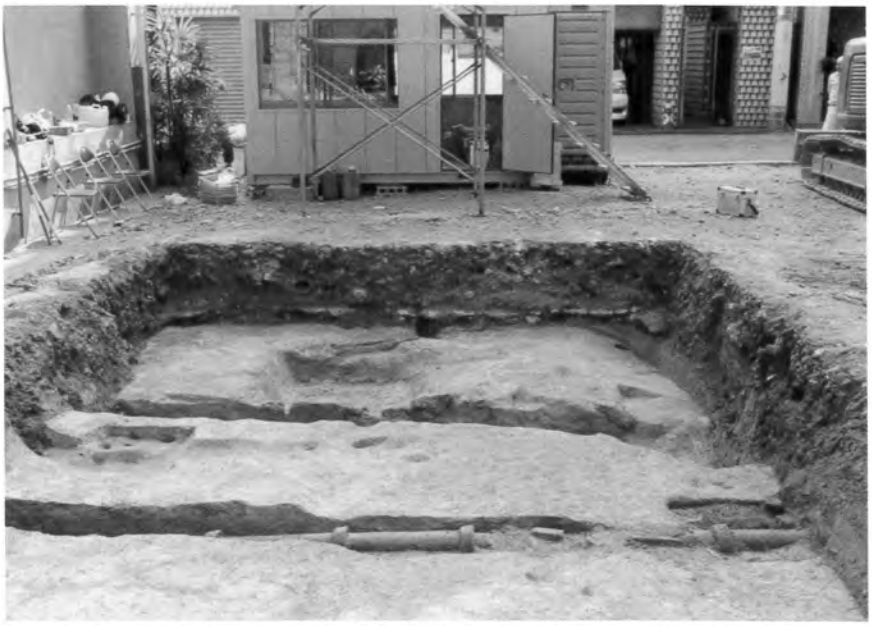
今回の調査では、落込みの時期や性格を確定するには至らなかったが、今後、丹念に周辺を調査することでこの答えに迫ることができるものと思われる。今後の調査成果に期待したい。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2002、「第３節　清水谷地区の調査」:『大坂城跡』Ⅵ、pp.219−233

調査地全景
（南から）

調査区南部
地山上面検出状況
（北から）



南西部の落込み
（東から）

# 上本町南遺跡発掘調査（ＵＳ06－２）報告書

・調査個所　大阪市天王寺区六万体町５－13
・調査面積　60㎡
・調査期間　平成18年11月6日～11月10日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、京嶋覚

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は四天王寺の中心伽藍から北西400ｍの位置にある。これまで四天王寺境内の周辺では、寺域の西側や東側、勝山通までの北側で調査が行われているが、勝山通北側に当る当該地周辺は2001年まで埋蔵文化財包蔵地に含まれなかったこともあり、ほとんど調査が行われていなかった(図１)。

本調査に先立って行われた２個所の試掘調査によれば、地表面下1.1ｍの地山層まで現代の攪乱であり、包含層や遺構は確認されなかった。しかし、四天王寺に隣接する地域でもあり、地山層の高さからみて破壊を免れて遺構が存在している可能性があるため、本調査を実施することになった。

調査範囲は、旧建物の基礎が及んでいないと思われる敷地北端部の東西7.0ｍ、南北8.0ｍの範囲とした(図３)。11月６日に、ほぼ地山層上面まで及んでいる攪乱層を重機によって掘削するとともに、より深くまで攪乱されている部分も慎重に重機により掘削した。その後、人力により現代の地層

図１　調査地位置図

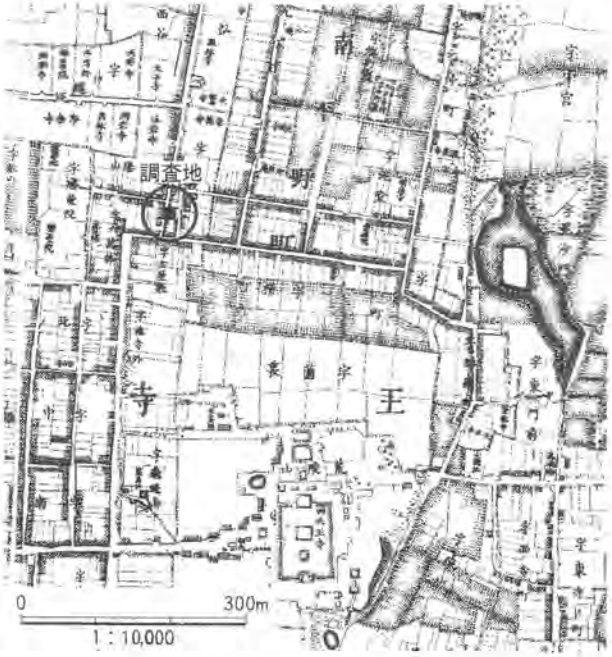



図２　明治19年「大阪実測図」における調査地の位置

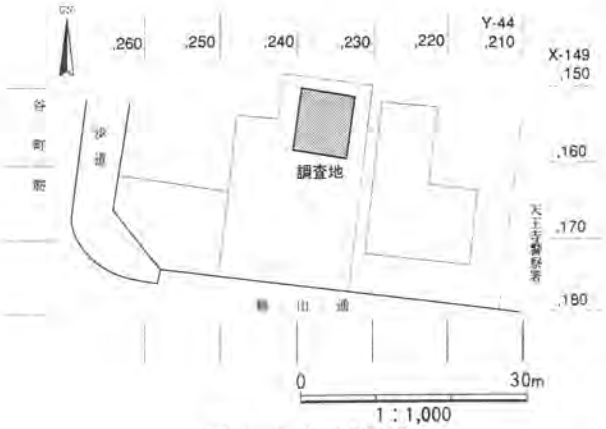


図3　調査区配置図

を除去して第2層の地山層上面を精査して遺構検出を行った。調査地西端には瓦や川原石を多く含む溝が検出され、東半部に複数のピットと溝・土壙が検出された。

これらの遺構の掘削と記録作業を行い、11月10日にすべての作業と撤収を完了した。

この調査の水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP＋○mとしている。また、挿図中の座標値は500分の1大阪市道路現況平面図の旧公共座標値を使用した。

〈調査の結果〉

i)層序(図4・5)

第0層：現代に攪乱された層である。

第1層：にぶい黄褐(10YR4／3)～明黄褐色(10YR6／6)細粒砂層である。東北部および西北部の壁面で部分的に確認された整地層である。西北部の溝SD01埋土上では本層上位に炭・焼土が多く含まれる。また、下位には瓦片が多い。SD01上面の瓦からみて16世紀後半以降の地層と思われる。

第2層：明黄褐色(2.5Y7／6)細粒砂～シルトの地山層である。

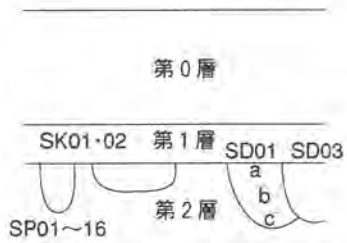


図4　地層と遺構の関係模式図

ii)遺構(図6)

溝

調査地西端で南北方向の溝SD01を検出した。幅1.5m以上、深さ0.6mで、長さ8m分を調査した。底面は幅0.75mの平坦面をなし、断面は逆台形を呈する。埋土は大きく3層に分かれる。上層(a)は褐色(10YR4／4)細粒砂～細礫混りシルト、中層(b)はにぶい黄褐色(10YR4／3)中粒砂混りシルト、最下層(c)は灰黄褐色(10YR4／2)粘土からなる。埋土a・b層は人為的に埋められた整地土で、北半部の埋土c層には機能時に投棄されたとみられる土器・瓦と直径5～10cmの川原石が多量に含まれていた。

遺物には土師器、須恵器、瓦質土器、青磁碗・皿、白磁碗、備前焼擂鉢、常滑焼甕、巴文軒丸瓦、唐草文・波形文・連珠文軒平瓦、塼、丸・平瓦などが出土した。

SD03は当初、調査地西南隅で検出され、SD01を切って掘られていることが確認できた。壁際であったこともあり、SD01の掘削作業時には平面形が確認できず、南壁・西壁とSD01セクションの地層の観察からSD01とほぼ同じ方向で1mほど西寄りに掘り直された溝であると判断した。明黄褐色細粒砂～砂礫を主体とする埋土で、最下部は層厚10cmほどの灰黄褐色粘土層で、西壁際の最下部で出土した鳥衾瓦41はこの溝の遺物と考えられる。

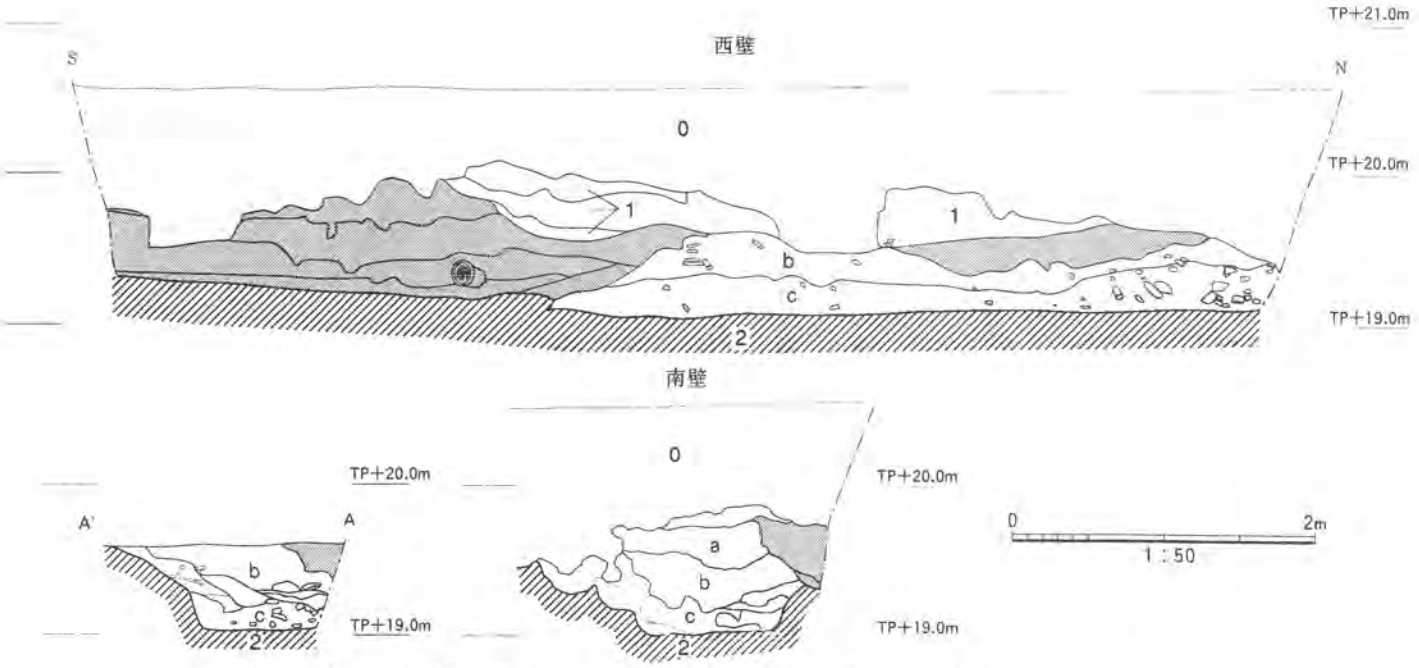



図5　西壁・南壁(部分)断面およびSD01・03セクション断面実測図(アミ目はSD03埋土)

調査地南東部で検出された南西から北東方向に延びる浅い溝SD02は、幅0.4 m、深さ0.1 mで、褐色砂礫混り粘土質シルトが堆積していた。土師器・瓦器の細片が出土した。

**土壙**

土壙SK04は調査地東北部で検出された長方形を呈すると思われる浅い土壙である。南北2.7 m以上、東西1.6 m以上で、深さ0.1 mである。埋土は黄褐色シルト質粘土で、土師器・瓦の細片のほか、須恵器小壺が出土した。ほぼ正方位を示し、出土した須恵器から、平安時代にさかのぼる可能性がある。

SK05は南北1.0 m、東西0.4 m、深さ0.15 mで、埋土は暗褐色砂礫混り粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

SK06はSD01東肩部で検

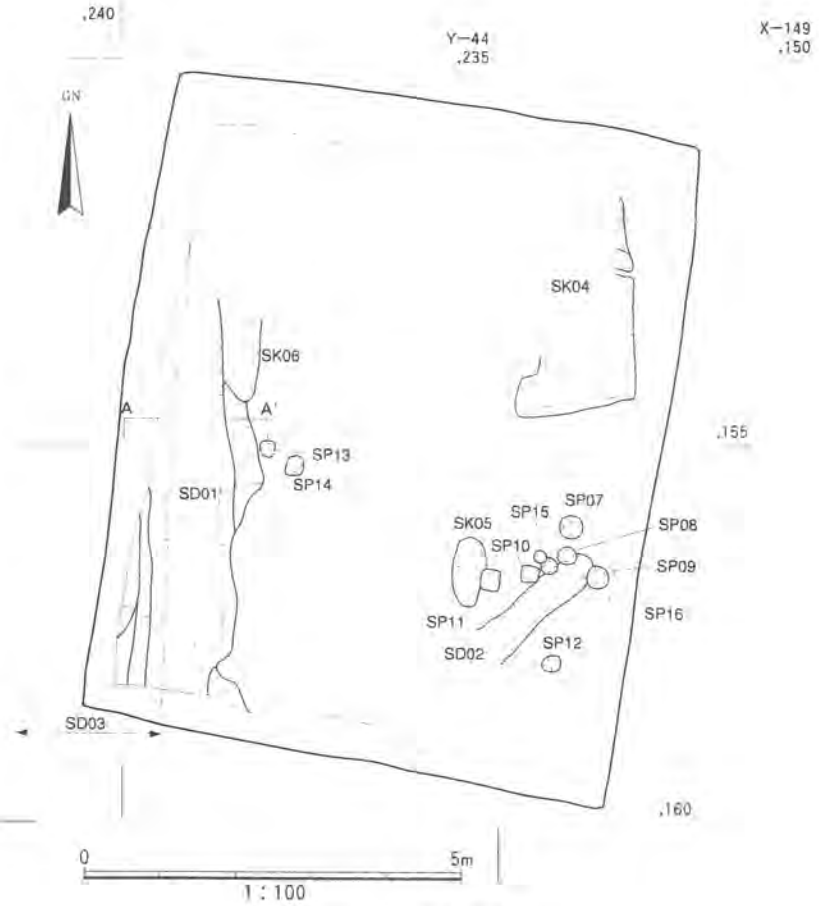



図6　平面実測図

出された南北1.6 m以上、東西0.6 m以上、深さ0.2 mの土壙で、SD01を切って掘られている。土師器・瓦器の細片が少量出土した。

SP07～16は調査地東南部と中央西寄りで検出された。平面形が直径0.15 ～ 0.3 mの円形のものと、一辺0.2 m前後の方形のものがある。これらは建物として復元することはできなかった。方形のSP10・11は深さ0.3 mと深いが、他は0.1～ 0.15 m程度であった。埋土は黄褐色ないし暗褐色の粘土質シルトを基調とし、SP07・10・11には直径0.1～ 0.15 mの柱痕跡が確認できた。また、SP08・09・16はSD02を切っている。これらのピットからは14世紀代の瓦器椀の細片や土師器・瓦質土器の細片が出土している。

iii）SD01 ・ 03 ・ SK04 出土遺物（図7 ・ 8）

本調査の出土遺物は、SD01から出土した遺物がほとんどである。以下の記述は、SK04から出土した4とSD03から出土した41を除いて、すべてSD01の出土遺物に関するものである。

土師器には小皿・小壺・高杯脚部・甕・羽釜などがある。土師器小皿1・2は、内面と口縁端部をヨコナデ、外面はユビオサエで仕上げている。3は土師器の短頸壺である。外面はユビオサエで仕上げ、やや硬質に焼きあがる。その他、図示していないが、高杯脚部は面取した柱状部であり、平安時代にさかのぼるものである。また、「く」字形に屈曲する甕口縁部や羽釜の細片がある。

須恵器には鉢・甕・壺がある。17は東播系の須恵器鉢である。その他、甕体部片が少量ある。4はSK04から出土した須恵器小壺である。底部には高台があり、球形に近い体部から直行する口縁部がつくものと思われる。

5～8は青磁皿である。5の高台内は無釉、7の内面には櫛状工具による施文があり、同安窯系の青磁皿である。9～12は青磁碗の底部である。9は外面無釉、10・12は高台内無釉である。13・14は白磁皿、15・16は白磁碗である。13の高台は遺存する範囲では3個所に、全体では4個所にえぐりが復元できる。15は丸碗、16は口縁が玉縁になる碗の底部であろう。

19は備前焼擂鉢である。垂直に立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。この他、常滑焼の甕片がある。

瓦質土器には擂鉢・羽釜・甕・鉢・火入がある。18は擂鉢で口縁端部外面に面をつくる。20・21は羽釜、22・23は甕である。20は口縁部は内傾し、外面はヨコナデにより段をつくる。体部外面は横方向にヘラケズリを施す。21は上方に真っ直ぐ立ち上がる口縁部で、内面は横方向のハケメ調整である。22は口縁部が短くわずかに外反させる。体部外面は粗い横方向の平行タタキで、内面は不定方向のハケメ調整である。23は外反させた口縁部の端部を下方に拡張する。体部外面は横方向の粗い平行タタキである。24は平底から斜め上方に直線的に伸びる体部で、口縁端部に面をつくる鉢である。内外面とも器面が荒れており調整は不明であるが、形状から火鉢に使われた可能性がある。

25～30は瓦片を二次的に加工した土製円板である。直径4.0 ～ 8.4 cmで5 cm前後と8 cm前後の大小2種に分類できる。厚さは2 cm前後である。

瓦には巴文軒丸瓦、唐草文・波形文・連珠文軒平瓦、塼、丸・平瓦、鳥衾瓦がある。

31～34はいずれも左巻三巴文軒丸瓦である。31は珠文帯の内側に1本の界線を挟んで巴文を配す

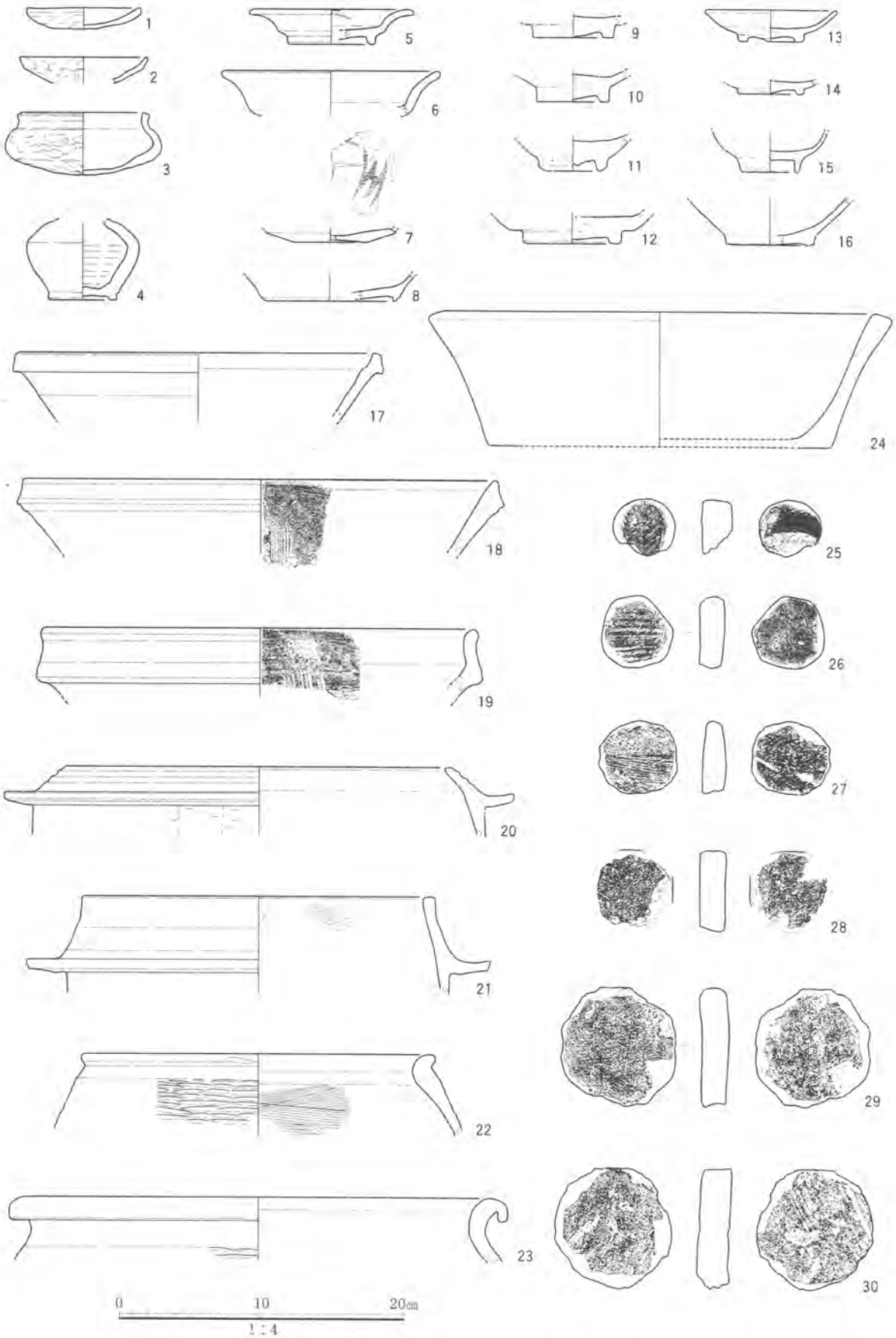



図7　出土遺物実測図(1)
SD01(1~3·5~30)、SK04(4)

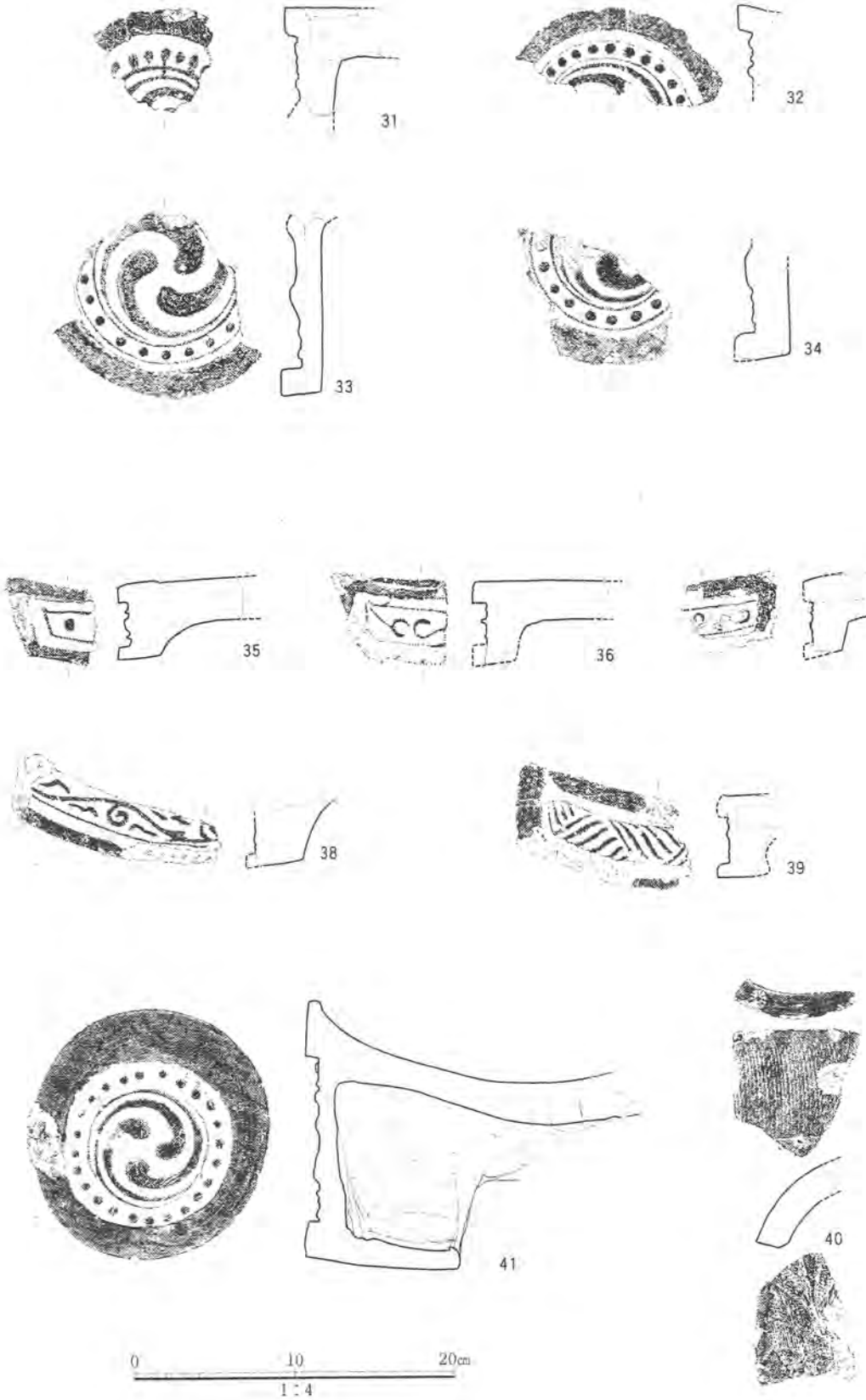



図8　出土遺物実測図(2)
SD01(31~40)、SD03(41)

るものと思われる。32～34はいずれも珠文帯の両側に界線を配している。35は連珠文軒平瓦、36～38は唐草文軒平瓦、39は波形文軒平瓦で、いずれも段顎で文様外周に界線が巡る。40は丸瓦であるが、前端面に車輪文のスタンプが押されている。凸面に縄タタキメ、凹面に布目が残る。41はSD03から出土したほぼ完形の左巻三巴文鳥衾瓦である。

これらSD01から出土した遺物は青花などの染付磁器はまったく出土しておらず、青・白磁や瓦質土器からみて15世紀から16世紀前半に属するものと思われる。

〈まとめ〉

本遺跡と隣接する四天王寺旧境内遺跡では、現寺域の東側の何個所かの調査地で東西方向の溝が確認されており、いずれも時期は15・16世紀である。今回の調査地は四天王寺北側の寺域外に当り、南北方向の溝SD01を確認することができた。この溝は、近世以降の北で東に振る地割方向と異なり、正方位を示すとともに、四天王寺の現寺域西限の北延長部に位置していることから、中世における四天王寺を含めたこの地域の基本的な地割に沿ったものと考えられる。

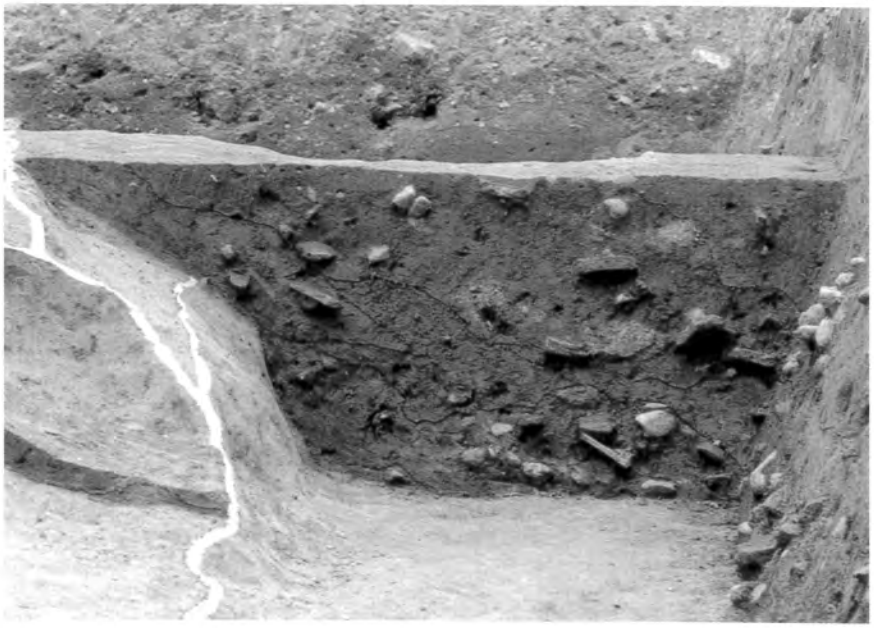
この溝からは瓦塼や玉石と考えられる川原石が多く出土したことから、付近に寺院・仏堂等が存在していた可能性がある。また、建物として復元できなかったが、14世紀にさかのぼるピットや平安時代までさかのぼる可能性のあるSK04なども確認された。

以上のような調査成果は、四天王寺北側における古代から中世にかけての開発の歴史を考察する上で重要な手掛かりとなるものであり、今後、周辺地域での徹底した調査が必要であろう。

検出遺構全景
（南から）

SD01
（北から）

SD01断面
（北から）



# V 淀　川　区

# 宮原遺跡発掘調査（ＭＨ06－１）報告書

・調査個所　大阪市淀川区宮原１丁目５-７
・調査面積　34㎡
・調査期間　平成19年１月15日～１月18日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、岡村勝行

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は新大阪駅の北約200ｍにあり（図１）、周辺道路の標高はTP+1.2ｍ前後である。宮原遺跡は天満砂堆に立地する古代～室町時代の遺跡であり、南西180ｍで行われたＭＨ94－2次調査では、鎌倉・室町時代の建物群・井戸など、北東200ｍで行われたＭＨ99－3次調査では室町時代の溝のほか、古代の遺物が確認されている。

調査に先立ち2006年12月19日に行われた試掘調査で、現地表下1ｍに中世遺物を多く含む地層とその下面で落込みが確認された。このため、大阪市教育委員会と事業者との協議の結果、本調査を行うことになった。調査区は東西4.5ｍ、南北7.5ｍに設定し（図２）、地表下約1ｍまでの現代～近世の地層を重機掘削し、それ以下を人力で掘り進め、随時、図面・写真による記録に努めた。なお、本報告で示す水準値はＴ.Ｐ.値（東京湾平均海面値）で、本文・挿図中では「TP±○ｍ」と記した。方位は座標北である。

図１　調査地位置図

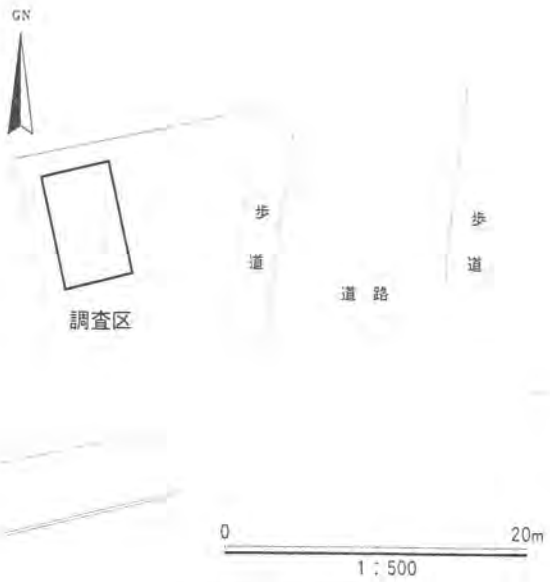



図２　調査区位置図

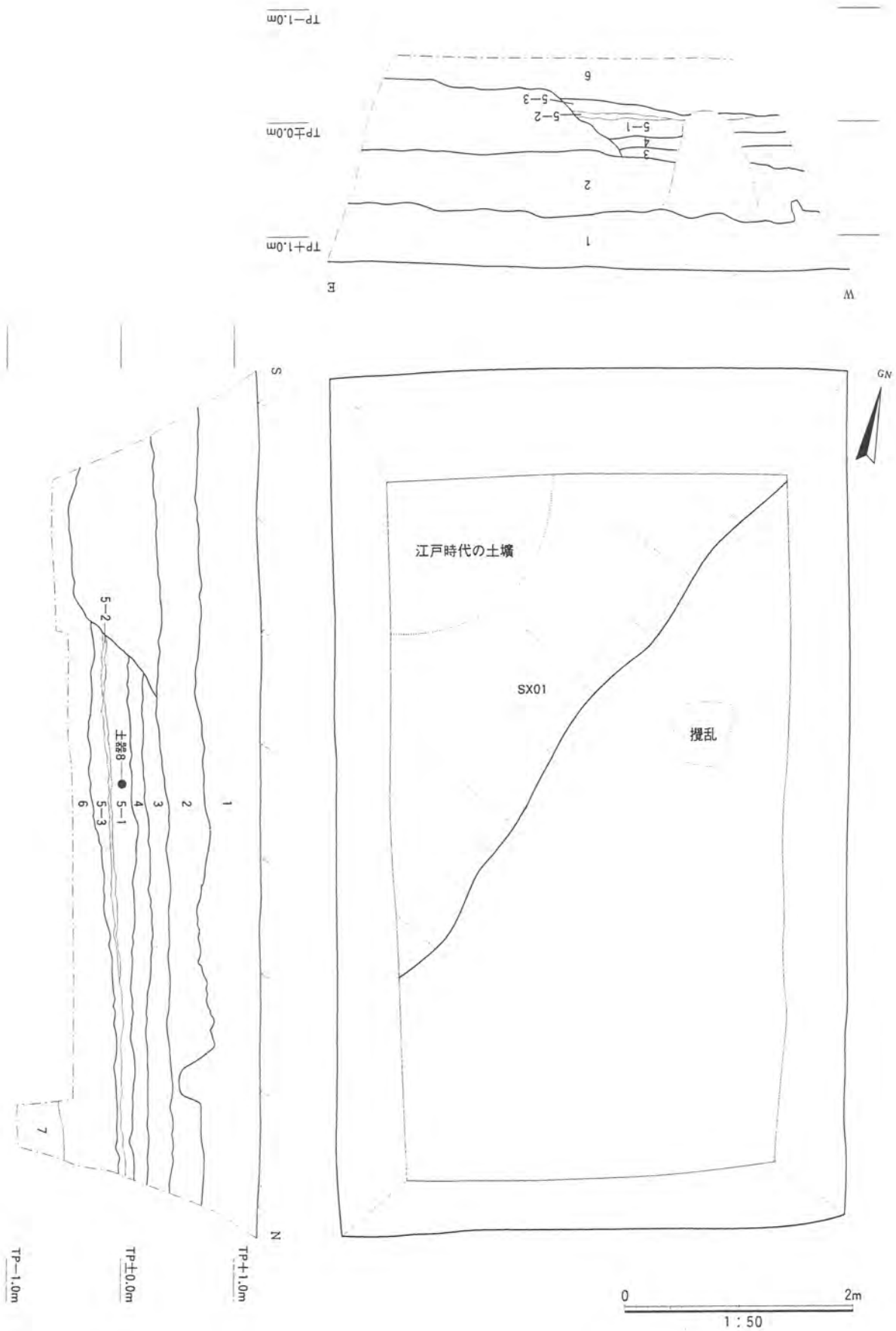



図3　調査区平面図（第6層上面）と断面図

〈調査の結果〉

1．層序

層厚0.6mの現代盛土層以下、地表下2.1mまでの地層を第1～7層に区分した(図3)。

第1層：現代盛土層である。

第2層：にぶい黄褐色(10YR5／3)砂質シルト層で、旧作土層である。層厚は約20cmである。

第3層：灰黄褐色(10YR5／2)砂質シルト層で、旧作土層である。層厚は約20cmであり、下部に粗粒砂を比較的多く含む。上面で18世紀代の土壙が検出された。

第4層：褐灰色(10YR5／1)砂質シルト層で、旧作土層である。層厚は約15cmであり、土師器、瓦器、白磁碗の小片を含む。

第5層は水成堆積層であり、第5−1～3層に区分した。

第5−1層：灰黄褐色(10YR4／2)シルト質粘土層である。層厚は約10～20cmであり、調査区北西に向けて肥厚する。土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、白磁碗、青磁碗などの破片を含む。

第5−2層：暗灰黄色(2.5Y5／2)シルト質粘土層で、層厚は約5cmである。

第5−3層：黒褐色(10YR3／1)シルト質粘土層で、層厚は約5～20cmであり、調査区北西に向けて肥厚する。瓦器の破片をごく少量含む。

第6層：灰黄褐色(10YR6／2)を基本の色調とする粗粒砂の水成堆積層で、層厚は50cm以上である。

第7層：オリーブ黒色(7.5Y3／1)を基本の色調とする粗粒砂の水成堆積層で、層厚は40cm以上であり、自然木片や葉など有機質遺物を多く含む。

2．遺構と遺物(図3・4)

調査区北西隅の第3層上面で、しまりの悪い灰色粘土質シルトを基本の埋土とする、一辺2.0m以上

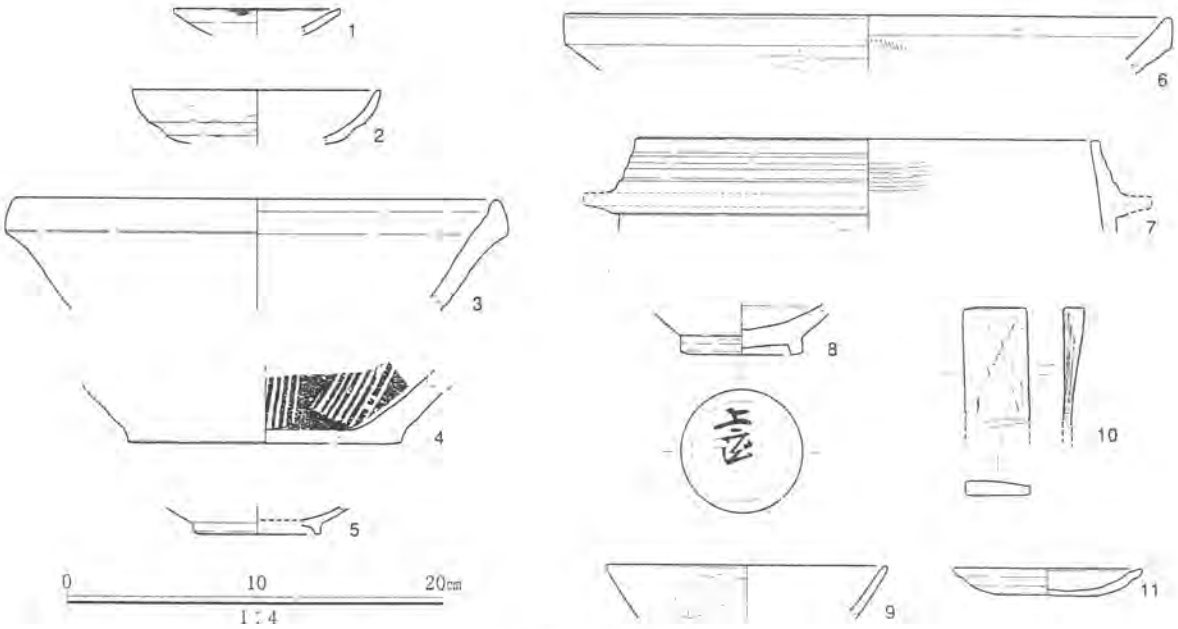



図4　出土遺物

の土壙を確認した。18世紀の陶磁器が多く出土した。

中世にさかのぼる明確な遺構は確認できなかったが、第6層上面で水平1.0mに対し、北西方向に0.1m下がる、幅2.5m以上の自然の落込みSX01を検出し、最上位の堆積層である第5−1層からは多様な中世遺物1〜10が出土した。1は口縁部が斜方向にまっすぐ伸びる小型の土師器灯明皿である。2は口径13.0cmのやや深みのある土師器皿で、外面に指頭圧痕が顕著である。3は東播系摺鉢の口縁部、4は備前焼擂鉢の底部である。5は瓦器の底部で、低い高台がつく。6は瓦質鉢、7は瓦質羽釜である。8は白磁碗で、底部外面に墨書がある。2字ないし、3字からなり、上の文字は「上」と考えられるが、下の字は判読できなかった。9は青磁碗で、外面は縞蓮弁文である。10は小型の砥石で、表裏2面に擦面が確認できる。11は現代攪乱から出土した土師器皿であり、11、12世紀と推定される。

第5−1層から出土した遺物は、8・9のように、12、13世紀にさかのぼるものもあるが、1や、6・7の瓦質土器など、14、15世紀の遺物も含むことから、堆積年代はその時期以降と考えられる。

〈まとめ〉

今回の調査では、中世の明確な遺構が確認できず、作土層の存在から、当該地は生産域として利用されたと考えられる。しかしながら、貴重な墨書土器を含む、中世の幅広い時代の遺物が出土していることから、ごく近隣に居住域が拡がっていることが推測できる。今後さらに調査成果を蓄積することにより、宮原遺跡の実態がより詳細に解明されるであろう。

調査地の状況

第６層上面検出状況
（南から）

西壁断面
（南東から）

# VI 旭　　区

# 森小路遺跡発掘調査（ＭＳ06－１）報告書

・調 査 個 所　大阪市旭区新森５丁目34－４
・調 査 面 積　40㎡
・調 査 期 間　平成18年８月28日～９月１日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、田中清美

〈調査に至る経緯と経過〉

調査個所は弥生時代中期の集落遺跡として知られる森小路遺跡の中央部に位置しており、周辺には弥生時代中期の竪穴建物・柱穴群・井戸・土壙などをはじめ、多量の弥生土器や石器遺物が検出された調査地が点在している[大阪市文化財協会2001]。特に調査個所の西に隣接する南北道路で行ったMS87−6次調査では弥生時代中期前葉から中葉のゴミ穴状の土壙が検出されており、ここでも同様の遺構や遺物が存在するものと思われた。大阪市教育委員が実施した試掘調査でも現地表下60cm前後から古墳時代の土器を含む地層が確認されたため、今回の調査となった。

調査は弥生時代中期の遺構面が地表面下１ｍ前後に存在することが予想されたので、まず、江戸時代以降の蓮田の作土である第５層までの地層を重機で掘削した後、東西および南北方向のトレンチを２個所設定し、第８層の上面まで人力で掘下げて、遺構・遺物の検出を行った(図２)。

図１　調査地位置図

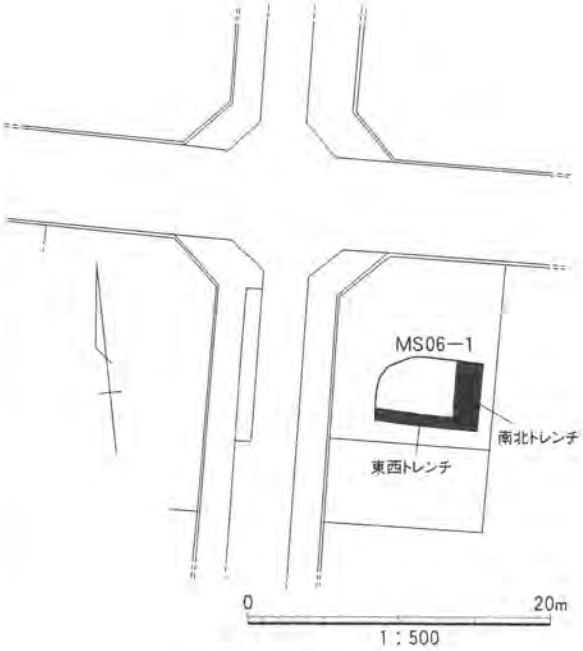



図２　調査区位置図

8月30日から第6～8層の上面で遺構の調査を行い、9月1日には地層断面・遺構の実測、写真撮影などの記録および機材の撤収作業を含めてすべての調査を終えた。

調査で用いた水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文の挿図中ではTP±○mと記した。図中の方位は図1が座標北、図2・5・6は磁北である。

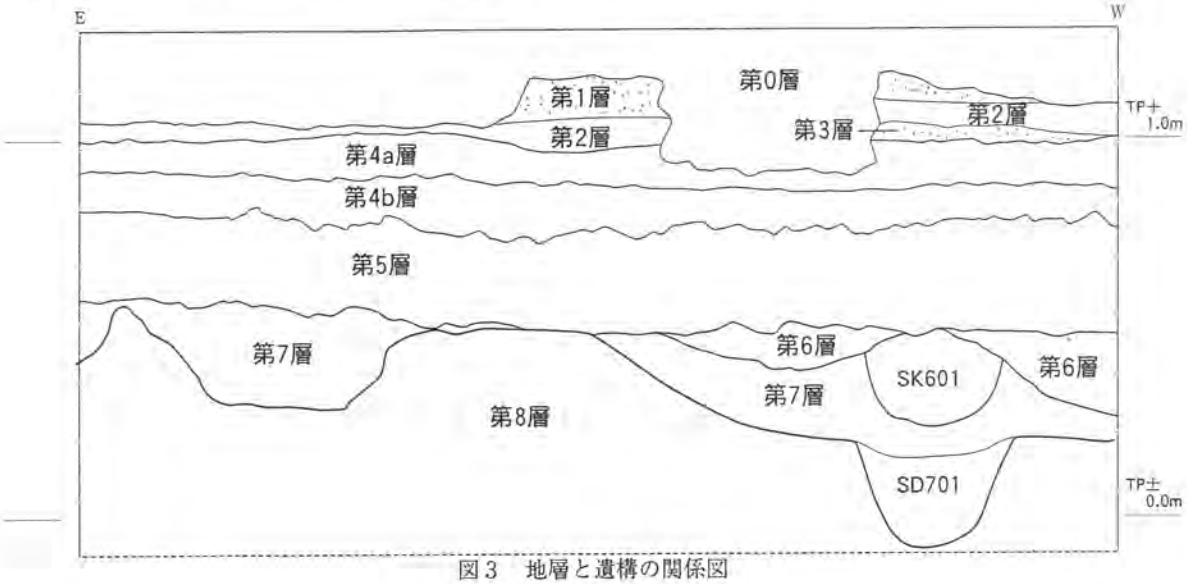
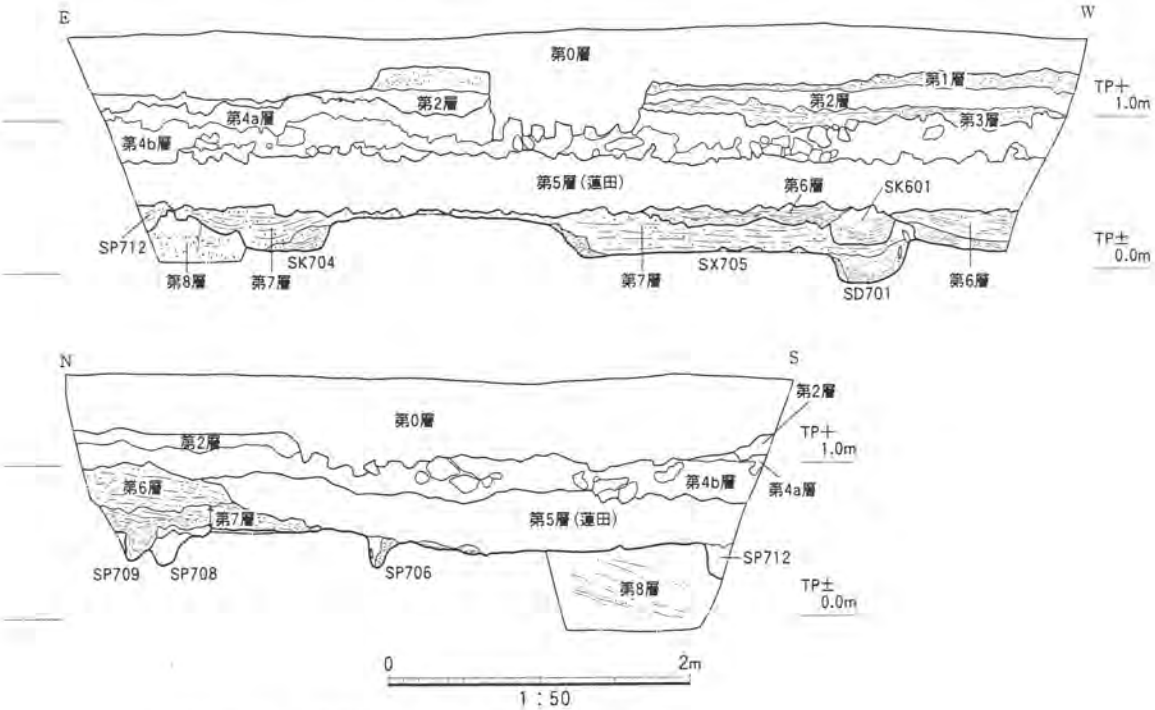



図3　地層と遺構の関係図




第1層：にぶい黄橙色(10YR6/3)礫混り細粒砂(水成層)
第2層：暗赤色(2.5YR3/1)シルト混り細粒砂(作土)
第3層：灰黄褐色(10YR4/2)シルト混り粗粒砂(作土)
第4a層：暗褐色(10YR3/3)極細粒砂混り粘土質シルト(作土)
第4b層：灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混りシルト(作土)
第5層：灰黄褐色(10YR4/2)砂・礫混り粘土質シルト(作土・蓮田層)
第6層：黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト～黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルト
第7層：黒色(5Y2/1)細粒砂質シルト～オリーブ黒色(5Y2/2)極細粒砂質シルト
第8層：褐色(10YR4/4)シルト混り細粒砂～細粒砂

図4　東西トレンチ南壁断面(上図)・南北トレンチ東壁断面(下図)実測図

〈調査の結果〉

1．層序(図3・4、写真図版1)

調査個所の東・南壁で層序の観察を行って、現代の整地層である第0層下で第1層から第8層の各層を確認した。

第1層：にぶい黄橙色(10YR6／3)礫混り細粒砂層で、層厚は5～25cmある。本層は現代の陶磁器を含んでおり、戦前に淀川が氾濫した際に堆積した水成層である。

第2層：暗赤色(2.5YR3／1)シルト混り細粒砂層で、層厚は10cm前後ある。現代の作土層である。

第3層：灰黄褐色(10YR4／2)シルト混り粗粒砂層で、層厚は10～20cmある。調査個所の南西部に分布している作土層で、基底面には多数の踏込みが確認された。

第4層：本層の層厚は30cm前後あり、第4a層と第4b層に二分される。前者は暗褐色(10YR3／3)極細粒砂混り粘土質シルト層で、後者は灰黄褐色(10YR4／2)細粒砂混りシルト層である。ともに下層の偽礫を多量に含んでおり、淘汰の悪い作土層である。弥生時代中期後葉の土器21、および江戸時代の陶磁器の細片が出土した。

第5層：灰黄褐色(10YR4／2)砂・礫混り粘土質シルト層で、層厚は30～40cmある。下層の偽礫を含むほか、18世紀後半以降の肥前磁器20・25、古墳時代中期の須恵器杯身24・有蓋高坏31、弥生時代中期中葉から後葉の土器片26～30が出土した(図7)。本層は調査地域に広く分布している江戸時代以降の蓮田の作土層である。

第6層：黒色(2.5Y2／1)粘土質シルト～黒褐色(2.5Y3／1)極細粒砂質シルト層で、層厚は30cm前

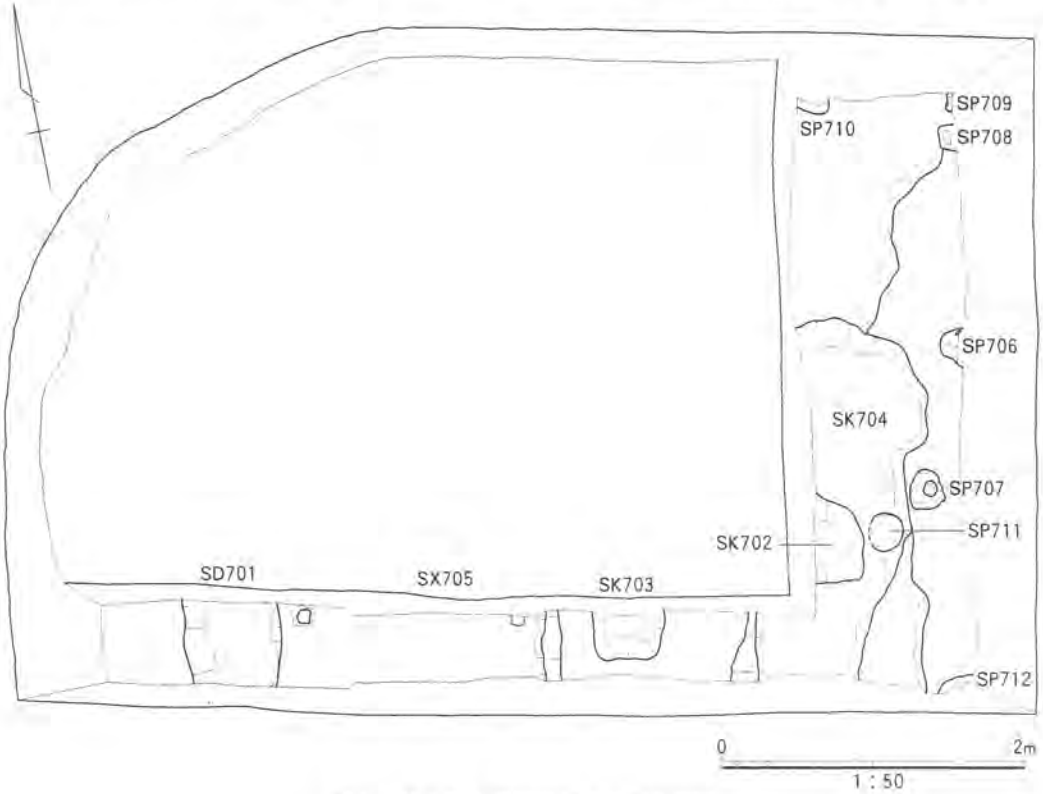



図5　第8層上面検出遺構平面実測図

後ある。本層は調査個所の東北部および西南部に分布する水成層で、森小路遺跡では弥生時代中期後葉の生活面を形成する地層の一つである。弥生時代中期前葉の土器22が出土した。

第７層：黒色(5Y2／1)細粒砂質シルト～オリーブ黒色(5Y2／2)極細粒砂質シルト層で、層厚は15cm前後あり、弥生時代中期前葉の甕23・33・同中葉の甕32が出土した(図７)。本層は極細粒砂のラミナが観察された水成層で、下層の第８層の上面で検出した遺構内に堆積していた。東西トレンチの西部では本層の上面で土壙SK601が検出された。

第８層：褐色(10YR4／4)シルト混り細粒砂～細粒砂層で、層厚は60cm以上ある。本層は北東から南西方向に傾斜した細粒砂のラミナが観察される水成層であり、当地域の地山層である。上面の標高はTP＋0.4～0.6m前後ある。

２．遺構と遺物

ａ．第８層上面の遺構と遺物(図５・７)

本層の上面では溝・土壙・落込み・柱穴を検出したが、それらの多くは調査範囲外に拡がっていることから、ここでは主な遺構についてのみ報告する。

SD701　東西トレンチ西部に位置する幅0.7m前後、深さ約0.3mの南北方向の溝である(図４・５)。本溝は東側にある落込みSX705の底から掘込まれたような状況で確認された。溝内には水成層のオリーブ黒色(5Y2／2)極細粒砂が堆積しており、弥生時代中期前葉の土器片が少量出土した。

SX705　SD701の東側に位置する幅1.8m、深さ0.2m前後の落込みで、埋土は水成層のオリーブ黒色(5Y2／2)極細粒砂～細粒砂である。体部の内面に粗いハケを施した弥生時代中期前葉の甕14が出土した。

SK702　南北トレンチの南部に位置する土壙SK704の底で検出された南北約0.6m、深さ0.2m前後の浅い土壙である。埋土は水成層の黒色(5Y2／1)細粒砂質シルトで、弥生時代中期前葉の広口壺9・壺12、甕10・11、底部中央に焼成後の穿孔がある甕底部6などが出土した(図７)。

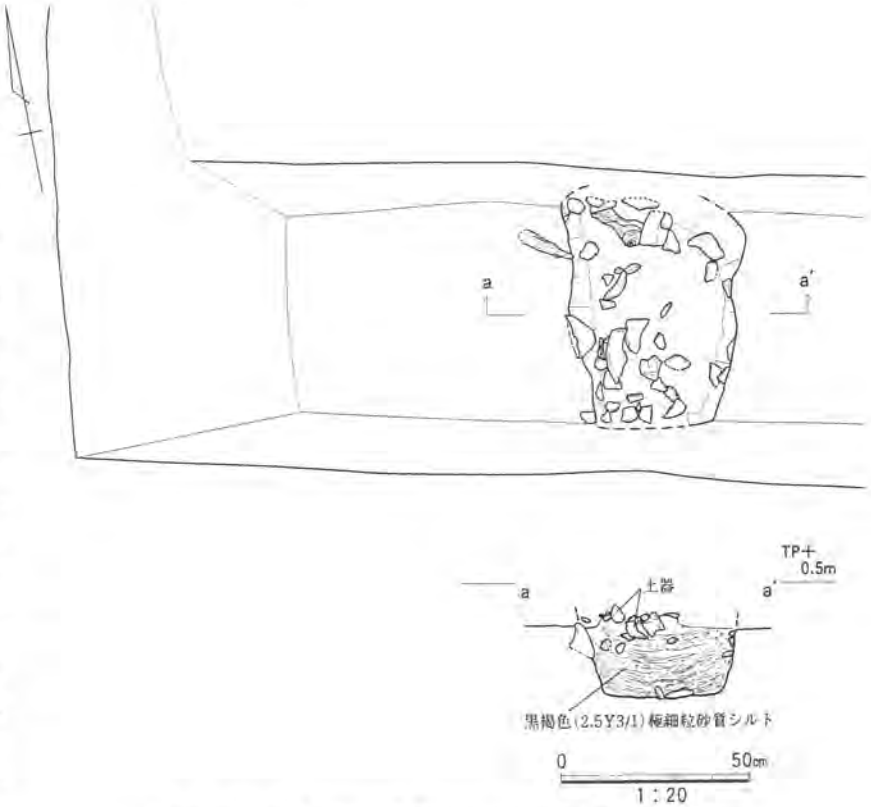



図６　第６層基底面の遺構(SK601)平面・断面実測図

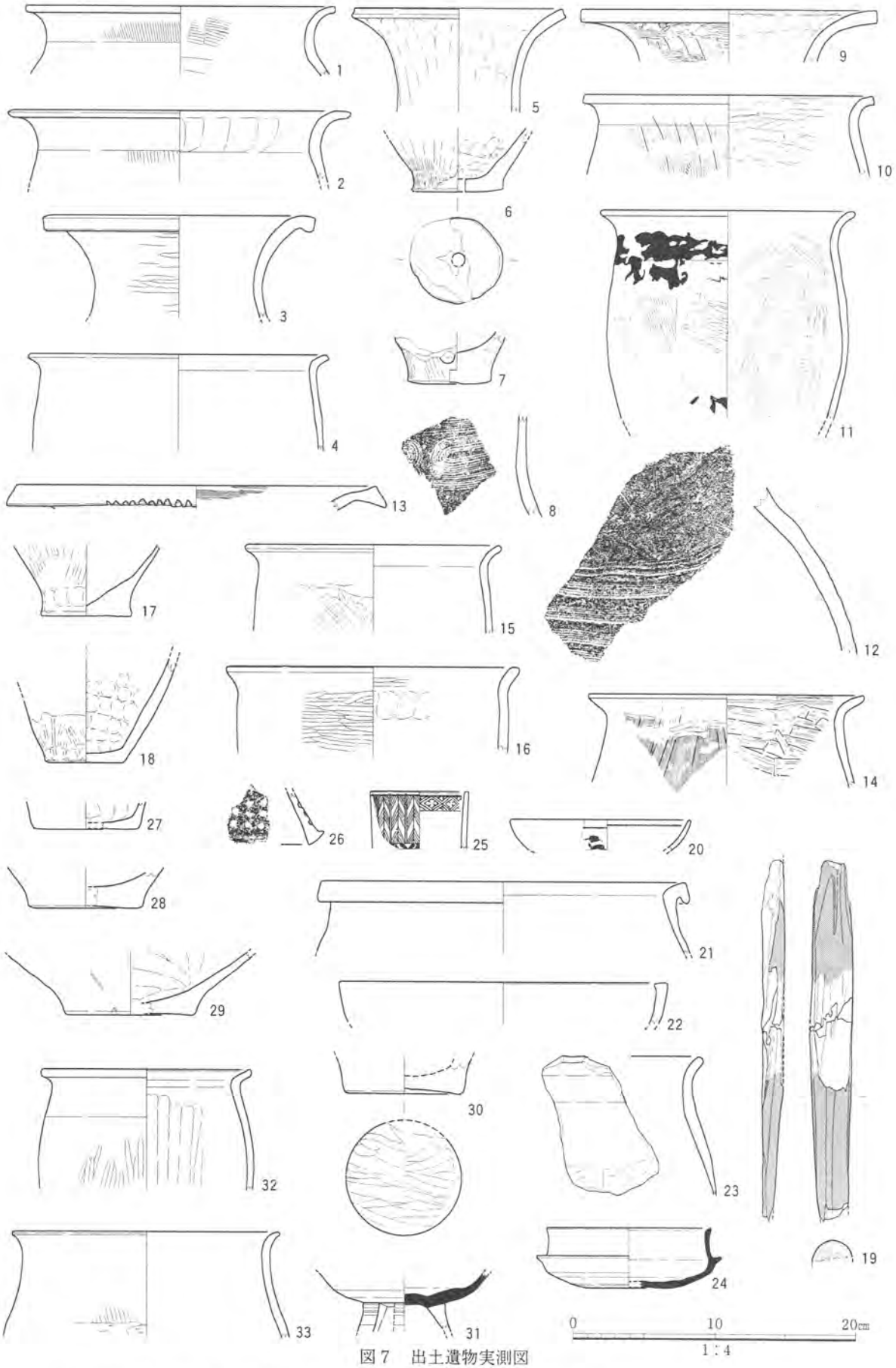



図７　出土遺物実測図

SK702(６・９～12)、SK704(１・２・５・７・８)、SX705(14)、SK601(３・４・13・15～19)、
第４層(21)、第５層(20・24～31)、第６層(22)、第７層(23・32・33)

SK704　SK702およびSP711と切合い関係にある東西1.3m、南北2.3m以上、深さ0.2～0.3mの細長い土壙である。埋土はSK702と同じ水成の黒色(5Y2／1)細粒砂質シルトで、植物遺体を多く含む。弥生時代中期前葉の頸部が細長い広口壺5・横方向の櫛描流水文が施された壺の頸部片8、焼成後の未貫通の穿孔がある甕底部7、口縁部が緩やかに開く甕1・2などが出土した(図７)。

SP706～712　平面形が不整形なものもあるが、柱穴と思われる。SP707の掘形は直径0.25m、深さ0.2m前後あり、中央に直径0.1mの柱痕跡が見られた。

ｂ．第６層基底面の遺構と遺物(図６・７)

SK601　東西トレンチ西部の第７層の上面で検出した東西約0.4m、南北約0.65m、深さ0.17mの土壙で、上部を第６層が覆っていた。遺構内には水漬きの黒褐色(2.5Y3／1)極細粒砂質シルトが堆積しており、上部から弥生時代中期前葉から中葉に属する土器片3・4・13・15～18、および両端が焼けた棒状の木製品19が出土した(図７)。

〈まとめ〉

今回の調査は狭小なトレンチ調査ではあったが、弥生時代中期前葉の土壙や落込みをはじめ、複数の柱穴を検出することができた。特に有機物を多く含む水成の細粒砂質シルトが堆積した不整形な土壙や落込みは、周辺の調査地でも数多く検出されており、土器片・木片・食物残滓などを含むことからゴミ穴ではないかと考えられる。

一方、破片ではあるが、体部の上半をヘラケズリした弥生時代中期前葉の甕23・33は、色調や胎土からみて、和泉あるいは紀伊地域から搬入されたものであろう。これは森小路遺跡に居住した集団が遠方の集団とも交流していたことを示す資料といえる。また、第７層の上面で検出された土壙によって、当地にも周辺で確認されているような弥生時代中期中葉以降の生活面が存在することも明らかになった。以上の遺構や遺物は、調査地が弥生時代中期の生活の場であったことを裏付けるとともに、当地域には良好な状態で遺跡が残っていることを示唆している。

〈参考文献〉

大阪市文化財協会2001、『森小路遺跡発掘調査報告』Ⅰ

東西トレンチ
南壁東部断面全景
（北から）

南北トレンチ
東壁および
東西トレンチ
南壁東部全景
（北から）

SK601遺物出土状況
（北から）

# VII 阿 倍 野 区

# 阿倍野筋南遺跡発掘調査（ＡＳ06－２）報告書

・調査個所　　大阪市阿倍野区阿倍野筋４丁目13－２・15
・調査面積　　80㎡
・調査期間　　平成18年８月７日～８月16日
・調査主体　　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　　文化財研究部次長　南秀雄、絹川一徳

〈調査に至る経緯と経過〉

大阪市阿倍野区に所在する阿倍野筋南遺跡は、南北に延びる上町台地の尾根筋に立地する。現地表の標高は約17mで、ちょうど台地の頂上部に当る。調査地の東側は河内平野に向って緩やかに下降する斜面地であるのに対し、西側は縄文海進の侵食により南北方向に急な波食崖が形成され、縄文時代には台地縁辺の崖裾部まで海が拡がっていた。海沿いで移動が容易な上町台地の平坦な尾根筋は、古

図１　調査位置図

くから人々の行き交う場所となり、周辺の平坦地は居住地として利用されてきた。阿倍野筋南遺跡はこうした環境のもとで形成されてきた遺跡の１つである。

既往の発掘調査は主に阿倍野筋の西側で行われており、古墳時代前期の竪穴住居(AS89－１、97－８、98－２次調査)や大型総柱建物(AS98－７次調査)等が見つかっている[大阪市文化財協会1999]。試掘・立会調査等の結果から、阿倍野筋の東側でも同時期の包含層や遺構が拡がっていることが確認されており、一帯には古墳時代前期を中心とした集落が存在していたとみられている。

調査地は遺跡範囲の東域に当り(図１)、阿倍野筋を挟んだ西側一帯が古墳時代前期の遺構が密に見つかった場所である。調査地はこの場所からわずかに高く、平坦面がそのまま続いていることから、調査地まで集落域が拡がることが予測できた。

今回、発掘調査に先立って７月14日に試掘調査が行われ、地山層を掘込んだ暗褐色粘土質シルトを埋土とする古代以前の遺構と遺物包含層が認められた。この結果を受けて、遺構とその時期を正確に把握するため本調査を実施することとなった。

調査対象として、試掘壙を中心に東西16m、南北５m、80m²の調査区を設定し、８月７日から調査に着手した。遺物包含層とみられる第３層の直上まで重機により掘削し、それ以下は人力により掘下げおよび精査を行うとともに遺構を図面・写真等により記録した。

調査期間は当初６日間であったが、調査の過程で竪穴住居２棟をはじめ予想以上に遺構の残りがよいことが認められたため、協議の結果、調査を２日間延長することとなった。現地での調査は８月16日に終了し、同日すべての機材類を撤収して完了した。

調査で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP＋○mとしている。また、図に用いた座標値は大阪市道路現況図(１：500)を基に導いた世界測地系によるものである。

〈調査の結果〉

１．層序(図２)

調査地の現地表面は東端がTP＋17.1m、西端がTP＋17.3mであり、西側がわずかに高いものの、周辺一帯は平坦な地形が拡がっている。盛土で覆われているものの、以下の地層も同様にほぼ水平に堆積しており、長期間にわたり大きな地形の変化はなかったものとみられる。

現代盛土以下、次のような地層を観察できた。

第０層：にぶい黄橙色(10YR7／2)礫混りシルト質中粒砂層で、現代の盛土である。層厚は20～40cmあり、調査区全体を覆っている。

第１層：にぶい黄褐色(10YR5／4)細～中粒砂質シルト層で、層厚は20～30cmあり、調査区全体に堆積していた。上層・下層との層界は明瞭である。今回の調査では本層は重機で掘削したため、出土遺物を確認することができなかったが、近隣調査地の調査結果から、近世以降の作土層とみられる。

第２層：黒褐色(10YR3／2)細粒砂混り粘土質シルト層で、層厚は平均15cmある。調査区全体に堆積していた。弥生土器・土師器・須恵器およびサヌカイト製石器遺物等が出土したが、既往の調査では瓦器や瓦質土器等も確認されており、中世以降の地層とみられる。下層との層界は明瞭である。

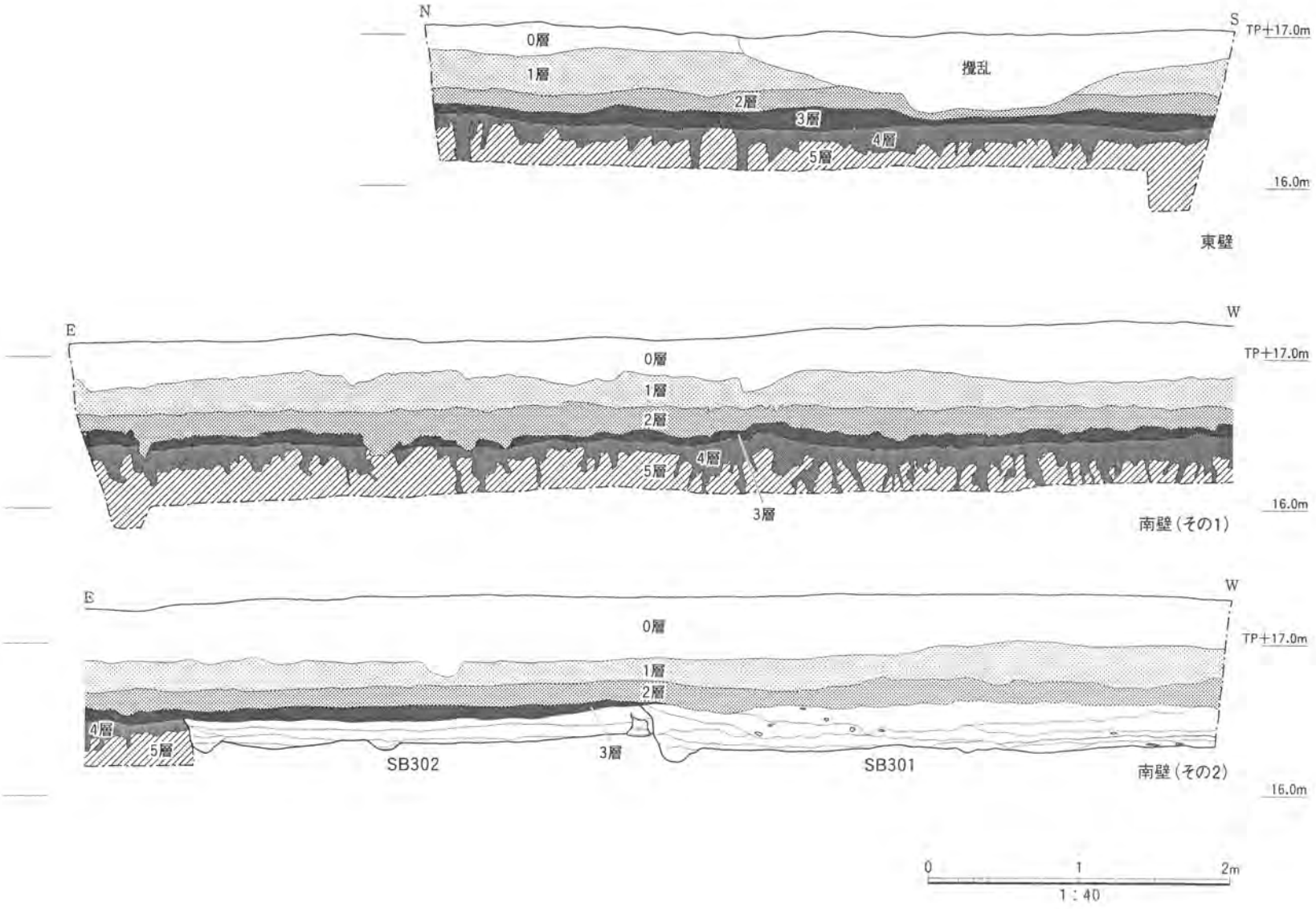

N
S
TP+17.0m
0層
1層
2層
3層
4層
5層
撹乱
16.0m
東壁
E
W
TP+17.0m
0層
1層
2層
5層
4層
3層
16.0m
南壁（その1）
E
W
TP+17.0m
0層
1層
2層
4層
5層
SB302
3層
SB301
南壁（その2）
16.0m
0
1
2m
1：40

図2　南壁・東壁断面図

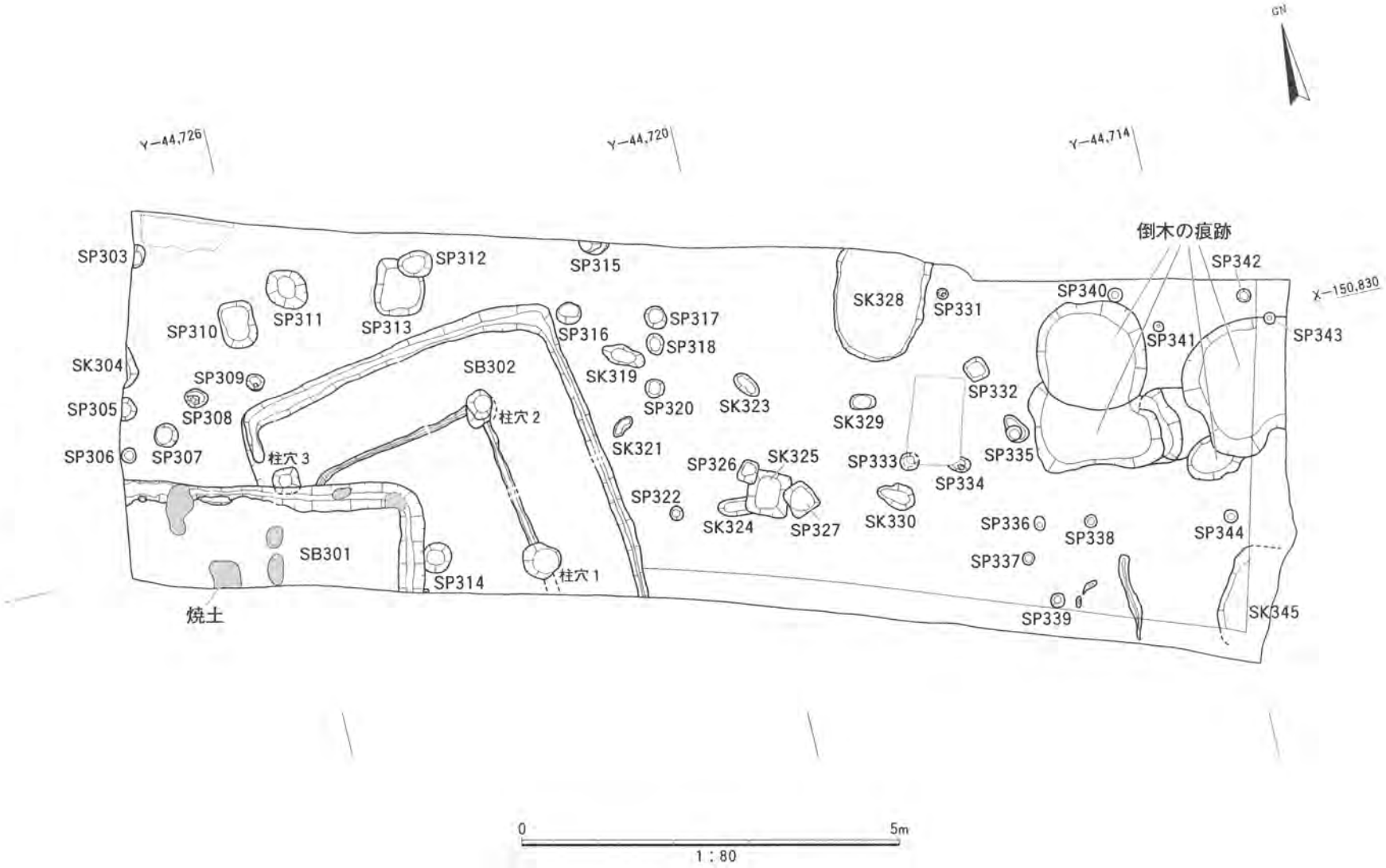

GN
Y−44,726
Y−44,720
Y−44,714
X−150,830
倒木の痕跡
SP303
SP312
SP315
SP342
SP340
SP331
SK328
SP311
SP310
SP313
SP316
SP317
SP318
SP341
SP343
SK304
SP309
SB302
SK319
SP320
SK323
SP332
SP305
SP308
柱穴 2
SK329
SP306
SP307
柱穴 3
SK321
SP326
SK325
SP333
SP334
SP335
SP322
SK324
SP327
SK330
SP336
SP338
SP344
SB301
SP314
柱穴 1
SP337
SP339
SK345
焼土
0
5m
1 : 80

図 3　遺構配置図

第３層：黒褐色(7.5Y3／2)粘土質シルト～シルト質粘土層で、層厚は10cm程度あり、下層との層界はやや不明瞭である。弥生土器や石庖丁・サヌカイト製石器遺物をはじめ、土師器・須恵器等が出土した。遺物の大半は古墳時代前期に属するもので、特に古式土師器が多い。本層の下面で竪穴住居や土壙・柱穴等の古墳時代前・中期を中心とする時期の遺構を検出した。

第４層：褐色(7.5Y4／4)細粒砂混りシルト質粘土層で、上層との層界が漸移的であり、色調は淡くなっている。下部は植物擾乱により大きく乱されていた。層厚は平均で10cmほどであった。遺物は認められなかった。

第５層：明褐色(7.5Y5／6)砂礫混りシルト質粘土層で、地山層である。

２．遺構と遺物(図３～５)

第３層下面において古墳時代の遺構を検出した。遺構の埋土はほとんどが黒褐～暗褐色の粘土質シルト～シルト質粘土であり、遺構は古墳時代の遺物包含層である第３層堆積時に掘込まれたものと思われる。検出された遺構は、伴出遺物から古墳時代前～後期の３時期が認められた。

１)古墳時代前期の遺構と遺物

竪穴住居(図４)

調査区の南西側でSB301・302の２棟の竪穴住居を検出した。いずれも調査区外の南側へと続く。

SB301は一辺４ｍ以上で平面形は方形とみられる。北東部分１／４弱を検出したのみである。床面までの深さは検出面から約0.1ｍである。柱穴は確認できなかった。床面は地山を削り出しており、四周には幅0.2ｍ、深さ0.1ｍの周壁溝が巡っていた。住居埋土は大部分が黒褐色粘土質シルトであるが、床面直上に地山の小ブロックを含む厚さ３～５cmの暗褐色シルト質粘土層の堆積が認められた。おそらく住居が利用されていた際に形成された機能時堆積層とみられる。その他、埋土全体に焼土粒や焼土ブロックが含まれており、焼失した可能性がある。

SB301の床面直上からは布留式古段階に属する土師器1・3・7・8・15が出土した。1は小型丸底壺で、口縁部は外側に屈曲し直線的に拡がる。口径11.2cm、体径8.1cmで、口径が体部径より大きい。体部の内面はナデで、上半部の内外面に細いヘラミガキを施している。甕3は口径12.8cmで口縁部が残存する。口縁端部をわずかにつまみ上げ内傾させている。体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリが施されている。7・8は高杯でいずれも脚部を欠損する。杯部内側の底面は平坦で、どちらも口縁部は杯部下半で屈曲して直線的に開く。7は口径8.6cm、8は口径17.0cmである。15は小型器台で底径9.7cmである。受部は欠損するが脚部が直線的に開いており、受部と脚部がほぼ同じ大きさのタイプとみられる。

SB302はSB301に先行する竪穴住居で西辺側が重複する。平面形は方形である。南北軸は北で西に振る。SB301との重複部分が大きく、住居規模を正確に測定しがたかったが、北辺西端で確認した周壁溝の屈曲部分が隅部に当ると判断した。したがって、正方形ならば竪穴住居の一辺は4.5ｍである。主柱穴は北西・北東・南東の３つが認められた。直径・深さともに0.4～0.5ｍ程度である。本来は４柱穴で、南西の柱穴が調査区外にあるものとみられるが、北西の柱穴は西周壁に偏っていることから、西側２柱穴が周壁際に取付く変則的な柱配置であったとみられる。床面は地山を削り出しており、周

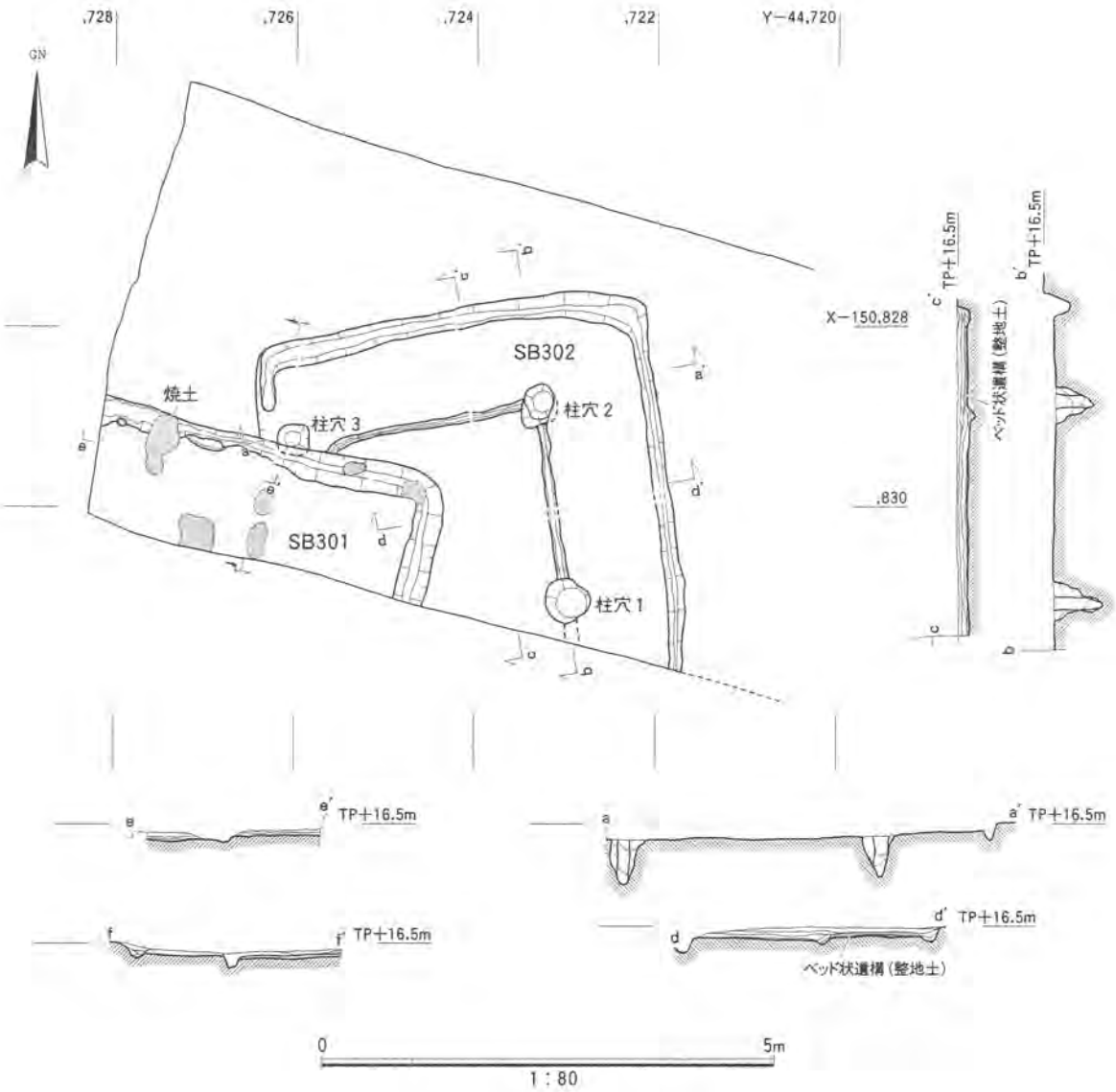



図4　SB301・302平・断面図

壁溝を巡らせている。また、柱穴を繋げるように南側を除いた三辺に溝が掘られている。調査区南壁でこの溝の断面が認められたことから、平面では明確に観察できなかったが、南東辺の溝はそのまま南周壁まで延びていたようである。

竪穴内は内溝により中央と外周に区画されているが、本来、ベッド状遺構が造成される外周側とは段差が作られず、中央床面と同じ高さまで地山が削られていた。ただし、竪穴内埋土の観察から、ベッド状遺構が作られる場所には、地山ブロックを含む厚さ3～5㎝の黒褐色シルト質粘土の堆積が認められた。ほぼ均質な厚みがあることから人為的な整地土とみなしうる。こうしたことから、SB302では一旦床面全体を同じ高さで地山まで削り出したのち、周壁溝と内溝を巡らせ、さらに外周側に区画された部分を盛土により整えてベッド状遺構を造成したものとみられる。

SB302からは北東隅部で埋土中から庄内式期の直口壺2・高杯5が、床直上で広口壺4が出土した。直口壺2は口縁部の内外面に縦方向、体部外面に横方向のヘラミガキを施している。口径8.3㎝である。

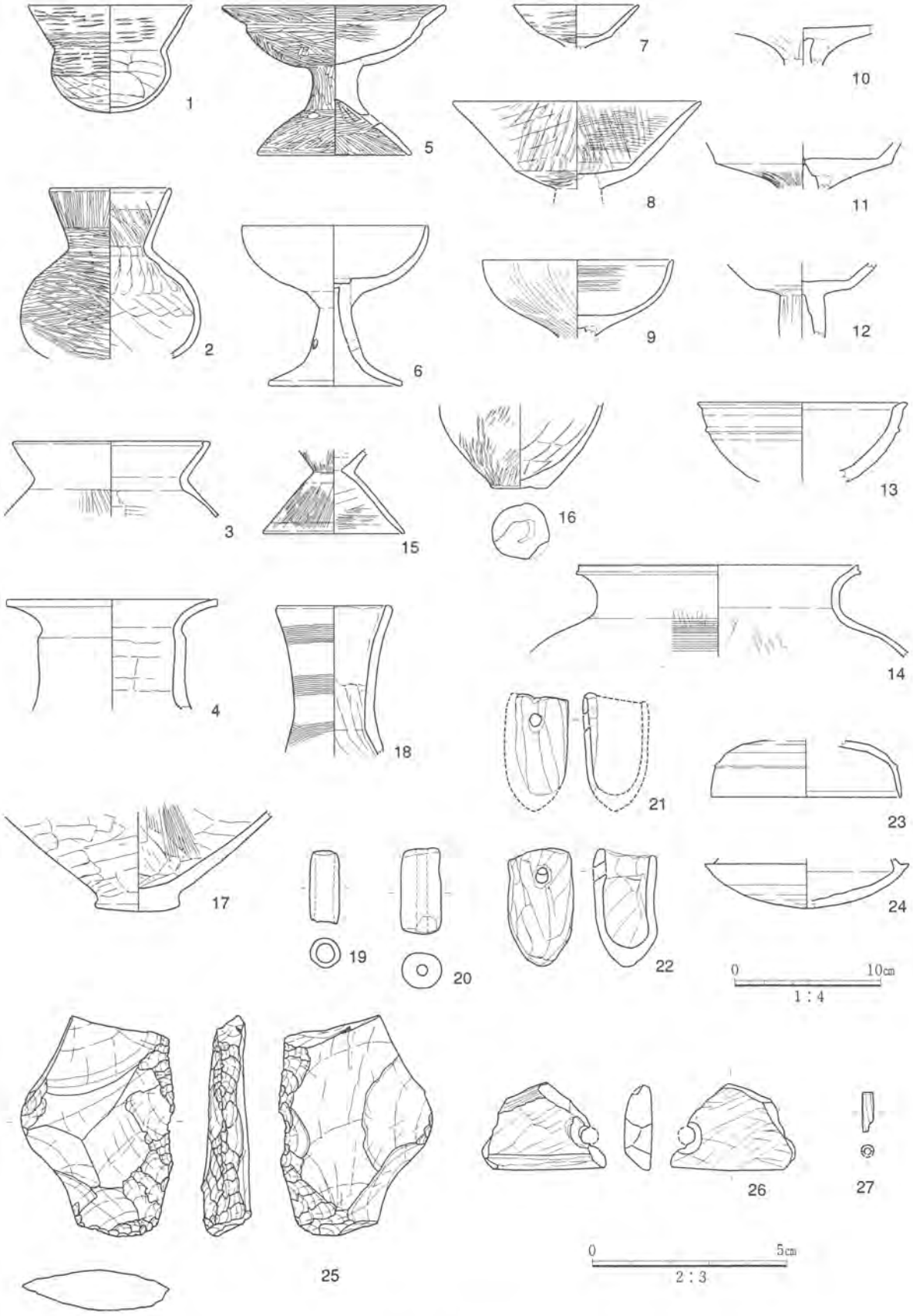



図5　遺物実測図

SB301：1・3・7・8・15、SB302：2・4・5・25、SP311：23
SP339：18、SP328：6・9～11・13・14・20・27、第3層：12・16・17・19・21・22・24・26

高杯5は口縁部が杯部上半で短く屈曲し、杯部下半部が内湾するもので、脚部も円錐状に拡がる。内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。口径15.2cm、器高10.3cmである。広口壺4は頸部が直線状に立上がり口縁部が短く外湾するもので、体部は欠損する。口径14.4cmである。外面はナデ、内面に板ナデが施されている。この他にサヌカイト製の削器25が出土した。

以上のことから、重複する2棟の竪穴住居は、先行するSB302が庄内式期、後続するSB301が布留式古段階の時期と捉えておきたい。

2)古墳時代中～後期の遺構と遺物

土器集積土壙

調査区中央北側で土器集積土壙SK328を検出した。東西1.2m、南北1.5m以上の長円形で、検出面からの深さは0.2mであった。北半部分は調査区外に延びる。土壙からは土師器甕・高杯、須恵器甕・無蓋高杯、管玉、管状土錘等が出土したが、完形のものは少ない。6・9～11は土師器高杯である。6・9は椀形の杯部で、11は杯底部が小さく口縁部が外反するものであろう。13は須恵器無蓋高杯である。口径14.3cmである。14は須恵器甕で外面は平行タタキののち、弱いカキメを施す。内面の当て具痕はナデ消されている。須恵器はいずれもTK208型式とみられる。20は管状土錘、27は碧玉製の管玉である。

SP310～314はいずれも柱穴であるが、これらと組み合うものは調査区では確認できなかった。SP311の埋土からは須恵器杯蓋23が出土した。MT15型式とみられる。

調査区ではその他にも土壙・柱穴等が多数認められたが、共伴遺物が認められず、所属時期を特定することはできないが、埋土が共通することからおおむね古墳時代のものと判断しておきたい。

3)その他の遺物

18はSP339の埋土上部から出土した。弥生土器の細頸壺で、体部は欠損する。頸部から口縁部にかけてやや外反ぎみに直線的に立上がり、櫛描文を3帯巡らせている。口径7.6cmである。畿内第Ⅳ様式に属するものとみられる。

12・16・17・19・21・22・24・26はいずれも第3層から出土した。24は須恵器杯身である。TK209型式とみられる。16は体部に粗いタタキが施された甕で、内面はヘラケズリが加えられている。庄内式期のものとみられる。17は布留式古段階の壺である。上半部を欠損する。12は土師器高杯、21・22は飯蛸壺、19は管状土錘、26は緑色片岩製の石庖丁である。

〈まとめ〉

今回の調査では庄内式期と布留式古段階の時期の切合った竪穴住居各1棟を検出することができた。このことは、阿倍野筋南遺跡が古墳時代前期の集落遺跡であるという既往の調査成果をさらに裏付けることとなった。また、これまで竪穴住居や掘立柱建物が集中して見つかっていた遺跡地の西半のみならず、東半にも集落域が拡がっていたことも明らかとなった。さらに、これまで古墳時代中期の遺構や遺物の存在が希薄であったため、阿倍野筋南遺跡の集落の存続時期は前期に限られると考えられてきたが、今回の調査で土器集積土壙等が検出されたことにより、古墳時代中期以降も継続して近辺

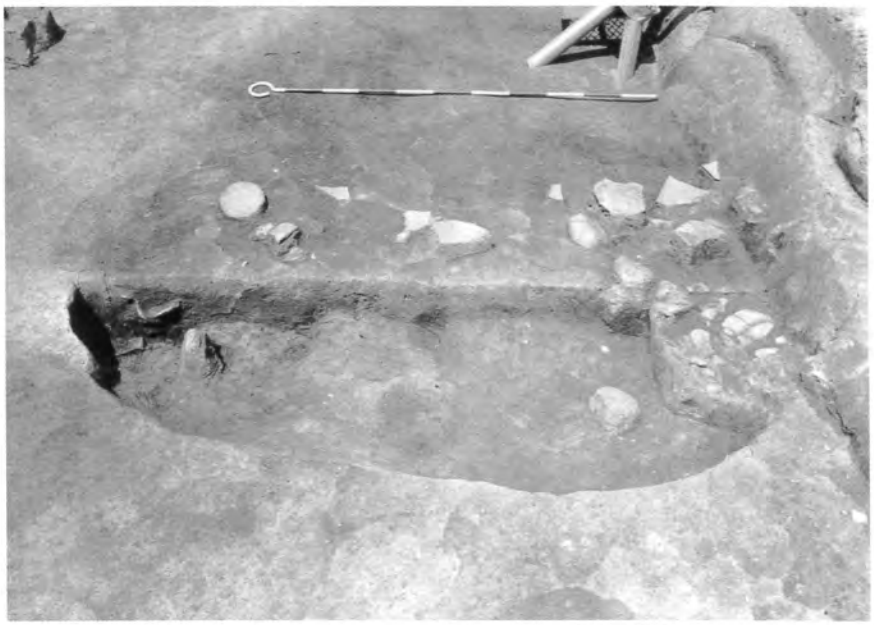
で集落が営まれてきた可能性が大きくなった。今後、さらなる資料の蓄積を待って、阿倍野筋南遺跡における集落の消長や集落構造の変化について考察を加えていく必要がある。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、『阿倍野筋遺跡発掘調査報告書』

調査区南壁地層断面
（北東から）

SK328遺物出土状況
（東から）

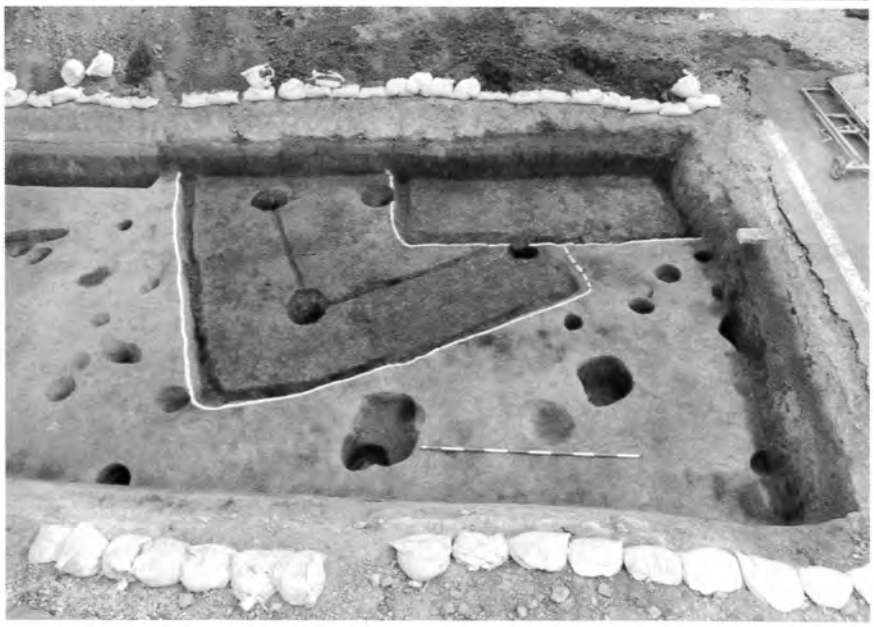


調査区東半
遺構完掘状況
（西から）

SB301・302検出状況
（北から）

SB301・302柱穴等
検出状況
（北から）

SB301・302完掘状況
（北から）



# 丸山古墳発掘調査（ＭＡ06－１）報告書

・調 査 個 所　大阪市阿倍野区松虫通２丁目11－25～30
・調 査 面 積　20㎡
・調 査 期 間　平成18年10月23日～10月26日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄

〈調査に至る経緯と経過〉

丸山古墳とは、1923(大正12)年の粘土採掘によって墳丘が失われた古墳で、その際に石棺などの相当数の遺物が発見された。それらは大阪府庁にあったが、第二次世界大戦による混乱によって散失したという。現在、阿倍野区松虫通１・２丁目にかけて埋蔵文化財包蔵地「丸山古墳」とされているが、墳丘に由来するともいわれる「丸山」の小字名はその西の丸山通２丁目辺りに残り、こちらは丸山通２丁目所在遺跡と呼ばれ、1996年に本調査を行ったことがある(MA96－２)[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998]。周辺で実施した本調査はこの１件のみである。丸山通２丁目所在遺跡の南には、横穴式石室から馬具・直刀などが出土した聖天山古墳がある。古墳の確証があるのは丸山古墳と聖天山古墳の２基だけであるが、周辺には「柘榴塚」・「南天狗塚」・「松虫塚」などの「○○塚」という小字名が残ることから、かつて古墳が点在していたという推測がある[上田宏範1988]。

今回の調査地では、大阪市教育委員会による試掘調査の結果、地表下約50cmで須恵器・土師器を含

図１　調査地位置図

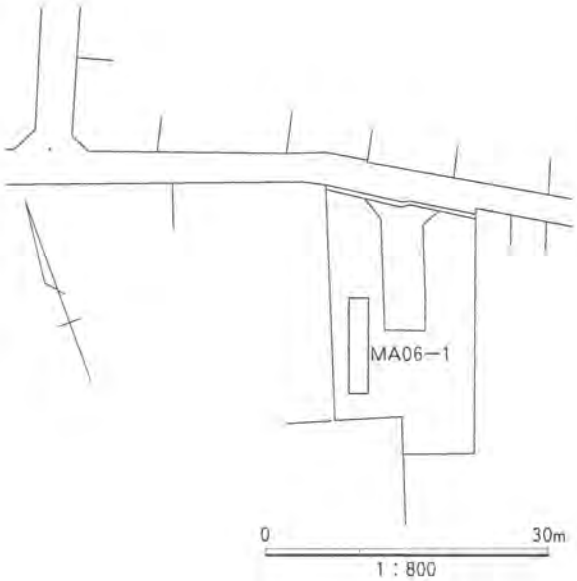



図２　調査区位置図

む地層が見つかったことから本調査を行うこととなった。調査は第２層・３層上面でそれぞれ行い、４日目の10月26日に埋戻しを完了した。

なお、報告で使用した方位は磁北、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP＋○mと記した。

図３　地層と遺構の関係図

〈調査の結果〉

１．層序

現地表の標高はTP＋15.4mで、40cm強の現代の盛土の下に第１層以下がある(図３・４)。

第１層：灰オリーブ色(5Y5／3)シルト質粗粒砂層で、層厚は10～15cmである。近世以降の作土である。

第２層：にぶい黄橙色(10YR6／4)粗粒砂～細礫混りシルト層で、層厚は10～20cmである。中世の作土で東播系須恵器3や瓦5が出土した。

第３層：明黄褐色(10YR6／6)シルト～粘土層で、いわゆる地山の洪積層である。

２．遺構と遺物

第３層上面では西で北に振る東西方向のSD307、それと平行する浅い溝10条、SK201と重なるSK312を検出した。SD307は幅1.3～1.4m、深さ0.25mで、断面形は逆台形である。約２m分を検出したのみだが、形状から溝と推定される。水が流れた痕跡はなく、にぶい黄褐色シルトと第３層を掘り起こした土で一度に埋められている。SD307は土地の区画に関連する溝かもしれない。SD307の南北にあって平行するSD301～306、

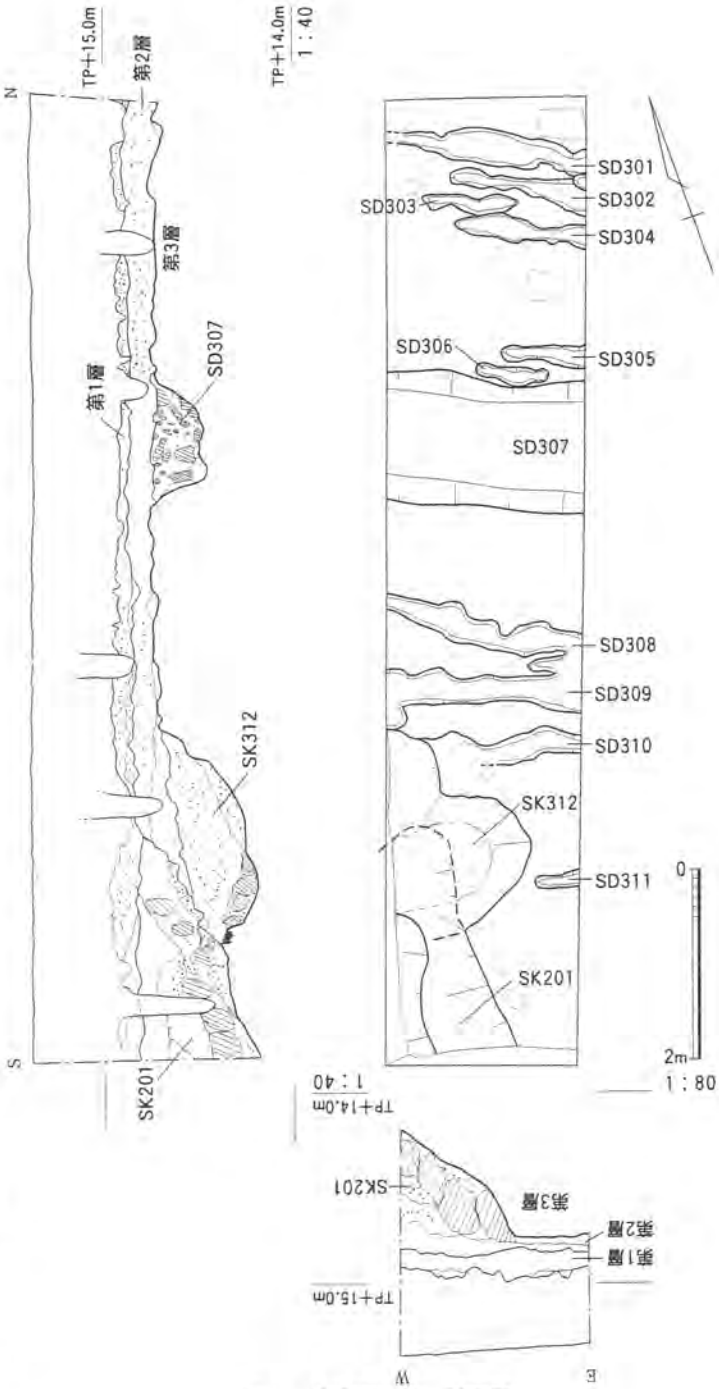


図４　遺構平面図・断面図

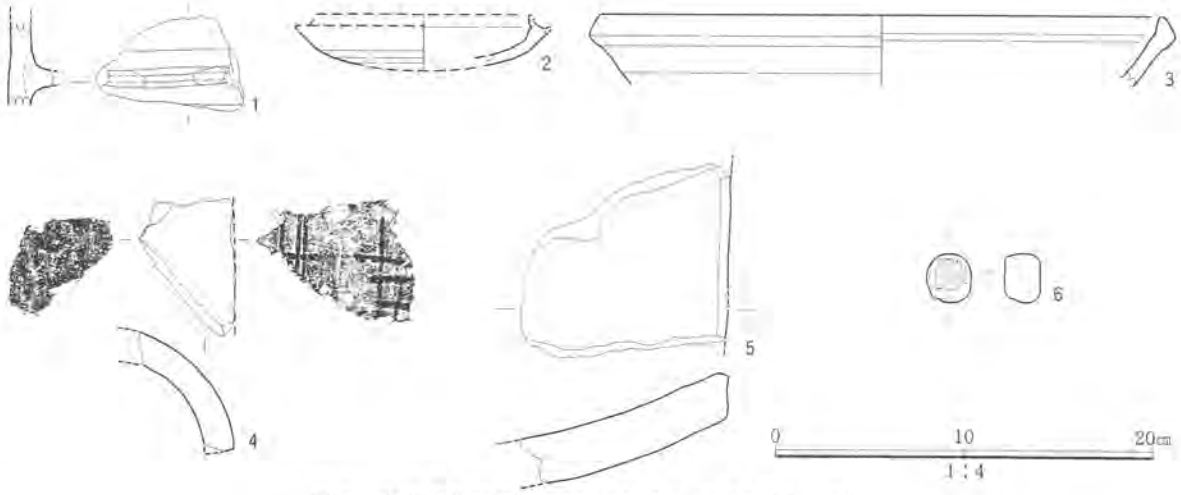



図５　出土遺物実測図　SD301(６)、第２層(１～５)

SD308～311は、幅0.2～0.4mで、深さは0.05m以内と浅い。耕作に係る溝であろう。狭い範囲であるが、SD307をはじめとする溝の方向は現在の周辺の敷地のそれと近い。SD301からは中世の瓦を加工した直径2.5cm、厚さ1.9cmの円板6が出土した(図５)。SK312は南北2.2m以上、東西1.5m以上、深さ0.5mあり、調査区外の西へ拡がっている。埋土は砂混りのにぶい黄橙色シルトである。

第２層上面では南西隅でSK201を検出した。SK201は南北2.4m以上、深さは0.6m以上あり、南西に向けてさらに落込んで調査区外に拡がっている(図４)。下部は灰黄色の粘土のブロック、上部は灰オリーブ色粗粒砂混りシルトで埋められていた。

SK201と第３層上面の各遺構の時期については、遺物の出土量が少ないこともあるが、第２層出土遺物も含めてほとんど差を見出せない。全体では中世の瓦片の出土が目立つ。

以下に第２層出土の遺物について記述するが、第２層の時期を表すのは図５の3・5である。3は東播系の須恵器鉢、5は中世の平瓦片である。5は磨滅して調整はわからないが、焼成があまい。その他に円筒埴輪のタガの部分1、TK209型式の須恵器杯身2、古代の丸瓦4がある。4は凸面に格子状のタタキメ、凹面に布目痕が残り、灰色の堅緻な焼成である。

〈まとめ〉

本調査で検出した遺構・遺物は、古墳に関連するものとしては埴輪片以外になく、溝や土壙、瓦などの中世のそれが主である。

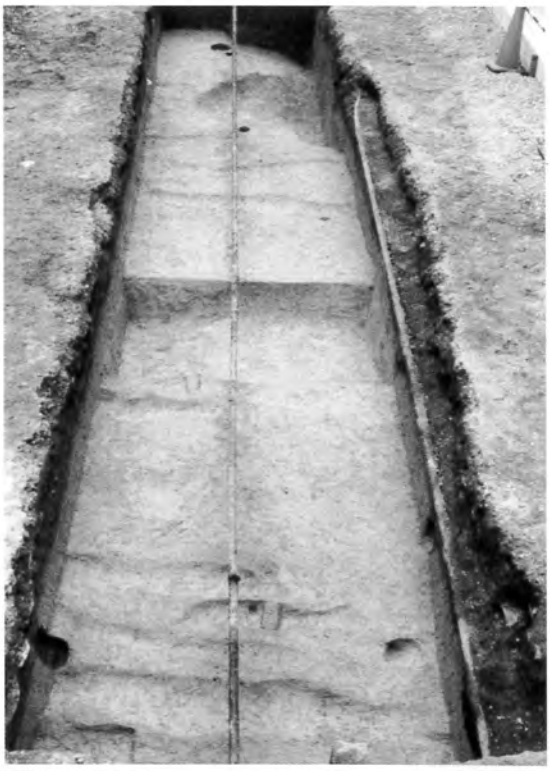
調査地の東約250mには阿倍野筋があるが、これは平安時代以降、四天王寺・住吉大社を経て、紀州高野・熊野への参詣の道筋となった。また調査地の東南の阿倍野筋に面して、熊野街道沿いに設けられた熊野九十九王子の第二王子である阿倍王子神社があるなど、調査地周辺は古代後期から中世にかけて交通の要地として繁栄していたと推定される。小規模な調査であったが、今回の成果は、周辺でこれらの時期の集落や寺院などの遺構が存在することを示唆するものと考えられ、今後の調査に注意を払わなければならない。

## 参考文献

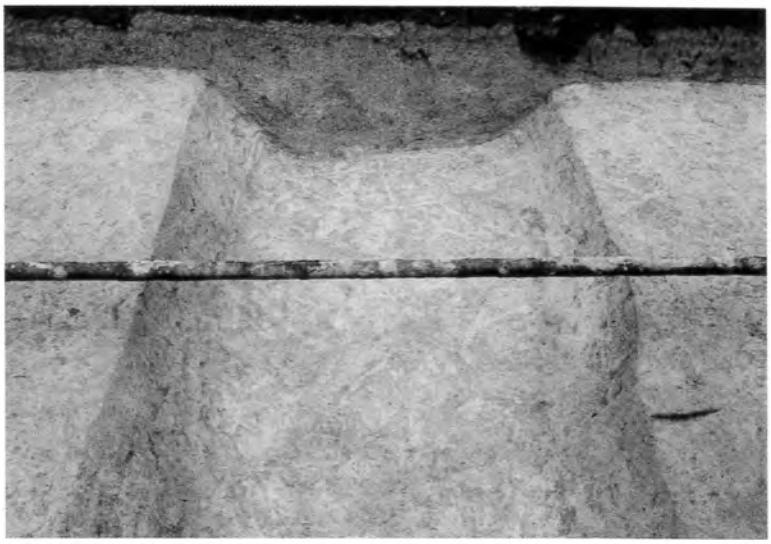
上田宏範1988、「大阪市域の古墳」:『新修大阪市史』第1巻、pp.351－424

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「東急不動産による建設工事に伴う発掘調査(MA96－2)」:『平成8年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.109－118

第３層上面遺構
（北より）



SD307
（東より）



SK201・312
（南より）

# Ⅷ 東 住 吉 区

# 桑津遺跡発掘調査（ＫＷ06－２）報告書

・調 査 個 所　大阪市東住吉区桑津３丁目99－２
・調 査 面 積　16㎡
・調 査 期 間　平成18年11月１日～11月２日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長 南秀雄、趙哲済

〈調査に至る経緯と経過〉

東住吉区に所在する桑津遺跡は、1929(昭和４)年に弥生時代の集落跡として発見された。1975(昭和50)年ごろから本格的に発掘調査が行われ、現在では東住吉区桑津・駒川・西今川・北田辺に拡がる南北0.9㎞、東西0.8㎞の範囲が埋蔵文化財包蔵地に指定されており、南部で古代の田辺廃寺と重なり、東部では杭全遺跡と接している。

本調査地は遺跡範囲の北縁部に当るとともに、桑津遺跡が立地する台地の緩やかな尾根筋に位置する(図１)。近隣では東約120ｍのＫＷ91－２次調査地で弥生時代中期の方形周溝墓や飛鳥時代の掘立柱建物が、南約110ｍの京善寺境内(ＫＷ88－６次調査地)でも方形周溝墓が、南約250ｍのＫＷ06－１次調査地では弥生時代中期の住居域や古墳時代末～奈良時代の集落に係る遺構と遺物が見つかっていた。

表題の建設工事に伴って2006年10月30日に大阪市教育委員会文化財保護課が試掘調査を行ったところ、溝が見つかったことにより、本調査を実施することになった。

調査範囲は４ｍ四方であり、第１日に機械掘削、人力による遺構の検出と掘下げ、遺物の取上げ、および記録を行い、第２日に埋戻しを行った。

調査で使用した水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP＋○ｍと表記する。また、示北記号は図１の全体図が座標北、図１の部分図および図３が磁北である。

〈調査の結果〉

１．層序

現地表はTP＋6.2～6.5ｍであり、深さ約130㎝までの地層を上位から第０層～第４層に区分した(図２)。

第０層は現代盛土層で、層厚は25㎝以上であった。現代の攪乱が甚だしい東半部では、攪乱埋土の層厚は最大70㎝であった。

第１層は灰黄褐色(10YR4／2)小礫～細礫混り中粒～細粒砂質シルトからなる盛土直前の作土層で

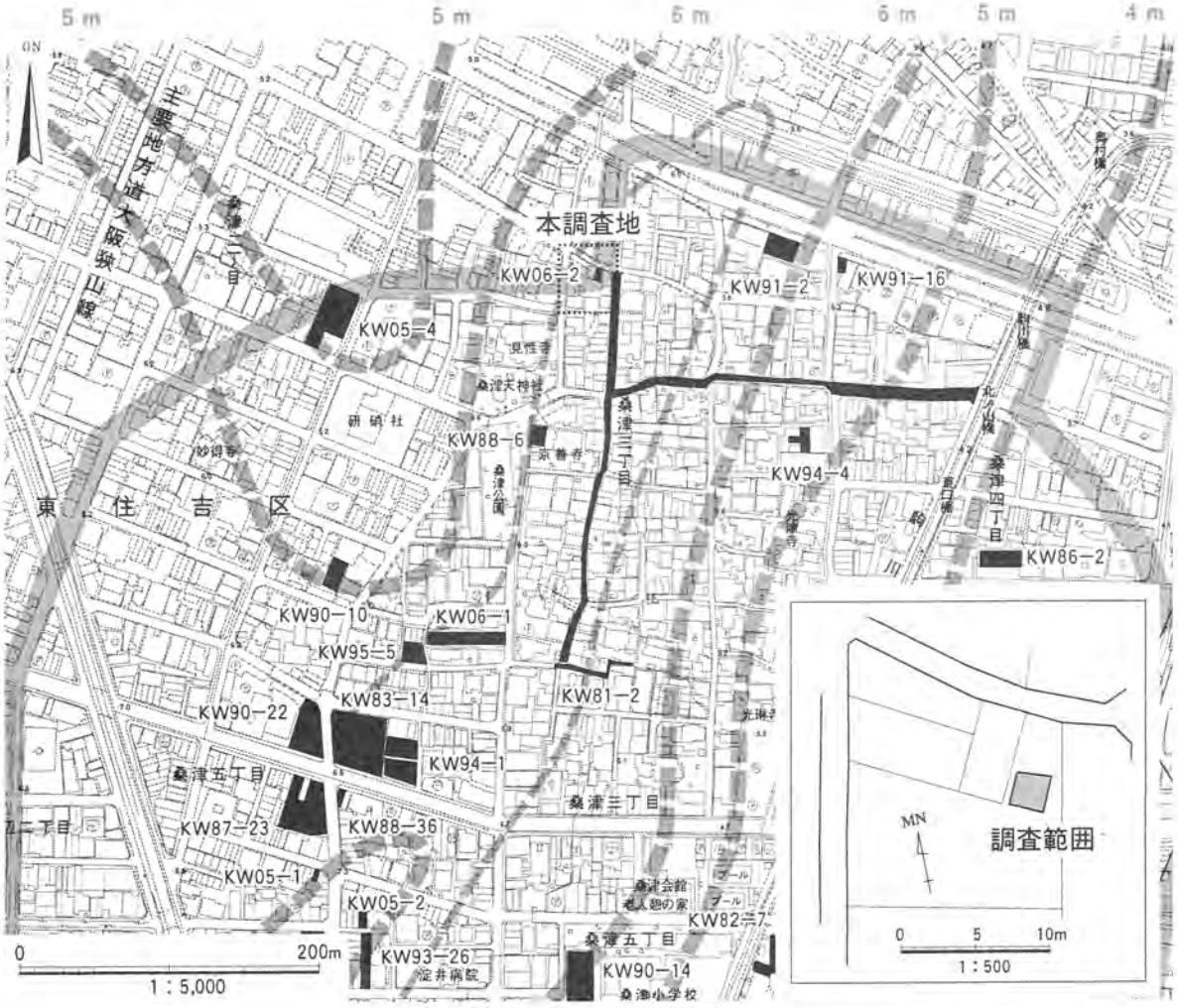



図１　調査地の位置と調査範囲

あり、層厚は約20cmであった。

第２層はにぶい黄褐色(10YR4／3)小礫～細礫混り中粒～細粒砂質シルトからなる作土層であり、層厚は15～25cmであった。

第３層は褐色(10YR4／4)小礫～細礫混り細粒砂質シルト層からなる人為層であり、層厚は６～９cmであった。

図２　地層と遺構の関係図

第４層は明褐色(7.5YR5／8)～橙色(7.5YR6／8)の上方細粒化するシルト質細粒砂～細粒砂質シルト層で、層厚は60cmまでを確認した。桑津の台地を構成する更新統である。

## ２．遺構と遺物

第４層の上面で溝を、第４層上位の第０層基底面で土壙を検出した(図２～５)。

溝SD01は幅0.95m、深さ0.30mで逆台形の断面形を

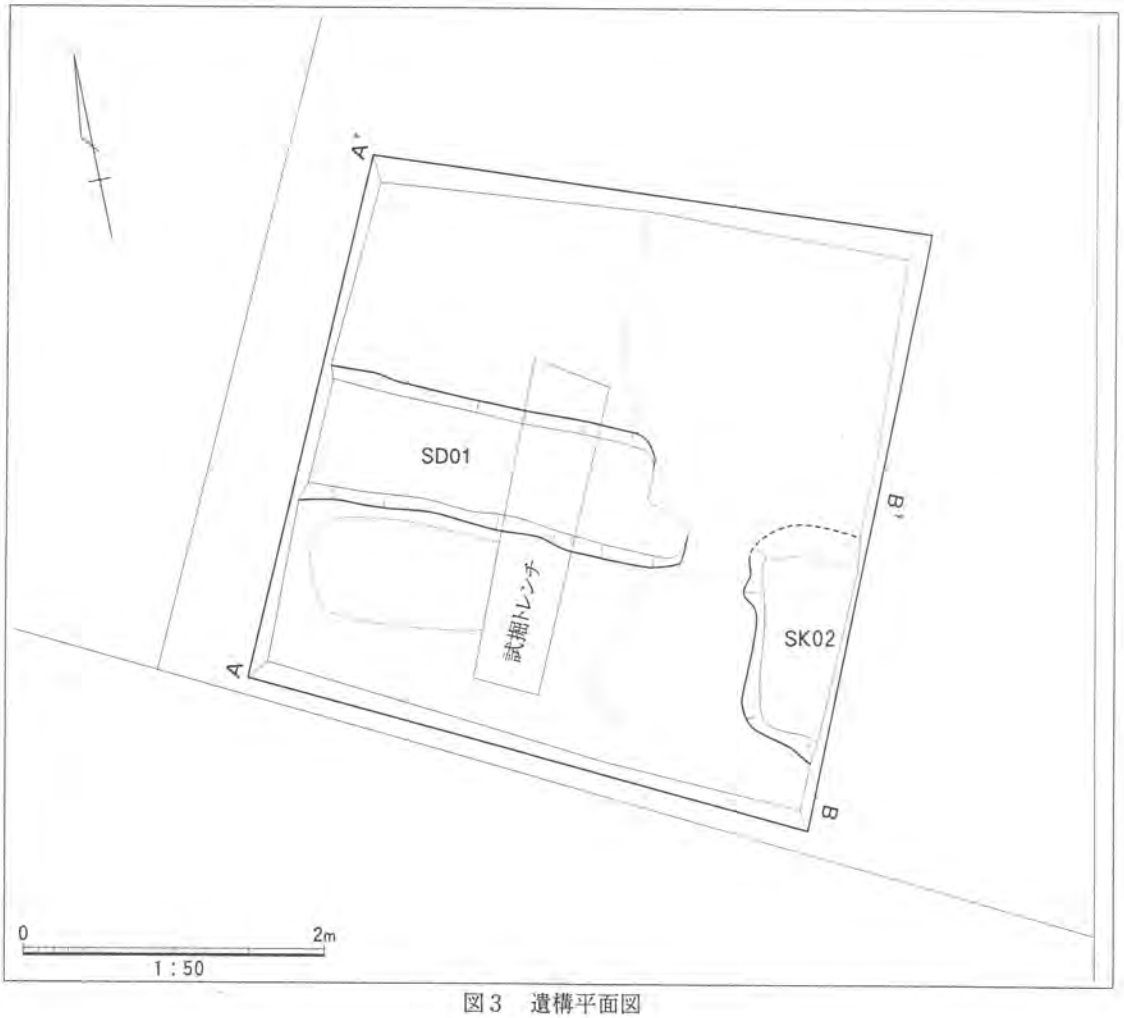



図3　遺構平面図

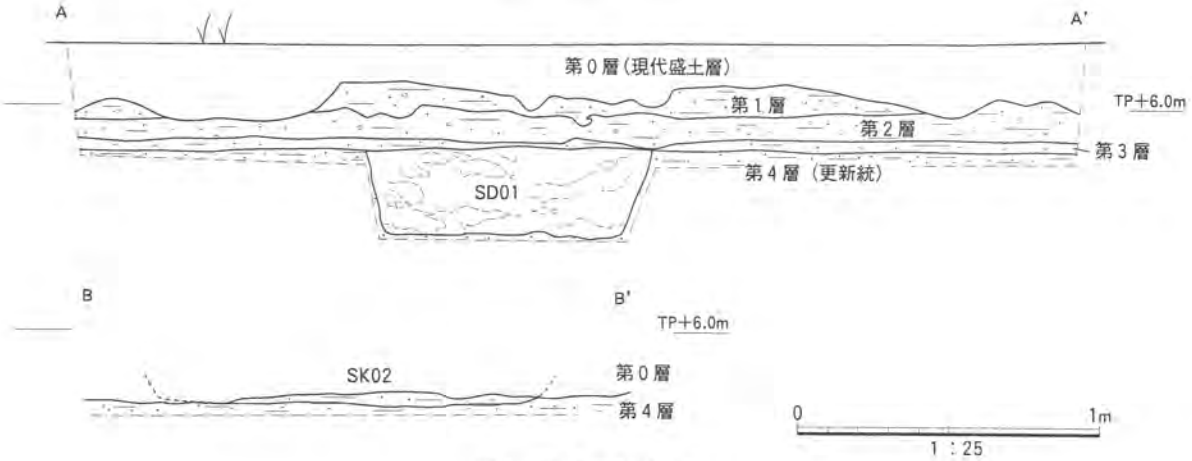



図4　遺構の地質断面図

もつ。長さ約2.6mを検出し、東側で浅くなった。溝の方向は北西－南東方向であり、図1の敷地北側の道路方向と平行している。溝内は黄褐色(10YR5／8)シルト偽礫と明褐色(7.5YR5／7)シルトの基質からなる埋土であった(図4)。埋土からは飛鳥時代初頭頃の須恵器杯身の破片が出土した(図5)。溝の時期は、溝方向が現況道路と平行していることから、中世以降と推定される。

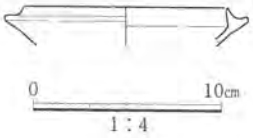



図5　須恵器実測図

試掘調査で検出された溝である。

土壙SK02は平面形が長軸1.6m以上、短軸0.7m以上の方形気味であった。第0層下面の攪乱により甚だしく削られており、底部分を僅かに検出したに留まる。第4層上面のものならば、深さは0.1m程度になる。埋土は明褐色(7.5YR5／8)細粒砂質シルトであった。遺物は見つからなかった。

〈まとめ〉

本調査では溝と土壙を検出した。それぞれの時期を特定するには至らなかったが、溝は道路配置との関係から中世までさかのぼる可能性がある。また、弥生時代～古代の遺構は見つからなかったが、飛鳥時代初頭ごろの須恵器が出土したことから、近隣に古代の遺構が残存する可能性を指摘することができる。

調査地近景
（南から）

遺構検出状況
（北から）

遺構掘り下げ後の
状況（東から）

# 天美西遺跡発掘調査（ＡＡ06－１）報告書

・調 査 個 所　大阪市東住吉区矢田７丁目
・調 査 面 積　100㎡
・調 査 期 間　平成18年12月13日～12月27日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南　秀雄、小田木富慈美

〈調査に至る経緯と経過〉

天美西遺跡は大阪市の南部、松原市との市境に位置する。地形的には上町台地の南端部に当り、遺跡の東を旧西除川が北流していた。調査地の西に面する南北道路は下高野街道であり、これを北上すれば、９世紀初頭の創建と伝えられる延喜式内社の阿麻美許曽(あまみこそ)神社が存在する。また、本遺跡に西接して、旧石器時代～近世の大規模な複合遺跡である大和川今池遺跡が存在し、東には弥生時代前期の水田や、平安時代中期の居館が検出された複合遺跡の池内遺跡が位置している(図１)。以上のように調査地周辺では、特に古代～中世にかけての遺跡が密に分布しており、歴史的に重要な地点であるといえよう。

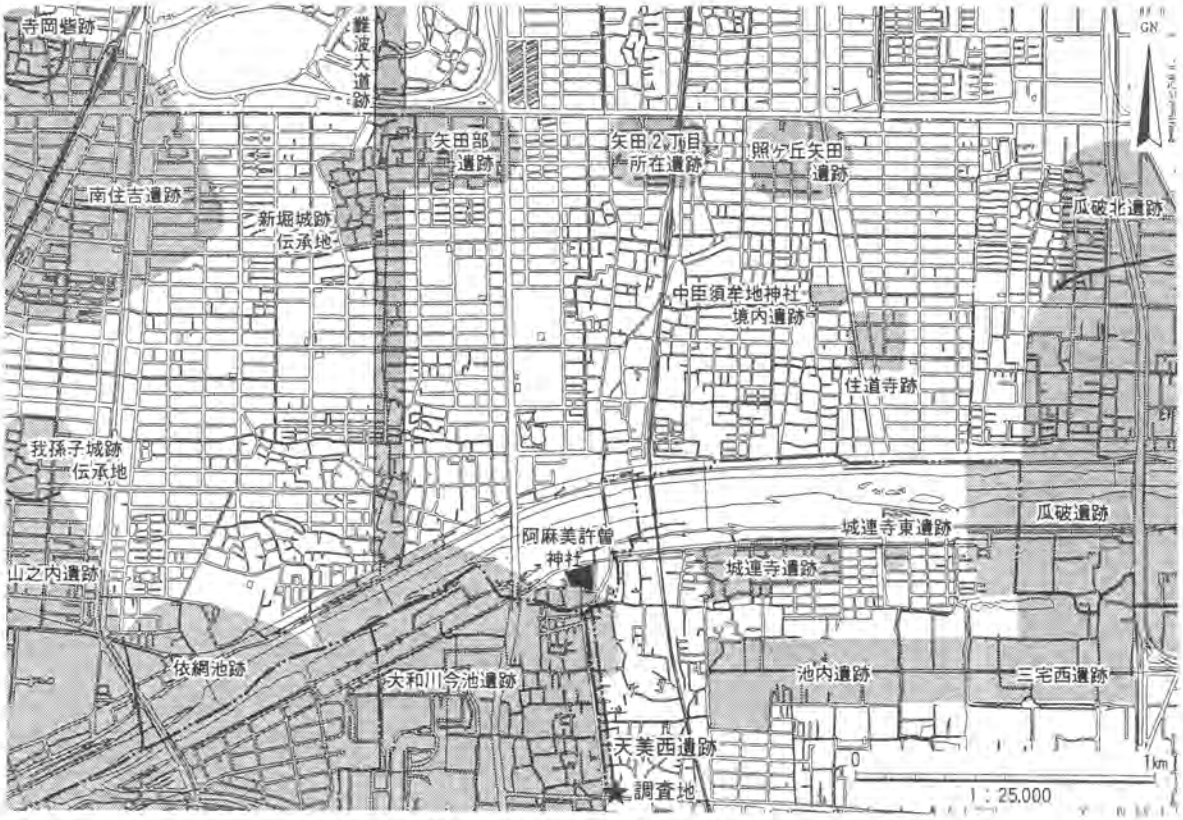


図１　調査地と周辺の遺跡位置図

今回の調査地は天美西遺跡の最南端に位置している(図２)。周辺ではこれまで、調査地の南西50mで、府営住宅建設に伴う大和川今池遺跡の発掘調査が大阪府教育委員会によって行われている[大阪府教育委員会1983・1985]。また、調査地の北西約200mの地点では大阪府文化財センターによる大和川今池遺跡の発掘調査が継続中である。ただし、周辺ではこれまで数回の立会調査が行われたのみで、本格的な発掘調査は今回が初めてとなる。大阪府教育委員会の調査では、奈良時代末～平安時代および平安時代後期～鎌倉時代の居住域が確認されており、今回もこれらと同時期の遺構の検出が期待された。

調査に先立ち行われた試掘調査で、現地表下1.5m以下に中世以前とみられる良好な遺物包含層が複数確認された。このため、事業者との協議の結果、本調査を行うことになった。調査区は敷地の中央で南北方向に設定した(図３)。作業は12月13日に開始した。まず現代盛土および中世以降の作土層を重機で掘削し、それ以下を人力で掘り進めた。その間必要に応じて随時、図面・写真による記録に努めた。当初の予想以上に遺構の残存が良好で、複数面で遺構が検出された。

図２　周辺の既往調査位置図

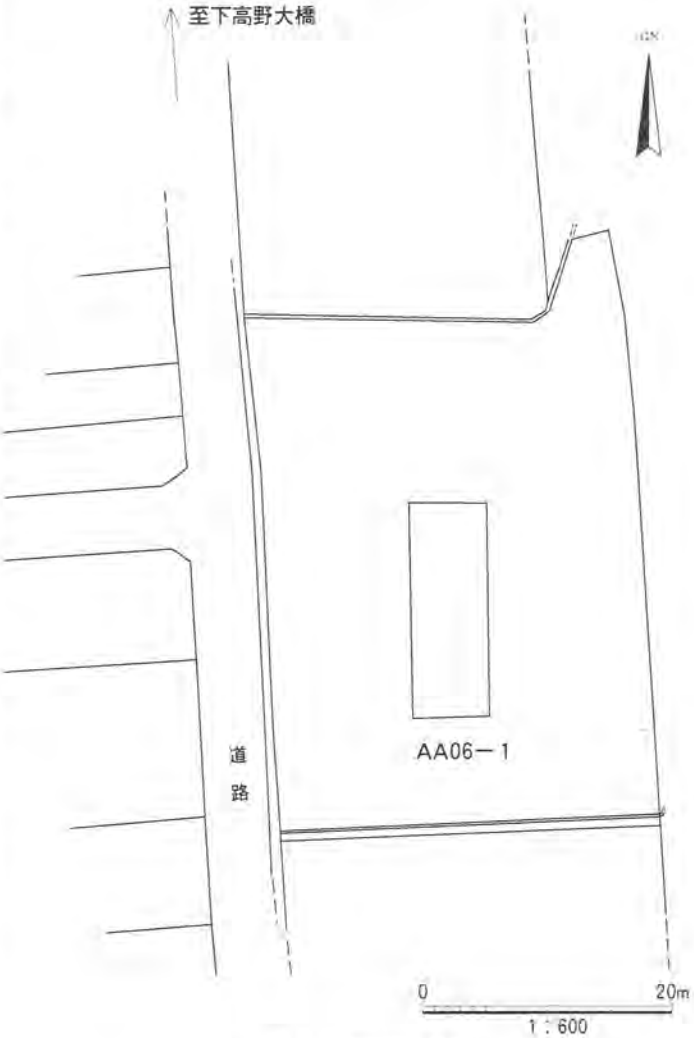



図３　調査区位置図

このため、調査期間などの制約上、第９層以下は北半部のみを面的に調査することとした。なお、本報告で示す水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図ではTP+○mとした。また、図６～８の平面図に示す方位は磁北である。

〈調査の結果〉

１．層序

調査地では現地表の標高はTP+12.1～11.9mで、北に向って低くなっている。厚さ70cmの現代盛土を除去すると、現代の作土以下に近世以前の地層が良好な状態で堆積していた(図４・５)。なお、第３層から上位は重機を用いて掘削したため、詳細は不明である。調査地では第４層よりも上位はほぼ水平に堆積しているが、第５層以下は北西が高く、南西に向って緩やかに低くなる地形であった。そのため、南西の低い部分を埋める形での客土層が何枚も認められた。一部ではその地層が攪拌され、作土となっていた。なお、第４層以下からは大量の遺物が出土している(図10)。本調査地での層序は以下のとおりである。

第１層：現代作土層で暗灰黄色中粒砂質シルト層である。層厚は10cmである。

第２層：含礫黄褐色シルト質中粒砂層で、２枚に細分された。第2a層は層厚が10cm未満の水成層である。調査区の全域に堆積していた。第2b層は層厚が30cmの含礫オリーブ褐色中粒砂質シルト層で、作土層である。

第３層：大きく２枚に細分された。第3a層は黄褐色中～細粒砂からなる水成層で、層厚は20cmである。第3b層は暗灰黄色シルト質中粒砂層で、作土層である。層厚は30cmを測る。第3b層の上面では断面観察で畦畔が確認され、下面では南北方向の耕作溝が多数検出された。

第４層：上下２枚に細分された。第4a層は作土層の含礫暗灰黄色シルト質中粒砂層で、鉄分の沈着が著しい。第4b層は含礫褐灰色中粒砂～粗粒砂層で、マンガンが沈着している。いずれも層厚は10cm以内であった。本層からは土師器・須恵器・瓦器・中国産白磁・瓦・鞴羽口・鉱滓・金属片が出土している。第4b層の上面および基底面では溝・柱穴・小穴・性格不明の土壙が検出された。

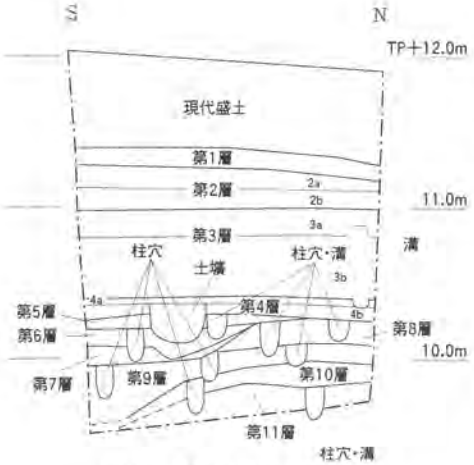


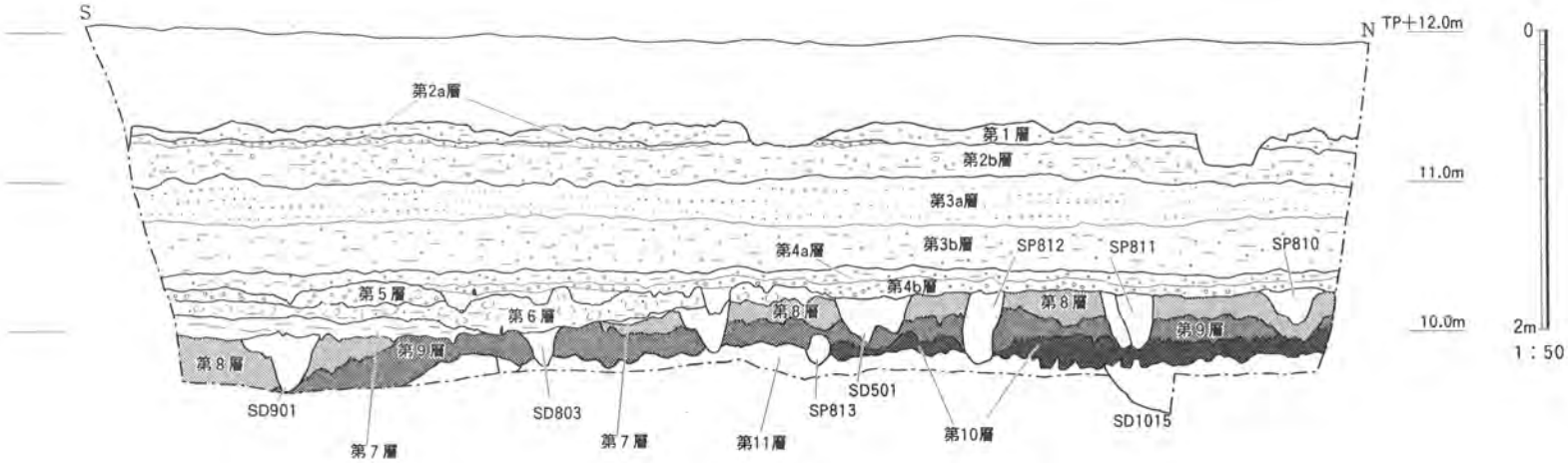
図４　遺構と地層の関係図

以下の第５～７層は調査区の南半～南東にかけて認められ、南東に向って厚く堆積していた。

第５層：含礫灰黄褐色粗粒砂層で、層厚10cm以内の作土層である。土師器・須恵器・瓦器・中国産白磁・瓦・鞴羽口・鉱滓が含まれる。

第６層：灰黄褐色砂質シルト層で、粘土の偽礫を含む客土層である。層厚は20cmで、土師器・須恵器・瓦器・中国産白磁・瓦を含んでいる。本層の上面では溝・柱穴・小穴が検出された。

第７層：にぶい黄褐色シルト質粘土層で、下部に炭化物の薄層が認められる。基本的には客土層と考えられるが、




第１層：暗灰黄色中粒砂質シルト
第2a層：含礫黄褐色シルト質中粒砂
第2b層：含礫オリーブ褐色中粒砂質シルト
第3a層：黄褐色中～細粒砂
第3b層：暗灰黄色シルト質中粒砂
第4a層：含礫暗灰黄色シルト質中粒砂（鉄分沈着）
第4b層：含礫褐灰色中粒砂～粗粒砂（マンガン沈着）
第５層：含礫灰黄褐色粗粒砂
第６層：灰黄褐色砂質シルト（粘土偽礫含む）
第７層：にぶい黄褐色シルト質粘土
第８層：暗褐色中～細粒砂質シルト
第９層：黒褐色シルト
第10層：黒褐色粘土質シルト
第11層：にぶい黄褐色シルト質粘土

0　5m
1：100

図５　調査区西壁断面図

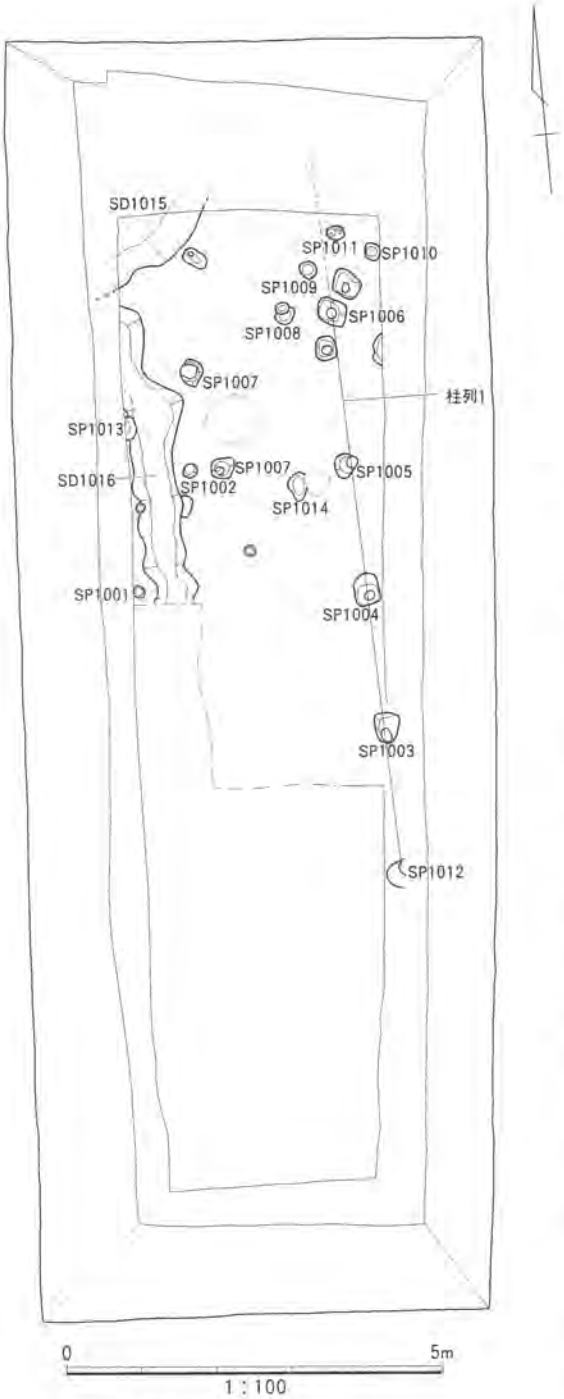
一部で攪拌した痕跡が認められる。本層からは土師器・須恵器・黒色土器・瓦器が出土した。

第８層：暗褐色中粒砂～細粒砂質シルト層で、調査区の全域で認められた。層厚は20cmで、上面の標高はTP+10.2～10.0mで南東に向って低くなる。平安時代前半以前の土師器・須恵器・黒色土器のほか、古代の瓦を含んでいる。本層の上面では溝・柱穴・小穴・土壙が検出された。

第９層：黒褐色シルト層で、調査区の全域で認められた。層厚は10cmで、奈良時代以前の土師器・須恵器を含んでいる。本層の上面では溝・柱穴・小穴が検出された。

第10層：黒褐色粘土質シルト層で、層厚は20cmであった。奈良時代以前の土師器・須恵器を含む。

第11層：にぶい黄褐色シルト質粘土層で、地山である。本層の上面では柱列・溝・柱穴・小穴が検出された。




第11層上面検出の遺構

図６　平安時代初頭以前の遺構平面図

２．遺構と遺物

第４層以下では、複数の遺構面で古代末～中世の遺構が検出された。

１)平安時代初頭以前の遺構と遺物(図６・９)

第11層上面で建物の一部の可能性のある柱列や多数の柱穴のほか、溝が検出された。

調査区の東側で検出された**柱列1**は南北に延びており、掘立柱建物の側柱の可能性がある。柱筋の伸長方向は磁北からやや西に振っており、現在の道路の方向にほぼ並行している。柱間寸法は1.8mである。図９－1はこれらの柱穴のうち**SP1006**から出土した須恵器杯Bである。高台は外寄りに付く。８世紀末～９世紀初頭のものであろう。このほかにも柱穴と考えられる多くの小穴が検出された。これらからは須恵器・土師器が出土している。図９－2は**SP1002**から出土した土師器皿である。平安時代中期、10世紀頃のものであろう。

また、調査区の北西隅では南西～北東方向の**SD1015**と、この南で南北方向の**SD1016**を検出した。**SD1015**は規模が大きく、他の遺構の可能性もある。須恵器甕片が出土した。**SD1016**は幅0.5m、深さ0.1mの浅い溝で、方向は**柱列1**に平行する。奈

良時代以降とみられる須恵器杯・土師器杯の細片が出土している。

2)平安時代の遺構と遺物(図7～10)

第9・8・6層の各上面および、第4層基底面、第4a・4b層の各上面で遺構が検出されている。ただし、出土遺物からみると、これらの時期はそのほとんどが森島康雄氏による瓦器編年のⅡ－2～3期に収まるようであり[尾上実・森島康雄・近江俊秀1995]、短期間に客土と遺構の形成が繰り返

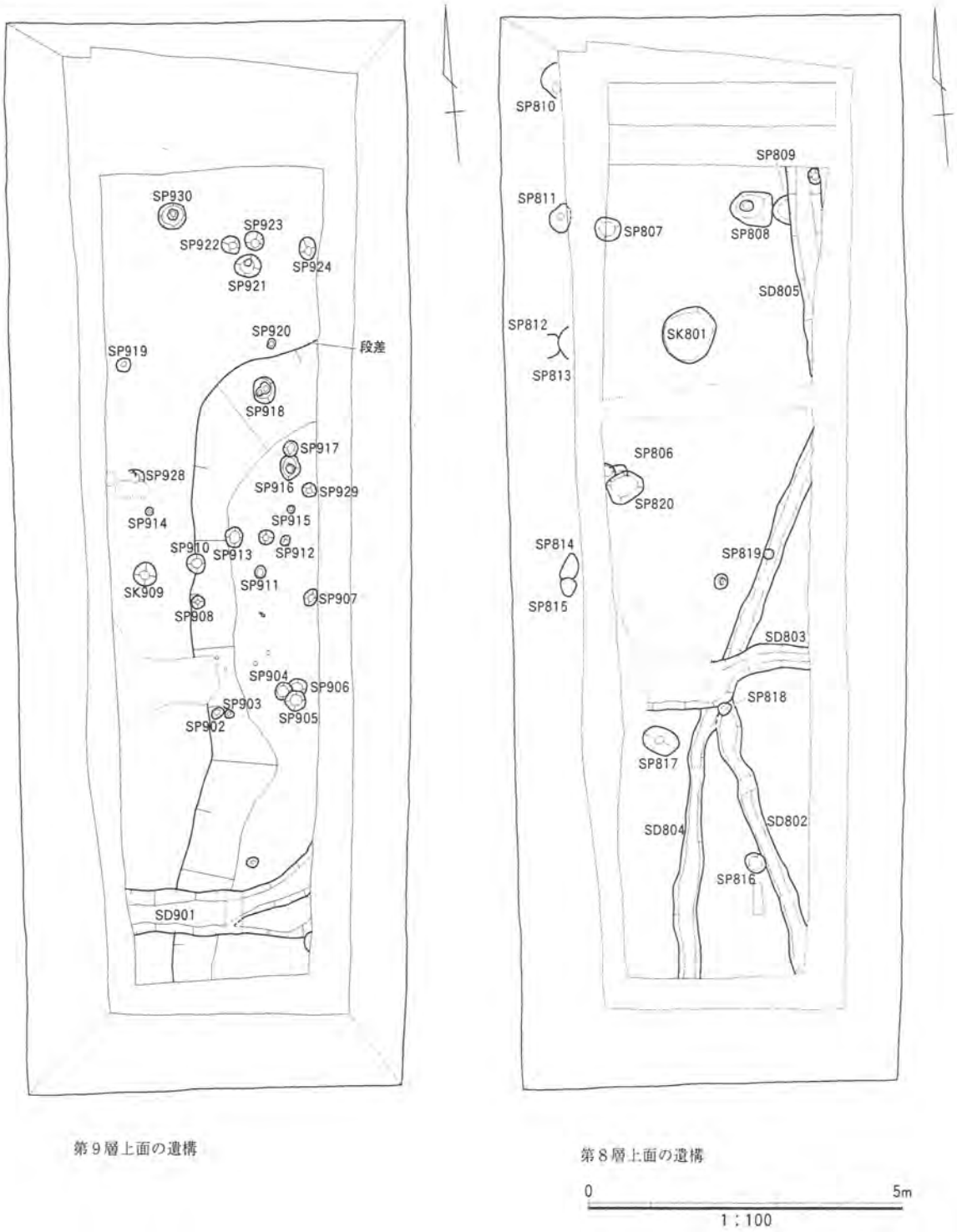



図7　平安時代の遺構平面図(1)

されたと思われる。

a．第9層上面の遺構(図7左)

この段階においては、調査区内は北および西側が高く、南東側と比較して約0.2mの段差があった。南端では東西方向のSD901が確認された。SD901の幅は0.6～1.0m、深さは0.3mで、東側は北へ向って屈曲している。埋土の下部は灰色粘土質シルト層で、滞水した状態が認められた。上部には水成の砂礫層が堆積していた。平安時代前半の土師器・須恵器片が出土している。

溝の北側では約30個の小穴や柱穴が確認された。これらの多くは掘立柱建物の柱穴とみられるが、調査区内では建物を復元しえなかった。出土遺物は土師器・須恵器の細片のみであった。

b．第8層上面の遺構(図7右)

調査区の南半から北にかけて溝を検出したほか、土壙および小穴が確認された。SD802～805は幅0.3～0.6m、深さ0.2～0.3mの溝である。東西方向のSD803が、南北方向のSD804・802を切って掘削されている。なお、北東部で検出されたSD805は東壁断面でも確認され、SD804につながる溝の可能性がある。これらの溝からは土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・白磁が出土している。SK801は直径0.8m、深さ0.4mの平面が円形の土壙で、遺物は出土していない。このほかに西壁面も含めて多数の柱穴を確認した。これらからは土師器・須恵器・瓦器が出土している。

c．第6層上面・第4層基底面の遺構(図8左)

調査区の南部と中央から北で溝を検出したほか、土器を埋納した遺構、多数の柱穴・小穴、性格不明の落込みを検出した。なお、ここで示す遺構番号が400番台のものは第6層上位の第4層基底面で検出した遺構、500番台は第6層上面で検出した遺構である。

溝は調査区の北部と南部で東西方向のものが各1条検出された。SD407は調査区の南部で検出した幅0.3～1.0m、深さ0.2mの溝である。瓦器椀・土師器が出土している。SD408は調査区の北半で認められた幅0.4～0.7m、深さ0.4mの溝で、調査区の東でSX403につながる。5・9～11はSD408から出土した。5は須恵器鉢である。9～11は瓦器椀である。見込みには粗い斜格子状暗文が認められる。Ⅱ－3期であろう。SX403は調査区の東へ向って落ちる落込みで、SD408と同様な南北方向の溝または、土壙や井戸などである可能性がある。SX403の西肩からSD408にかけて土師器・瓦器などが集中して出土する個所が認められた。これらは廃棄されたものと思われる。4・6～8はSX403の土器集中個所から出土した。4は土師器羽釜で口縁部は短く外反し、体部外面には煤が付着する。12世紀頃であろう。6～8は瓦器椀である。見込みには斜格子状あるいは平行の暗文を施す。Ⅱ－3期であろう。

土器埋納遺構としては、調査区の北端で土師器皿を埋納したSX401・402、調査区の中央でSP425を検出した。SX401は側溝掘削時に検出されたもので、掘形などは確認できなかったが、本来は直径・深さともに0.3m程度の土壙であったとみられる。その中に土師器の小皿約35点を埋納し、この上に中型の皿2点を一方は口縁部を上に、もう一方は下にして置かれていた。小皿の埋納状況は口縁部の上下方向や重ねかたに規則性はなく、縦方向に入れられたものも認められた。12～17はSX401から出土した土師器皿である。12～15は小皿である。いずれも口径10cm前後、器高2cm前後である。内面と口縁部の外面をナデで調整している。外面と底部内面にはユビオサエの痕跡がある。出土した小皿

は、法量と胎土はすべて共通しているが、調整の特徴から２種類に分けることができる。16・17は中型の皿である。小皿と同じ胎土で作られており、調整もよく似ている。法量は口径が15cm程度、器高は３cm程度である。

SX402は北壁で確認されたため、埋納状況は明らかにしえなかったが、SX401と同様な土師器小皿が30点近くと、中型の皿が２点出土している。18～23はSX402から出土した土師器皿である。18～

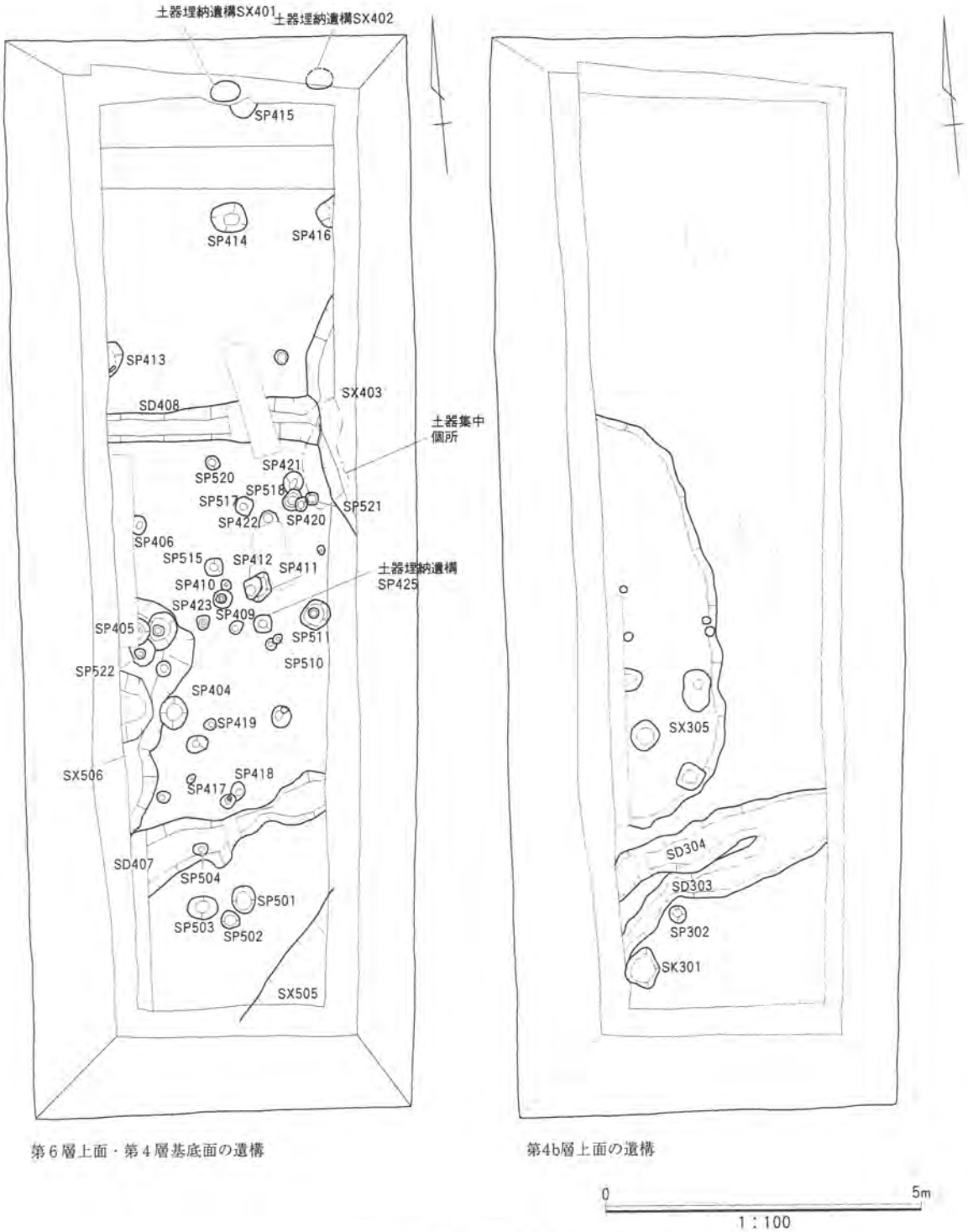



図８　平安時代の遺構平面図（２）

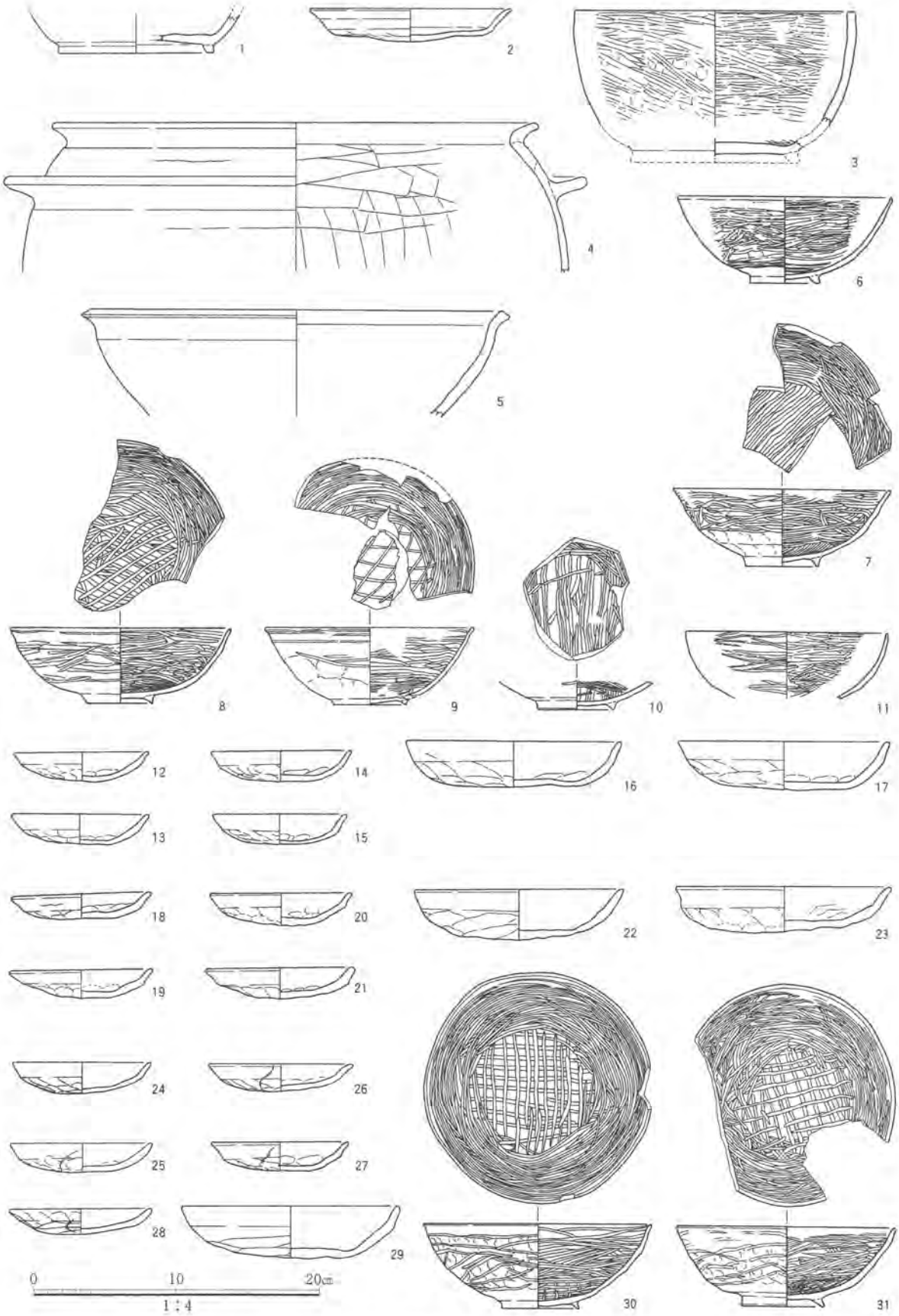



図9　遺構出土遺物実測図

SP1006(1)、SP1002(2)、SP515(3)、SD408(5・9～11)、SX403土器集中個所(4・6～8)、SX401(12～17)、SX402(18～23)、SP425(24～30)、SP405(31)

21は小皿で、口縁部内外面と体部内面をナデで調整している。底部内面と外面にはユビオサエ痕が顕著に残る。22・23は中型の皿である。胎土や調整の特徴は小皿と同様である。以上の土師器皿の法量や胎土および調整の特徴はSX401出土の土師器と一致する。出土点数も両者とも中型の皿が2点と小皿30点程度である。このことから2つの遺構の土師器は同時に埋納された可能性が高い。

また、調査区の中央ではSP425が検出された。こちらではSX401・402と同じ特徴をもつ土師器小皿約42枚を埋納し、その上に中型の皿と瓦器椀各1点を口縁部を下にした状態で伏せて置いていた。小皿の埋納状況はSX401と同様であった。24～28はSP425から出土した土師器小皿である。サイズや製作技法は他の土器埋納遺構と同様である。29は土師器中皿で、これも他の土器埋納遺構と同様な技法で作られている。30は瓦器椀である。見込みには格子状暗文を施している。外面のヘラミガキはやや退化している。Ⅱ－3期であろう。

なお、土器埋納遺構については、大阪府教育委員会が行った府営住宅の調査地におけるB区SP19でも、SX401・402と類似した土師器皿のみを埋納した例がある[大阪府教育委員会1983]。

小穴や柱穴は調査区の中央付近で30個以上が確認された。これらの中には掘立柱建物を構成するものもあると思われるが、調査区内で建物を復元することはできなかった。また、土器を埋納した小穴も存在するため、以下ではこれについて述べる。

調査区の中央で確認されたSP515は直径0.3m、深さ0.2mの小穴で、黒色土器鉢が出土した。3はA類の鉢で、内外面ともにヘラミガキを施す。また、この南西で検出されたSP405では瓦器椀が伏せた状態で1点埋納されていた。31は見込みに格子状暗文を施す瓦器椀である。ヘラミガキの特徴は30と類似する。Ⅱ－3期であろう。SP515の北東で検出されたSP420は直径・深さともに0.2mの小穴で、土師器杯・瓦器椀が出土した。図10－32・33はSP420から出土した。32はロクロ回転を利用して作ったとみられる土師器皿で、底部を糸切りしている。底部を糸切りした皿は第4層からも出土している。33は瓦器椀である。見込み内には平行線状の暗文を施す。Ⅱ－3期であろう。

調査区の南西では、土壙状の遺構SX506を検出した。西壁では掘形が確認されなかったことから、規模は南北が3.7m、東西1.0m以内、深さは0.6mで、平面は不整楕円形を呈するとみられる。埋土は炭や焼土および粘土の偽礫を含む人為的な埋戻し土で、瓦器・土師器のほか、鉱滓・鞴羽口が出土した。またこの周辺および第4層からは、金属片や鞴羽口・鉱滓などが出土しており、付近で小規模な金属加工が行われた可能性がある。なお、このSX506の南東で検出されたSP404は、直径0.3m、深さ0.1mの浅い小穴で、埋土には炭や焼土を多く含んでいた。下面が直接火を受けた痕跡は認められなかった。ここでは炉の基底部の可能性のある被熱した粘土塊が確認された。

d．第4b層上面の遺構(図8右)

調査区の南部で浅い土壙状の遺構や溝・小穴が検出された。これらのうちSD303・304はSD407の上位で検出された南西～北東方向の溝で、SD407の位置をほぼ踏襲して掘削されている。埋土からは瓦器・土師器・白磁が出土している。図10－34・35はSD303から出土した。34は土師器小皿である。器形は土器埋納遺構のものと似るが、焼成は極めて良好で、精良な胎土を用いている点が異なる。35は瓦器椀である。見込み内には斜格子状の暗文を施す。Ⅱ－3期であろう。

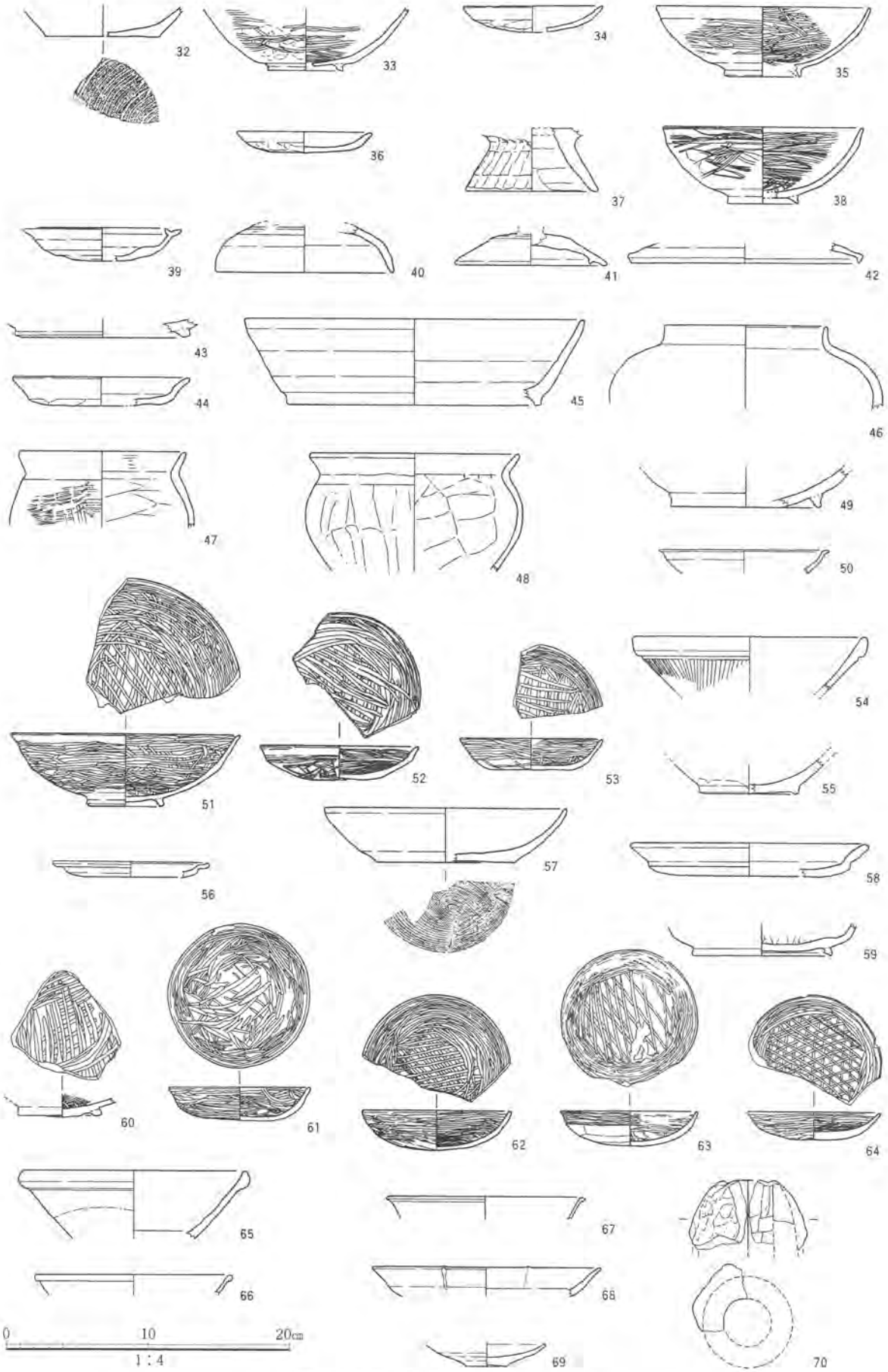



図10　遺構および各層出土遺物実測図

SP420(32・33)、SD303(34・35)、SX305(36～38)、第9～10層(39～42)、第8層(43)、第7層(44～46)、第5層(47～50)、第5～6層(51～55)、第4層(56～70)

SX305はSX506の上位で認められた深さ0.1mの浅い落込みである。瓦器・土師器・鞴羽口・鉱滓が出土している。図10−36〜38はSX305から出土した。36・37は土師器である。36は小皿である。焼成や胎土の特徴は34と類似している。37は低脚皿の脚部で、内面には粘土紐の接合痕を残す。胎土は精良である。他の多くの在地産とみられる土師器とは調整や胎土の特徴が異なる。

なお、第3b層下面では、畝間溝と考えられる幅0.2m、深さ0.1m程度の溝が、南北方向に並行して多数検出されており、調査地はこの段階以降は近代まで耕作地として利用されていたと思われる。

3)包含層出土の遺物(図10)

39〜42は第9〜10層より出土した須恵器である。39は杯Hで、底部外面はヘラ切り後不調整である。40は杯H蓋で、天井部をヘラケズリしている。41は杯G、42は杯Bの蓋でつまみをもつと思われる。40は6世紀末〜7世紀初頭、39・41は7世紀中葉、42は8世紀のものであろう。

43は第8層から出土した須恵器杯Bの高台部で、8世紀末〜9世紀初頭のものであろう。

44〜46は第7層から出土した。44は土師器皿で、10世紀頃のものであろう。45は須恵器杯Bである。平安時代と思われるが、胎土や焼成の特徴は陶邑産のものとは異なっている。46は須恵器短頸壺である。

47〜50は第5層から出土した。47は甕である。外面にはタタキの痕跡が認められる。弥生時代後期末のものであろう。48は土師器鉢である。内外面の調整は磨滅のため不明瞭である。古墳時代と思われる。49は黒色土器A類の杯である。50は白磁皿である。12世紀のものであろう。

51〜55は第5〜6層から出土した。51〜53は瓦器である。51は椀で、見込みには斜格子状の暗文を施す。外面のヘラミガキは密である。52・53は皿である。いずれも内面には斜格子状の暗文を施す。外面のヘラミガキは52がやや雑である。これらはⅡ−2〜3期のものであろう。54・55は白磁である。54は玉縁状の口縁部をもつ碗である。55は高台部である。いずれも12世紀代のものとみられる。

56〜70は第4層から出土した。56〜58は土師器皿である。56はて字状口縁をもつ。57はロクロ回転を利用して作っており、底部は糸切りしている。産地は畿内以外とみられる。58の口縁部は外方へ屈曲している。これらの土師器は12世紀頃のものであろう。59は須恵器杯Bである。高台は口縁部と底部との境よりも内側に付く。8世紀代のものであろう。60〜64は瓦器である。60は椀の底部で、見込みには斜格子状暗文が認められる。61〜64は皿である。いずれも見込みには斜格子状暗文あるいは斜格子状に平行線を加えた暗文を施している。これらの瓦器は63のヘラミガキが若干退化しているが、おおむねⅡ−2〜3期であろう。65〜69は白磁である。65・66は玉縁状の口縁部をもつ碗である。67〜69は皿である。68の口縁部は輪花状になる。白磁はいずれも12世紀頃のものとみられる。70は鞴羽口である。先端部の孔径は3.4cmを測り、外面にはガラス質が付着する。

3．古代から中世における集落の立地について

次に、調査地の周辺についてみていきたい。西除川は古代に造られた狭山池にいったん流入した後にこれより北流する河川である(図11)。現在の西除川は調査地の南で北西へ屈曲し、堺市浅香付近で大和川に合流しているが、大和川付替えまでは調査地の東を北流していた。付け替え以前には、川筋

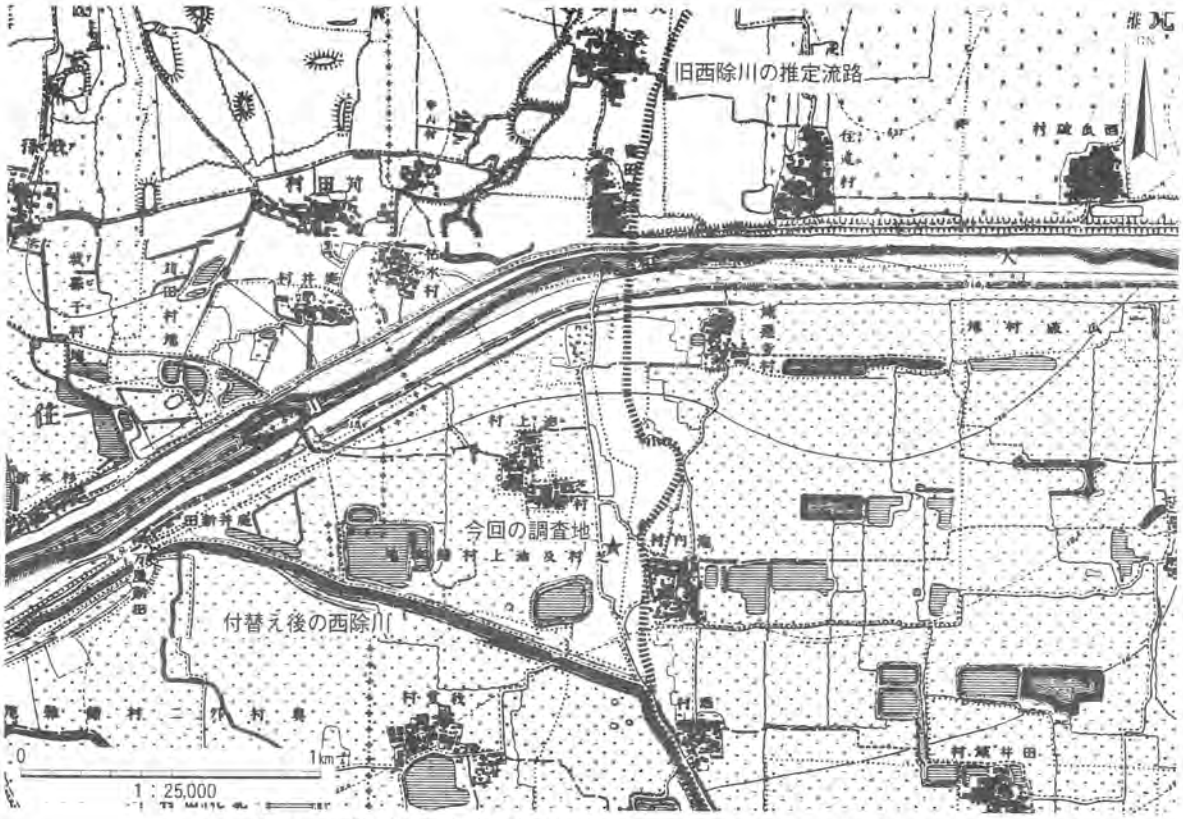


図11　西除川と調査地(『大阪実測図』：明治19年測量に一部加筆)

を変えながら蛇行していたとみられ、調査地および西側道路は自然堤防上に当っていた可能性がある。これを調査で明らかになった地形でみると、少なくとも古代以降、平安時代末まで北西が高く南東に低くなる地形であったとみられる。この間、明らかに洪水によると思われる砂の堆積は認められない。このため、当地は西除川の本流からは少し離れた、集落を営むのに適した安定した立地環境にあったと推測される。また、東南部の地形の低い部分では客土や作土が認められることから、この部分については客土を行って建物が建てられた時期と、耕作地となった時期があったと考えられる。なお、調査区の南部では場所を若干変えながらも東西方向の溝が複数回掘削されており、この位置がなんらかの境界として意識され続けていたものと考えられる。また、集落が廃絶した後は、近代に至るまで調査地は耕作地として利用されたと思われる。さらに、第3b・2b層上面には河川の氾濫による堆積が認められることから、第3a層の堆積時までに川筋が変化した可能性を指摘しうる。

4．土器埋納遺構出土の土師器について

今回の調査で確認された3基の土器埋納遺構からは、瓦器椀1点を除いてのべ100点以上の土師器皿が出土している。これらの遺構では、土師器小皿をまず埋納し、その上に中型の皿ないしは瓦器椀を埋置するという点が共通している。また、出土した土師器の特徴が一致することから、出土器種に若干の差異はあるが、これらの土器はほぼ同時期に埋納された可能性が高いと考えられる。ここでは、調査地周辺における平安時代後半の土器埋納遺構について、今回出土した土師器皿の製作技法の特色や法量の検討を含めて考察を行いたい。

写真１　土師器小皿外面の粘土板接合痕跡

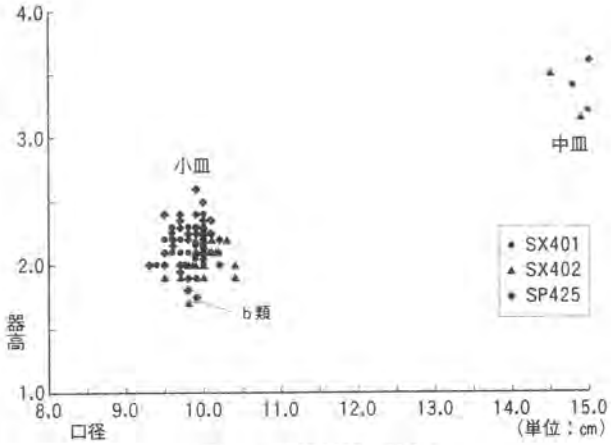



図12　土師器皿の法量

まず、土器埋納遺構の類例をみていくことにする。先に挙げた大阪府教育委員会調査地のSP19では、今回の例と同時期の12世紀中葉に比定される口径14～15cmの中型の皿７点と、口径９～10cmの小皿数十点が一括出土している[大阪府教育委員会1983]。中型の皿は今回検出例と同様に小皿の上に埋置されていた。一方、調査地から約５km東に位置する長原遺跡では、飛鳥～平安時代にかけての土器埋納遺構についての論考がなされている[櫻井久之1993]。これによれば、長原遺跡では11世紀末葉以降、一度に埋納する土器の量が急激に増えるとされる。今回の例も数十点の一括出土であり、時期的にも長原遺跡における状況と矛盾しないといえる。

次に、土師器皿について検討を行う。まず、小皿についてみると、法量は口径が9.5～10.4cm、器高1.8～2.4cmで、規格の斉一性が高い。これらは形態や調整・胎土の特徴から２群に分けられた。ａ類は器壁の厚みが一定ではなく、外面にユビオサエの痕跡を顕著に残すものである(図９－12～27)。口縁部はナデによって整形するが、屈曲の度合いについては個体差が大きい。ｂ類はSP425でのみ認められたもので、器高が1.8cm程度と低く、口縁部がほとんど内側に屈曲しないものである(図９－28)。胎土にはａ類よりも砂粒を多く含む。以上の土師器小皿は、底部外面に粘土板の接合痕跡を残すものが多い(写真１)。このタイプの製作技法についてはすでに言及されており[橋本久和1987]、板状の粘土を丸めておおよその形を作ったのちに整形したと思われる。また、調整が粗雑であることと法量の斉一性が高いことから、これらは一括して大量に作られたと推測される。なお、中型の皿についても法量が一定であること、調整の特徴や胎土が小皿と類似していることから、小皿と同時に製作された可能が高い。

土器を大量に埋納した遺構は、調査地周辺では数箇所で認められており、集落の中でも建物群の周囲で見つかっている。このような遺構の性格としては、地鎮や何らかの祭祀などに使用した土器をそのまま埋めた可能性が考えられ、出土した土師器は法量や製作技法からみて、この目的専用のために作られたと考えることができよう。

〈まとめ〉

今回の調査は小規模ではあったが、多大な成果が得られた。出土遺物は弥生時代から近世にわたっ

ており、飛鳥時代以降はまとまった量の遺物が認められるようになる。なかでも、古代末から中世にかけては数多くの遺構・遺物を検出し、当地で連綿と集落が営まれていたことが明らかとなった。遺構と遺物からは、奈良時代末～平安時代初頭(８世紀後半～９世紀初頭)と、平安時代末(12世紀)に検出量・出土量のピークが認められ、後者の方が圧倒的に多くなる。ただし、包含層出土遺物をみれば、飛鳥時代後半や平安時代中頃の遺物も少なからず出土していることから、古代以降はそう遠くない場所に集落が存続していたものとみられる。

天美西遺跡の調査は今回が最初であり、本報告では遺跡の全体像について十分に検討することができなかった。ことに、調査地付近の古代から中世にかけての動向については、天美西遺跡だけではなく、大和川今池遺跡や池内遺跡など、旧西除川両岸で検出された集落全体の様相を含めて考察していく必要がある。

参考文献

大阪府教育委員会1983、『大和川今池遺跡発掘調査概要』

大阪府教育委員会1985、『府営松原天美住宅建替に伴う大和川今池遺跡発掘調査概要－松原市天美西所在－』Ⅱ

尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社、pp.315－327

櫻井久之1993、「長原遺跡の土器埋納遺構」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、pp.268－286

橋本久和1987、「中世土器の製作技法ノート(１)」：中世土器研究会編『中世土器の基礎研究』Ⅲ、pp.175－183

調査区東壁断面
（北西から）

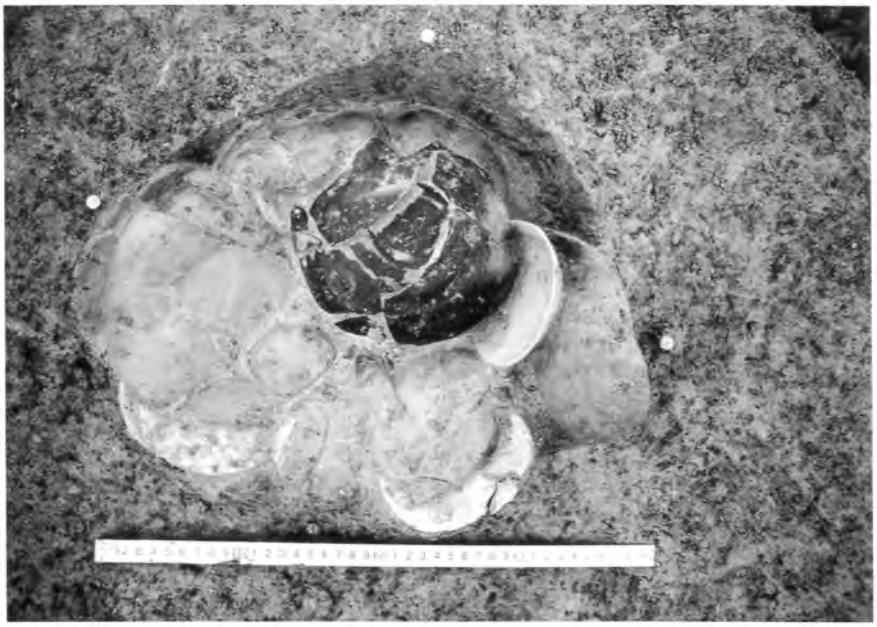
第11層上面
遺構検出状況
（北から）

第９層上面
遺構検出状況
（南から）

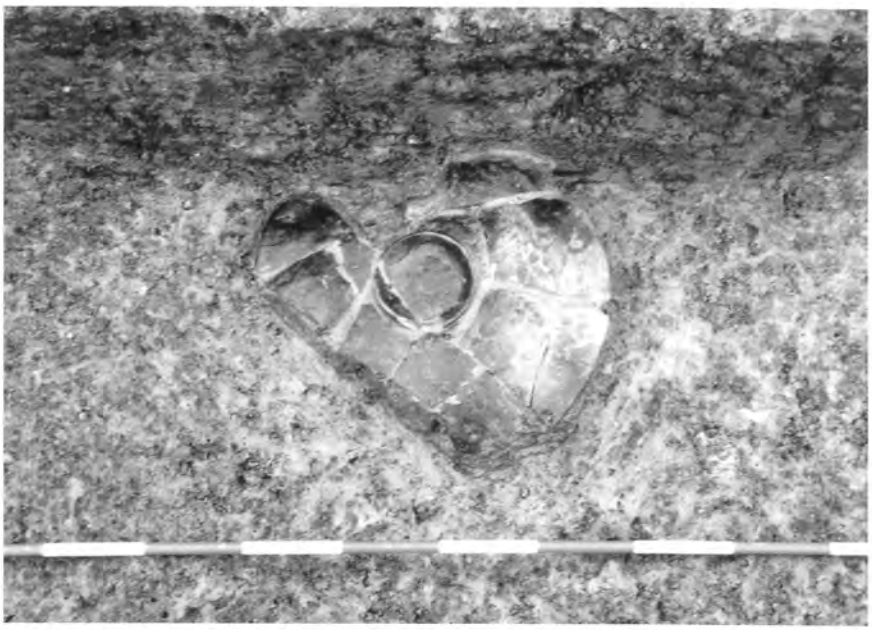
SX403土器集中個所
（西から）

土器埋納遺構SX401
遺物出土状況
（南から）

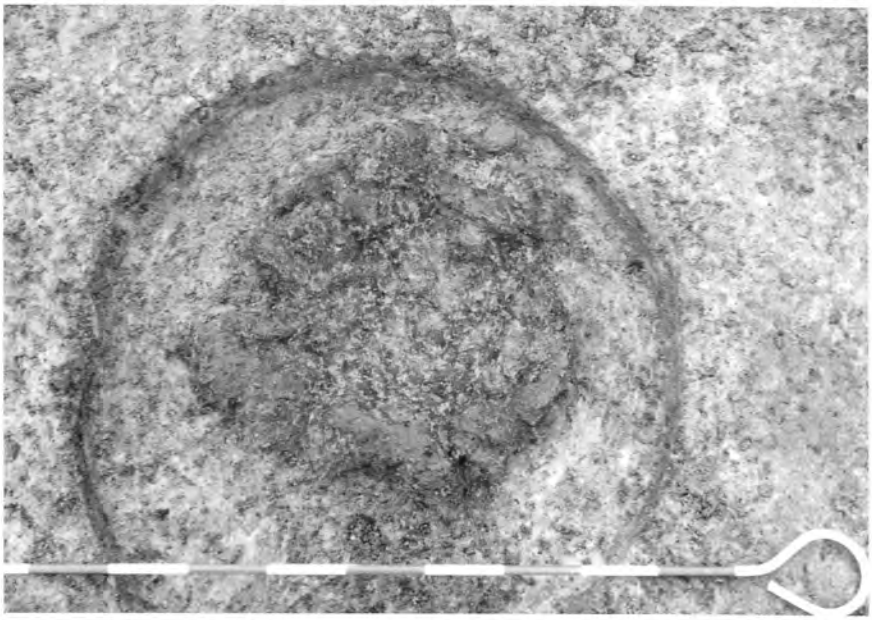
SP425遺物出土状況
（南から）



SP405遺物出土状況
（東から）



SP404遺物出土状況
（南から）



SX305検出状況
（南から）

# IX 住　吉　区

# 住吉行宮跡発掘調査（ＳＮ06－１）報告書

・調査個所　大阪市住吉区墨江２丁目62－39
・調査面積　14㎡
・調査期間　平成19年３月22日～３月28日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、高橋工

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は大阪府史跡住吉行宮正殿跡の東南東約30mに位置する。地形的には上町台地南部の西縁に当り、西側と南側に向って低くなっている。調査地周辺には古代に住吉津と呼ばれた港が存在し、交通の要衝として機能したと考えられている。また、南北朝時代には津守氏の居館が存在し、この地に後村上天皇が行幸したとされている。

周辺における既往の調査(図１)では、古代の遺物包含層がSM87－４・88－３・88－４・SN95－１・98－５次調査で確認されており、SN95－１・98－５・05－１次調査では古代の柱穴が検出されている。また、中世の遺物包含層は、SM87－１・88－４・89－２・SN95－１・98－５・05－１次調査で確認されており、このうち、SM88－４・SN95－１・98－５・05－１次調査で柱穴・土壙・溝などの遺構が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991・2000、大阪市文化財協会2005]。

当該地において建設工事が行われることとなり、平成19年３月16日に大阪市教育委員会が試掘調査を実施した。その結果、地表下約40cm以下に古代～中世の遺物包含層が確認され、本調査が行われた。

調査区は図２のとおりに設定し、現代の盛土以下第２層までを重機を用いて掘削

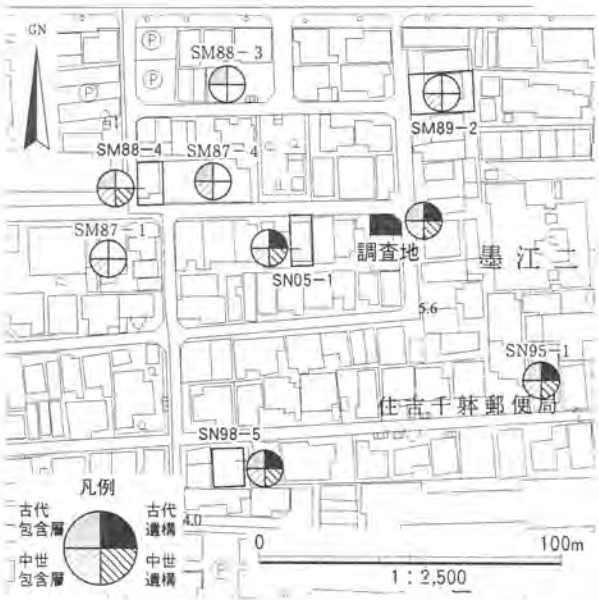



図１　調査地周辺図(明朝体は試掘調査)

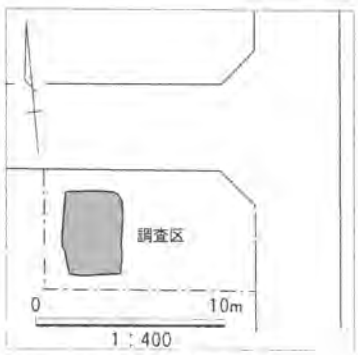



図２　調査区配置図

し、それ以外の地層・遺構は人力で掘削した。調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+○m」と記した。本報告では磁北と座標北、２種類の指北記号を用いている。

〈調査の結果〉

１．層序(図３・４)

本調査地の現地表面は周辺道路面より約30cm高くなっている。調査区内で認められた地層は以下のとおりである。

第０層：表土層で、層厚は約30cmである。

第１層：暗褐色中粒砂混り極細粒砂からなり、層厚は約20cmである。下位の第２層を母材とする盛土層である。煉瓦片や瓦片を多く含み、近代以降の堆積層である。

第２層：暗褐～黒褐色の粘土質シルト～極細粒砂からなり、層厚は最大で15cmであった。古代～中世の土器細片を多く含み、地山などの偽礫を含むことから盛土層であるとみられた。本層は地山上面で検出されたSD01～04を埋積していた。

第３層：褐色シルトからなる古土壌で、層厚は最大で15cmほどであった。調査区の南部と北部に部分的に遺存していた。調査区南部では、SD01とSA25の一部は本層上面で検出され、SP09は本層除去後の第４層上面で検出された。土師器・須恵器の細片を含み、瓦器片は含まれなかった。出土遺物から詳しい年代は決定できなかったが、後述のようにSA25が中世、SP09が飛鳥時代に属すので、本層の年代は古代である可能性がある。

第４層：褐色小礫混り粘土質シルトからなる地山である。固く締まっていた。

２．遺構と遺物(図４・５)

地山上面で、溝や柱穴などを検出した(図４)が、上述のような調査区南部の遺構検出状況から、本来、以下のとおり異なる２つの検出面に分かれ、さらに埋土の分類から３時期に分けて考えることができる。

ｉ)第４層上面の遺構

調査区南部の第４層上面で検出されたSP09は、平面形態や大きさや埋土の特徴の上で、中部以北の第１・２層基底面で検出されたSP08・21～24と類似しており、これらを同じ第４層上面検出遺構と考えた。

SP09は長径0.7m、短径0.4m、深さ0.5mほどで、北東に偏って柱の抜取り穴がみられた。掘形の埋土は地山の偽礫と灰色シルトの混合土で、飛鳥時代の須恵器杯Ｈの破片(図５－1)が出土した。SP08・21～24の出土遺物も量は多くないが土師器と須恵器に限られ、これらの遺構の年代は古代以前である可能性がある。また、後述する中世の遺構にも飛鳥時代の遺物が混入しており、この年代観を支持している。これらの遺構はいくつかが組み合って建物を形成していた可能

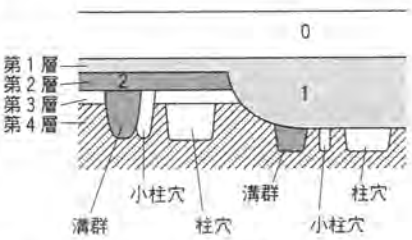


図３　層序模式図

性があるが、詳細は明らかにできなかった。

ii)第3層上面の遺構

調査区南部で、SD01とSA25の一部は第3層上面で検出された。SD01～04は第2層に属する暗褐色のシルト～極細粒砂を埋土とする点で共通する。また、SA25とほかの直径0.2～0.3m程度の小柱穴群は、その大きさや地山の偽礫を埋土にするといった共通点があり、SD01～04とは別時期と考えられる。小柱穴の中には溝に切られるものがあることから、小柱穴群は溝群に先行する。

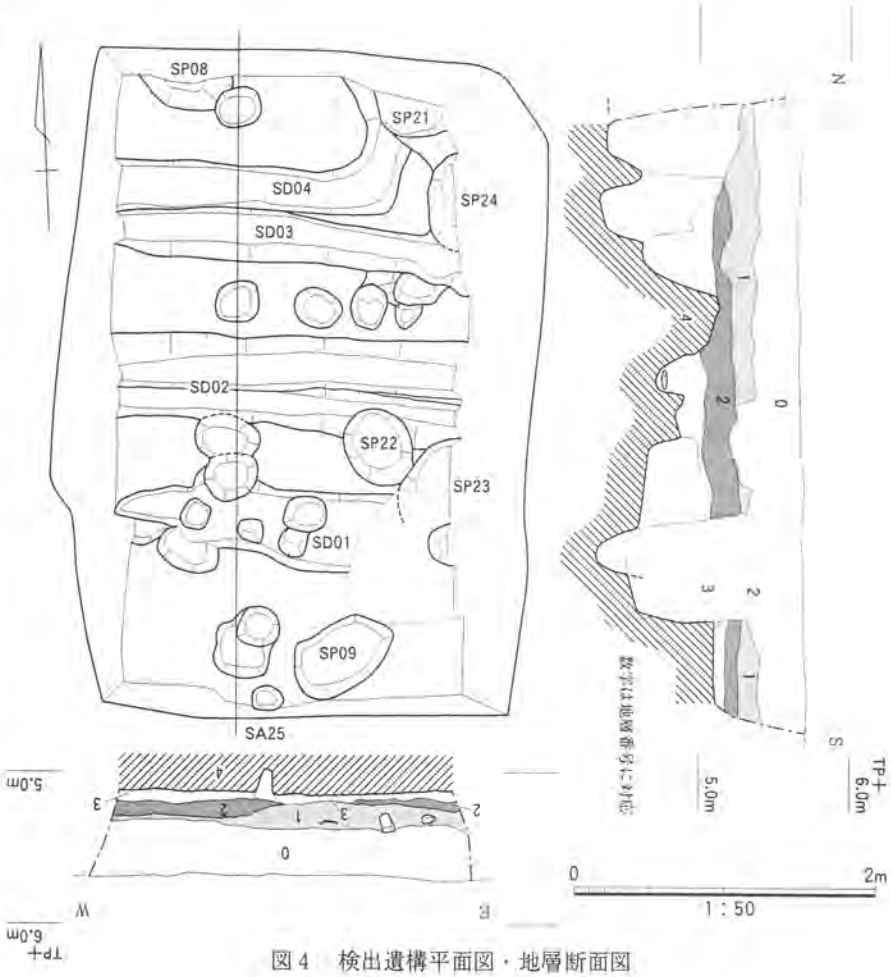



図4　検出遺構平面図・地層断面図

SD01～04は幅0.2～0.5m、深さ0.2～0.5mほどである。いずれも第2層の盛土層で埋められていた。SD02は底部で2本の溝に分かれ、本来、別の溝であったと思われる。SD01からは土師器ヘソ皿2が出土し、SD02からはミガキ調整を欠く瓦器片が、SD03からは常滑焼の破片が出土した。これらの遺物から、溝群の年代は中世とみてよく、土師器2を積極的に評価すれば14世紀頃と考えられる。

SA25はほぼ正南北の方位をもち、3間分を検出した。柱穴掘形は直径0.3mほどの円形で、柱間の寸法は平均値で1.10mである。柵ではなく、側柱建物などの一部である可能性はあるが、判断できない。時期については、掘形に瓦器の細片を含むものがあるので、中世と考えられるが詳細な時期は不明である。平面形態や大きさ、埋土の特徴がSA25と共通するほかの小柱穴群も、本来、何らかの建物を構成していた可能性があるが、その組合せは復元できなかった。

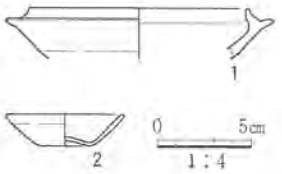



図5　出土遺物実測図
SP09(1)、SD01(2)

〈まとめ〉

今回の調査では、中世の遺構とともに古代にさかのぼる可能性がある遺構を発見した。本遺跡発見の遺構群は、古代・中世ともに、調査件数が少ないこと、大規模な発掘調査が行われていないことか

ら、未だその性格に迫りきれていない感がある。しかし、古代の遺構については、今回の調査やSN98−5次調査の成果から考えると、その出現時期が古墳時代後期から飛鳥時代頃に求められるかもしれない。こうした動態は、南住吉・山之内・遠里小野遺跡など周辺の遺跡にも共通している。特にこの3遺跡については、古代の港津である住吉津との関連を指摘されることが多い[大阪市文化財協会1998]。この地域の古代遺跡の出現については、もちろんこの点に十分に留意すべきである。しかし、同様な傾向が、本遺跡をはじめ、岸ノ里遺跡[大阪市文化財協会2003]や山坂遺跡[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996]など上町台地南部の広い地域で認められることから、住吉津以外にもいくつかの契機を考えてもよいのではないだろうか。例えば、台地東側の河内平野で5世紀に最盛期を迎え、6世紀に衰微した諸遺跡との関連、難波宮下層遺跡に代表される、上町台地北部での7世紀代の開発との関連などである。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991、「木下邸建設に伴う住吉遺跡発掘調査(SM89−2)略報」:『平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996、「宮崎邸建設に伴う発掘調査(ND94−15)略報」:『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000、「一二哲規・良子氏による建設に伴う住吉行宮跡発掘調査(SN98−5)報告書」:『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市文化財協会1998、『南住吉遺跡発掘調査報告』

大阪市文化財協会2003、「(仮称)社会福祉法人あいえる協会設立準備会による建設工事に伴う岸ノ里遺跡発掘調査(KS02−3)報告書」

大阪市文化財協会2006、「小林氏による建設に伴う住吉行宮跡発掘調査(SN05−1)報告書」

調査区全景
（東から）

遺構検出状況
（東から）

遺構完掘状況
（東から）

# Ｘ　平　　野　　区

# 長原遺跡発掘調査（ＮＧ06－５）報告書

・調査個所　　大阪市平野区長吉長原４丁目14－29
・調査面積　　50㎡
・調査期間　　平成19年３月22日～３月30日
・調査主体　　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　　文化財研究部次長　南秀雄、松本啓子

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は大阪市平野区長吉長原４丁目に所在し、現在の大和川北岸から北へ約500m、中央環状線から西へ約200mの距離にあり、長原遺跡の中では南地区に位置する（図１）。

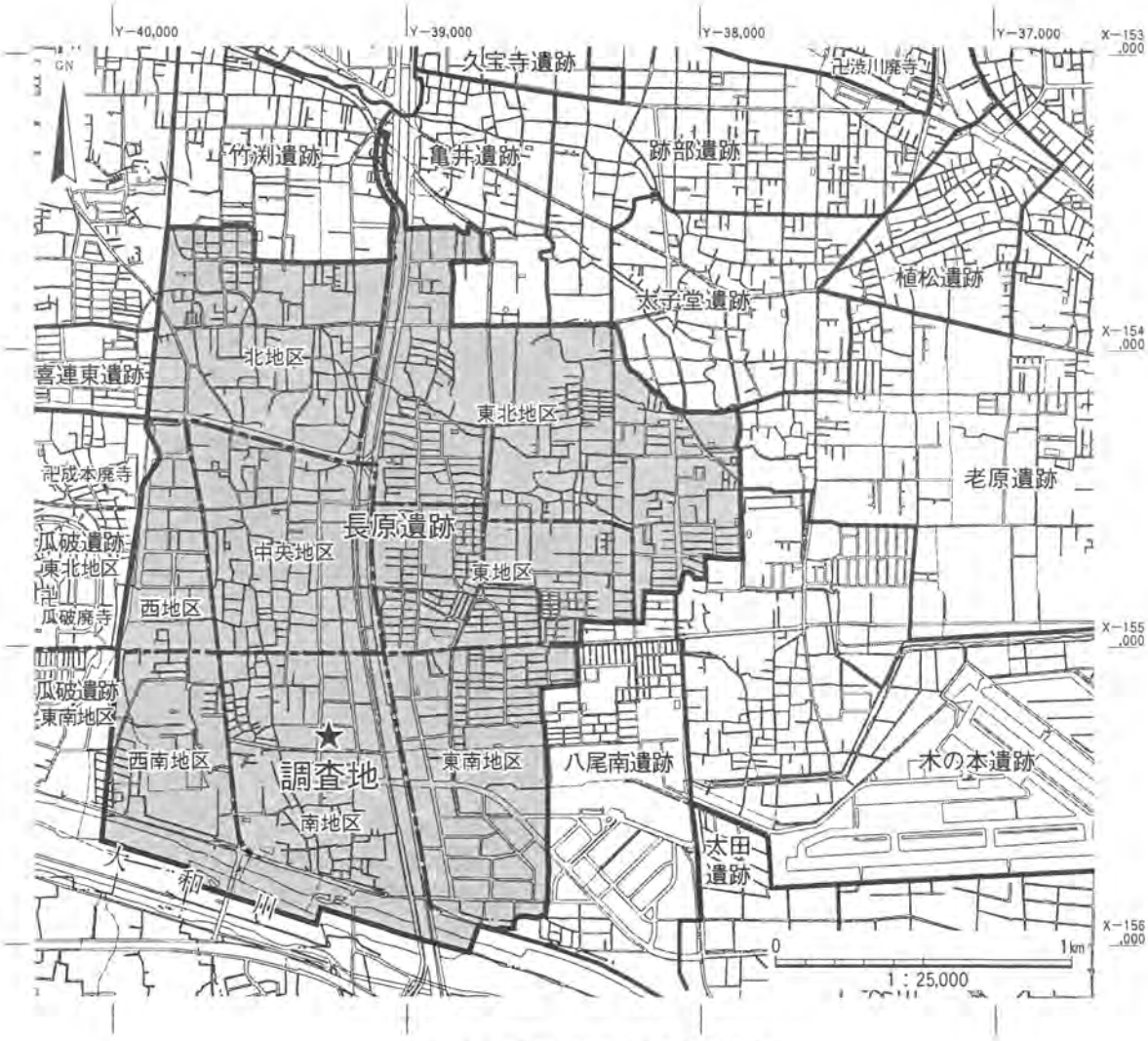



図１　長原遺跡における調査地の位置

長原遺跡南地区は小型方墳が密集して見つかっており、東南地区との境には直径約55mの円墳である塚ノ本古墳(長原1号墳)が、また西南地区との境には造出しをもつ円墳(直径約47m)の一ケ塚古墳(長原85号墳)がある[大阪文化財センター1978、大阪市文化財協会1983・1990・1999a・1999b]。本調査地は南地区のほぼ中央に位置し、塚ノ本古墳から西へ約250m(図2)、一ケ塚古墳から北東約350mの地点に当る。また、本調査地に近い位置にある古墳は、西側に接する道路で見つかった長原64～69号墳、東側道路で長原61～63・70号墳(NG82－19・83－11次)、北側の道路で長原131・132号墳(NG85－34次)などがある(図7)。さらに北側のNG92－92次調査で見つかった長原200号墳は、主体部も遺存しており、中から供献土器とともに鉄剣が出土した[大阪市文化財協会1990・1992・1993・2006]。また、これら古墳の上層では、飛鳥～奈良時代の水田や、平安時代の井戸なども見つかっている[大阪市文化財協会2006]。

これらを受けて、図3のとおり、調査地東半に5m×10mの調査区を設定し、古墳や古代の水田の確認を主目的として、2007年3月22日より調査を開始した。周辺の調査結果に基づき、中世以降の作土層から現代の作土・表土層までを重機により除去し、NG6層以下、地山までの間を人力によって調査した。調査成果は随時、写真・図面で記録した。2007年3月30日に埋戻しを行い、調査を完了した。

なお、調査で使用した座標値は大阪市道路状況図(1:500)を基に変換した世界測地系によるものである。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP＋○mと表記している。

図2　今回の調査地と周辺の調査
(数字は調査次数で、当協会の調査地を示す。
中央環状線内は(財)大阪文化財センターの調査地)

図3　調査地位置図

〈調査の結果〉

1．層序

第1～4層までは重機により除去したので、断面の観察によるものである(図4・5、図版中段)。

第1層：現代の作土と盛土層である。調査区南半部にあった池を埋めた後に、合わせて2回客土をしている(層厚35cm)。その上は調査直前まで耕作していた畠の作土となっている。

第2層：にぶい黄褐色砂礫混りシルト主体の地層で、マンガンや鉄分を含む。非常に締りがゆるく、中世以降の作土層である。層厚は約35cmである。

第3層：黄褐色細粒砂混り粘土質シルト主体の地層で、マンガンや鉄分を含む。第2層よりも粘土質が強く、やや締りが良い。第2層と同様に中世以降の作土層で、層厚は約50cmである。

第4層：にぶい黄褐色粘土質シルトを主体とする水成層で、層厚は最大10cmである。中世焼締陶器の破片が出土した。NG3層またはNG4層に相当する地層である。

第5層：褐色極細粒砂混り粘土質シルトを主体とする作土層で、鉄分やマンガンを含む。層厚は約20cmである。本層はさらに3層に細分できる。上から順に、鉄分の多い黄褐色粘土質シルト層(第5a層)、にぶい黄褐色極細粒砂～シルト層(第5b層)、マンガンを含む褐色極細粒砂混りシルト質粘土層(第5c層)である。第5c層上面で畦畔を検出した。畦畔は第6層由来の灰黄褐色シルト質粘土を積んで造られている。第5c層から土師器の破片が出土した。第5層はNG6層またはNG7層上部に相当する古代の地層である。

第6層：水成の黄灰色シルト質粘土層で、下半部は暗色化した灰黄褐色シルト質粘土となっている。層厚は最大25cmである。弥生土器・土師器・埴輪などが出土した。NG7層上部に相当する古代の地層である。

第7層：調査区の中で部分的に見られる灰黄褐色シルト層で、細かい粘土偽礫が混る。層厚は10cmほどである。大半は削平されている。調査区南東隅の落込みを埋める。遺物は出土していないが、NG7層に相当する古墳時代の地層である。

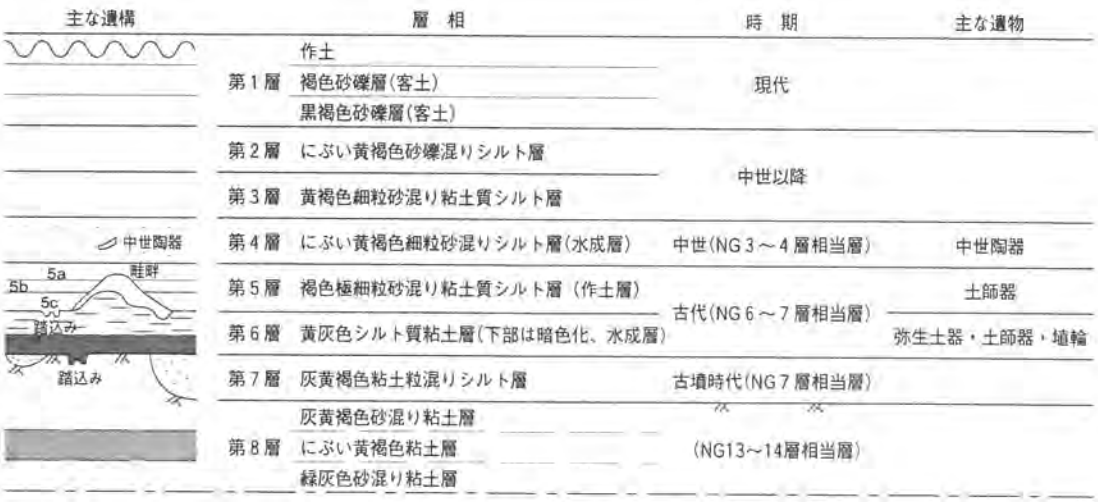
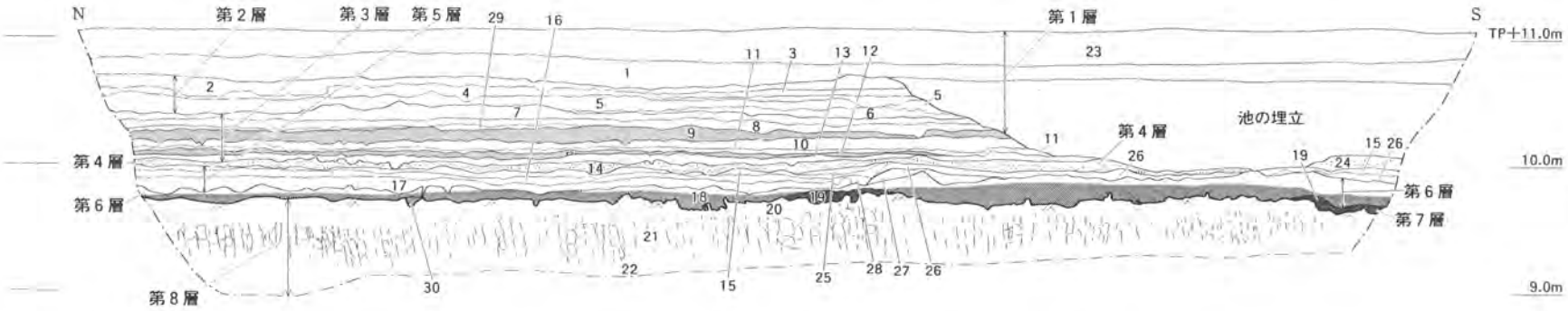



図4　層序と遺構の関係




1：黒褐色(2.5Y3／2)砂礫(固い)
2：にぶい黄褐色(10YR5／4)砂礫混りシルト(マンガン多い)
3：にぶい黄褐色(10YR4／3)砂混りシルト(マンガン)
4：にぶい黄褐色(10YR5／3)砂混り粘土質シルト(マンガン)
5：にぶい黄色(2.5Y6／4)砂混り粘土質シルト(鉄、マンガン)
6：黄褐色(2.5Y5／4)砂混り粘土質シルト(鉄、マンガン少し)
7：にぶい黄色(2.5Y6／4)砂～シルト(鉄、マンガン少し)
8：明黄褐色(2.5Y6／6)砂混り粘土質シルト(鉄)
9：黄褐色(2.5Y5／4)細粒砂混り粘土質シルト(マンガン)
10：にぶい黄褐色(10YR5／4)極細粒砂混り粘土質シルト
11：黄橙色(2.5Y6／3)極細粒砂混りシルト(鉄多い)
12：灰黄褐色(10YR4／2)シルト～粘土質シルト
13：にぶい黄色(2.5Y6／3)細粒砂混りシルト(鉄、マンガン少し)
14：浅黄色(2.5Y7／4)細粒砂混りシルト
15：黄褐色(10YR5／6)粘土質シルト(鉄)：第5a層
16：にぶい黄褐色(10YR5／4)極細粒砂～シルト(鉄)：第5b層
17：褐色(10YR4／4)極細粒砂混りシルト質粘土(マンガン)：第5c層
18：黄灰色(2.5Y6／1)シルト質粘土(上部)、灰黄褐色(10YR4／2)シルト質粘土(下部)
19：暗オリーブ褐色(2.5Y3／3)粘土粒混りシルト～粘土質シルト
20：灰黄褐色(10YR6／2)砂混り粘土(上から鉄)
21：にぶい黄褐色(10YR5／3)粘土(灰色粘土が亀裂状に入る)
22：緑灰色(7.5GY6／1)砂混り粘土
23：褐色(7.5YR4／4)砂礫
24：にぶい黄色(2.5Y6／4)細粒砂混りシルト
25：にぶい黄色(2.5Y6／3)極細粒砂混りシルト質粘土(鉄、マンガン)
26：灰黄褐色(10YR5／2)シルト質粘土(鉄を多く含む)
27：灰黄褐色(10YR4／2)シルト混り粘土(マンガン、鉄、畦畔)
28：にぶい黄褐色(10YR5／4)シルト混り粘土(マンガン)
29：黄褐色(2.5Y5／6)細粒砂混り粘土質シルト(鉄、マンガン)
30：オリーブ褐色(2.5Y4／3)極細粒砂混り粘土

0　2m
1：50

図5　東壁断面図

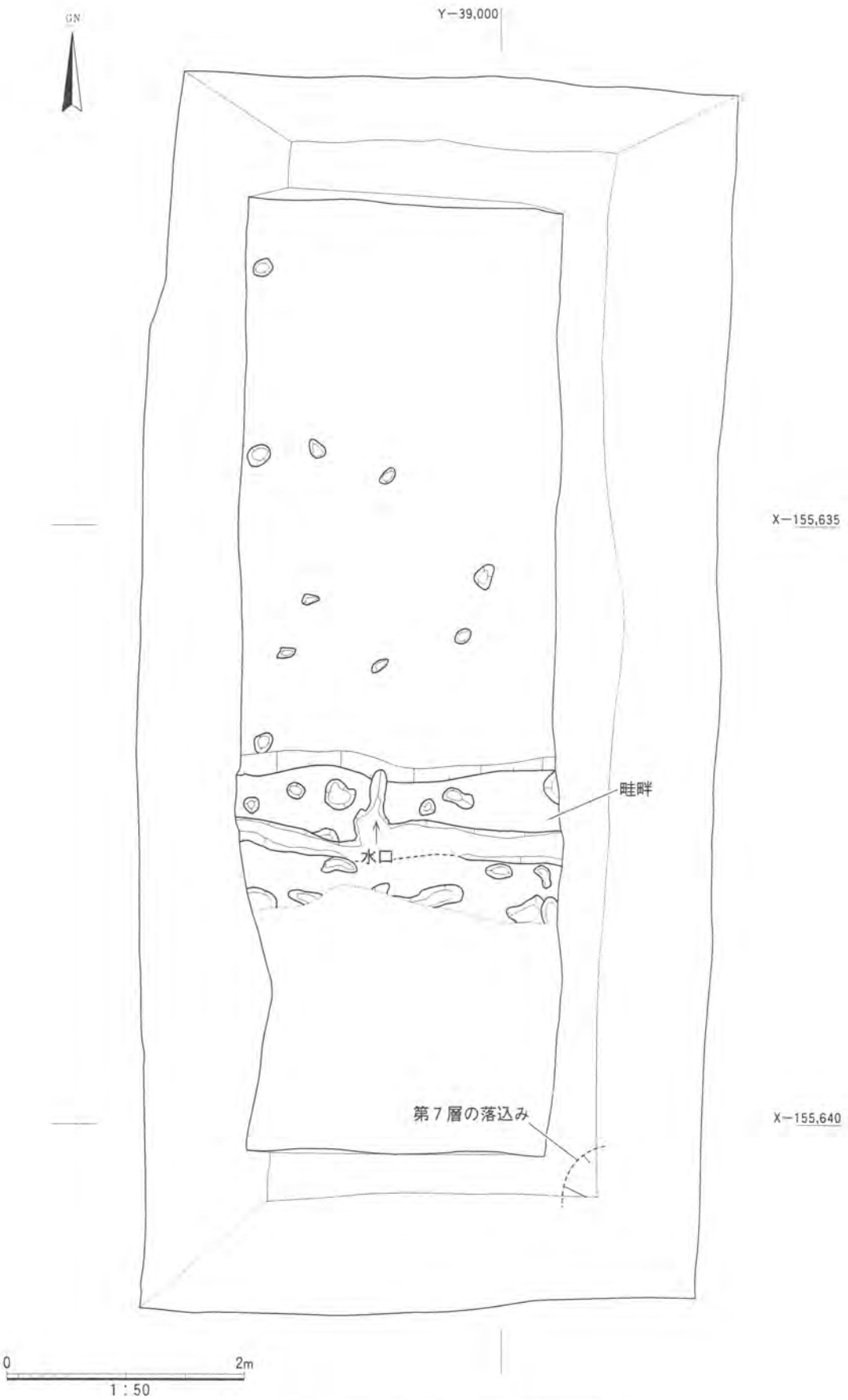



図６　第5c層上面の遺構と第７層の落込み

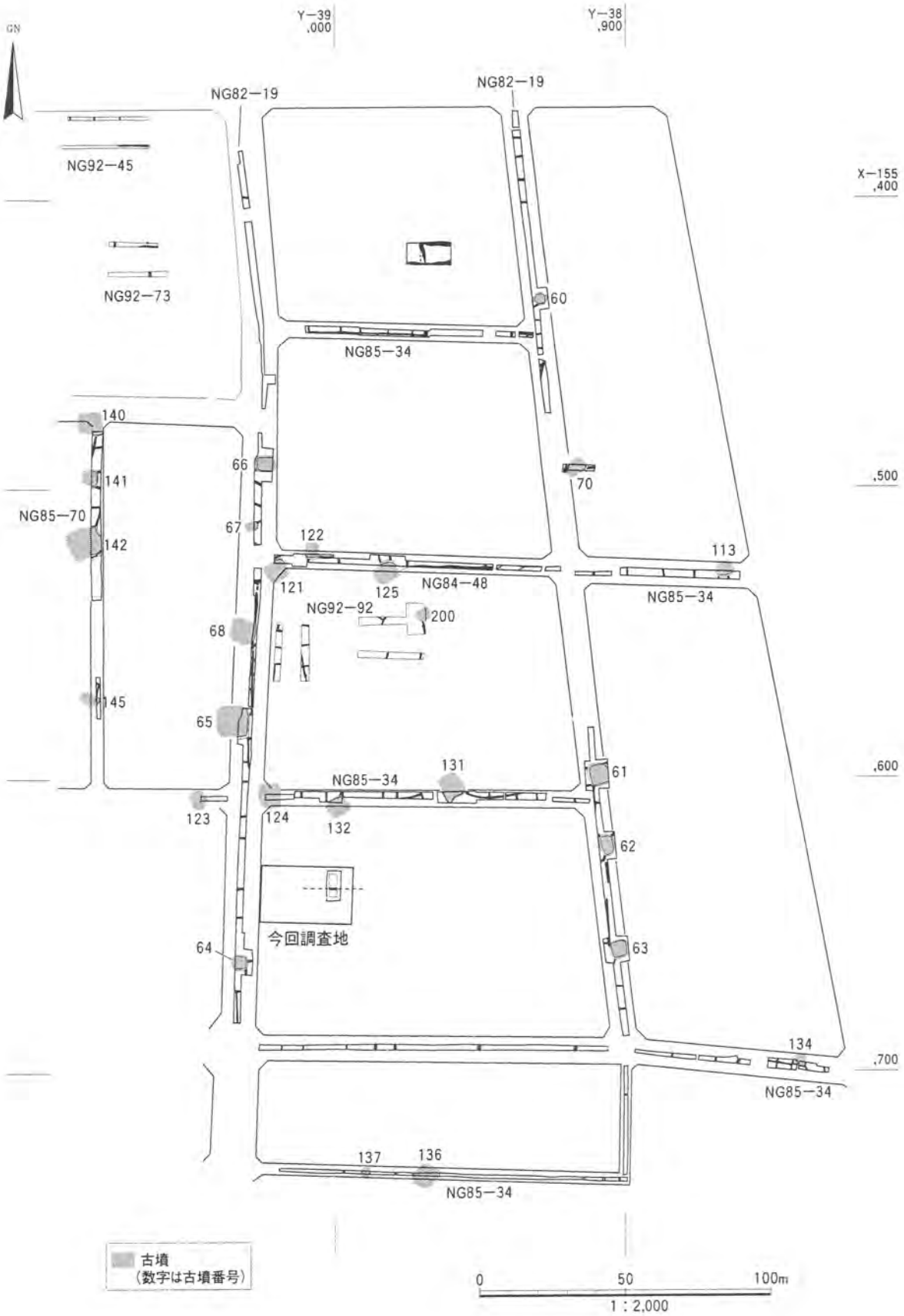



図7　調査地周辺の古墳と古代の水田

第８層：上から順に、灰黄褐色砂混り粘土層(層厚最大25cm)、乾痕が顕著なにぶい黄褐色粘土層(層厚最大30cm)、緑灰色砂混り粘土層(層厚30cm以上)となる地層である。本層上面に第６層下半部で埋る踏込みが見られた。出土遺物はなく、NG13～14層に相当する低位段丘構成層と考えられる。

２．遺構と遺物

第5c層上面で東西方向の畦畔を検出した(図６・図版上段)。第６層を削込んで、上端で幅約0.6m、高さ0.15mほどの畦畔を造り、その両側を耕作している。耕作面は畦畔より東側がやや高い。畦畔は第６層由来の粘土で積まれており、2.7m分検出した。畦畔の中央部に深さ約0.05m、幅約0.1mの南北方向の切れ目があり、ここが水口である可能性がある。第5c層から土師器の破片が、また第６層から土師器・埴輪・弥生土器の破片が出土したが、時期の判別できるものではない。調査地周辺でも同様の南北・東西方向の古代の畦畔が検出されていて(図７)、今回検出された畦畔も同じ頃のものである可能性が高いと考えられる。

調査区南東隅の壁面で確認した第７層の落込みは(図６に推定される位置を図示)、0.2mほど落込んでいる。第６層から埴輪が出土している(図版下段)ことなども考え合わせると、古墳の周溝の可能性がある。

〈まとめ〉

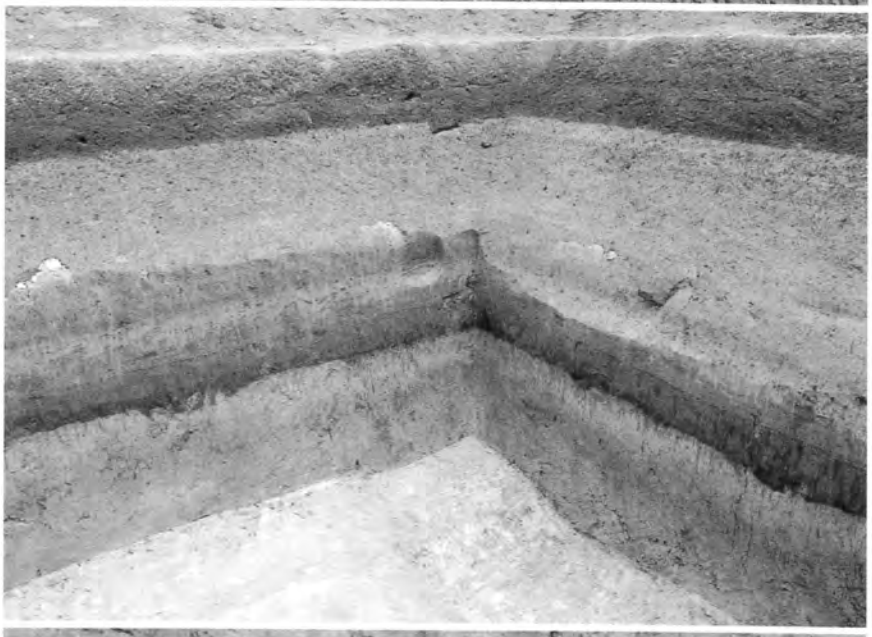
今回の調査では、調査の主目的のひとつの、周辺で検出されている古代の水田に繋がる東西方向の畦畔は検出することができたが、調査区内に古墳の存在を直接証明する証拠を見つけることはできなかった。しかし、調査区南東隅で第７層が落込むことや、第６層に破片ながら埴輪が含まれることなど、近辺に古墳が存在することを窺わせる資料を得ることができた。今後の調査成果も合わせて、さらなる検討を行いたい。

参考文献

大阪市文化財協会1982、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ
2006、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅷ
1990、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
1999a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅻ
1999b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅣ
大阪文化財センター1978、『長原』

第5c層上面の遺構
（西から）

北壁・東壁断面
（南西から）



第６層出土の埴輪

平成18年度　大阪市内埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

発行日　平成20年2月28日

発行　大阪市教育委員会
(財)大阪市文化財協会

編集　大阪市教育委員会文化財保護担当
(大阪市北区中之島1－3－20)

印刷　和泉出版印刷株式会社